

や肩車で渡る人夫たち。



724 志まだ

☆ 〈かなや〉

※ピーター・モース・コレクションでは欠落。曲がりくねった宿場の間の路を行く旅人たち。

725 かなや



☆ 〈につさか〉

※「名物わらびもち」の看板のある店で食す旅人二人。奥に蒸籠がある。

726 につさか

☆ 〈かけ川〉

※姉さんかぶりの母親が赤子を背負いながら蓑を編んでいる。子どもも側で手伝っている。

727 かけ川



☆ 〈ふくろい〉

※背負い籠を背負い、独鈷の杖を持っていく六十六部の修行者とすれ違う三度笠と合羽姿の旅人二人。

728 ふくろい

☆ 〈ミつけ〉

※「新そば 代十六文」の看板のある店で蕎麦を食う旅人と、その側で両手をついて休む男。

729 ミつけ



☆ 〈はまゝつ〉

※遠くに浜松城。手前の川には渡し船が二艘。

730 はまゝつ

☆ 〈まへさか〉

※海辺の巨大な松が二本。その下の茶屋で休む人々。

731 まへさか



※松林を挟んで手前と向こうの海に帆かけ船が数艘浮かんでいる。

「今切の渡し」は舞阪と荒井の間を結ぶ。



732 あら井

☆ 〈しらすか〉

※「名物柏餅」の看板のある店先で、餅をこねる男と女。

733 しらすか



☆ 〈ふた川〉

※旅人を乗せた駕籠かきが、駕籠を下ろし向こうの大きな観音像を指差している。

734 ふた川

☆ 〈よしだ〉

※朝鮮来朝使が長煙管をふかしながら馬に乗り、馬子も煙管を銜えながら馬を牽いている。馬の腹がけに版元の鶴屋金助を示す「鶴」の字がある。

735 よしだ



☆ 〈ごゆ〉

※宿の女が通りがかった旅人を呼び入れようとしている。

736 ごゆ

☆ 〈あかさか〉

※赤坂宿に行く旅人を鳥瞰で描く。

737 あかさか



☆ 〈ふじ川〉

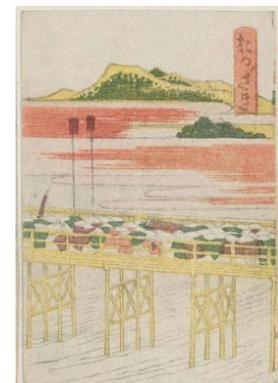
※「三枘屋」の暖簾のある店先で休む女と、その前を荷物を背負った男が行く。

738 ふじ川

☆ 〈おかざき〉

※橋の上に行く大名行列の囃。

739 おかざき



☆ 〈ち理う〉

※白馬や栗毛馬四頭を品定めする二人の男。この地では馬市が多く



開かれた。
740 ち里う

☆ 〈なるミ〉

※衣が干してある部屋で、女が絞りの布を持ちあげている。鳴海絞なるみしぼりで有名。

741 なるミ



☆ 〈みや〉

※帆掛け船が二艘海を行く。人物は描かれない。ここから桑名まで東海道唯一の海路。

742 みや

☆ 〈くわな〉

※蛤はまぐりを焼いている女と、その前で注文する旅人。

743 くわな



☆ 〈四日市〉

※木の鳥居の前の旅人。伊勢神宮への道との分岐点の宿場。横には「まんぢう」と書かれた幟のぼりのある店の屋根。

744 四日市

☆ 〈石やくし〉

※石薬師の堂を鳥瞰で描く。その前に参詣人たち。

745 石やくし



☆ 〈せうの〉

※継ぎ飛脚が二人走っている。遠景の山間からは日が昇っている。

746 せうの

☆ 〈か免山〉

※亀山城を描く。人物は描かれない。

747 か免山



☆ 〈せき〉

※大きな樽の風呂に入る男が二人。「ふろや」と書かれた店。



748 せき

☆ 〈さかのした〉

※山間に挟まれた街道を行く旅人たち。

749 さかのした



☆ 〈つちやま〉

※雨の中、合羽や蓑を着た旅人が三人行く。

750 つちやま

〈みなくち〉

※茶屋で休む人々と馬が一頭。

751 みなくち



☆ 〈いしべ〉

※暖簾のある店先で、包丁で高菜を切る女。

石部は高菜飯が名物。看板と暖簾に記された「女川」は、浅草広小路の菜飯で有名な店の屋号で、有名店にあやかっただろう。

752 いしべ

☆ 〈くさ津〉

※「和中散」の看板のある店先の旅人たち。和中散は道中薬で、この地で生産された。

753 くさ津



☆ 〈大津〉

※鬼の大津絵を描く画工。大津絵は、人物や動物などを教訓的にデフォルメして描き、旅人の土産としていた。

754 大津

☆ 〈京一〉

※衣冠束帯の貴人が、笏を持って行く。側には供人たち。

755 京一



☆ 〈其二〉

※仕丁が二人座って平伏している。

●錦絵『東海道五十三次 絵本駅路鈴』（文化3年～7年〈1806～10〉。「東海道五十三次」物の一。人物中心に描かれる。縦中判色摺。無款。全56図。各平均22.8×17.0 伊勢屋利兵衛版。東京富士美術館/太田記念美術館：長瀬コレクション/国立国会図書館/名古屋市博物館/島根県立美術館：永田コレクション/東洋文庫：岩崎文庫蔵）

※画面上部中央に隸書で横書きの駅名が記され、ふりがなが付けられる。画面右側に小さく「東海道五十三次」と駅番が縦に記されているものとなないものがある。人物中心の図。最終図の「大内山」に北斎の落款のあるものがあったという（『北斎美術館2 風景画』P71 及び『名品揃物浮世絵9 北斎II』所収「北斎の東海道（二）『浮世絵界』第五卷六号 昭和15年6月刊 浮世絵同好会」による）

※完結後に帖仕立て（一冊本と二冊本）にして販売。この本の最後が〈京都〉と〈大内山〉となっているが、その他は初摺判に同じ。

※「北斎画」の落款があり、最後の〈大内山〉がない版もある。

☆〈日本橋〉

※魚を入れた大きな籠を頭上に掲げて歩く男。上半身裸で天秤棒を担ぐ男。袴姿で笠を被った侍や女たちが橋を渡る。遠くに江戸城が望まれる。

757 日本橋（島根県立美術館）

☆〈品川〉（23.1×17.2 すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション蔵）



※遊郭の部屋から格子窓を通して海を眺める遊女と、その傍で立ち話をする二人の遊女。その脇では仲居が盆に椀を乗せて遊女たちを見ているが、極端に小さく描かれている。遠くに帆船が浮かび、富士山が見える。

758 品川（島根県立美術館）

☆〈川崎〉

※川辺で馬に乗っている男や、荷物に腰を下ろして多摩川を渡る舟の着くのを待っている旅人たち。

759 川崎（東京富士美術館）

☆〈神奈川〉（22.7×17.1）

※窓から海の見える部屋で、二人の芸妓たちと食事をしている二人の男。芸妓の後ろには黒い三味線箱が置かれ、衣桁には着物がかかっている。

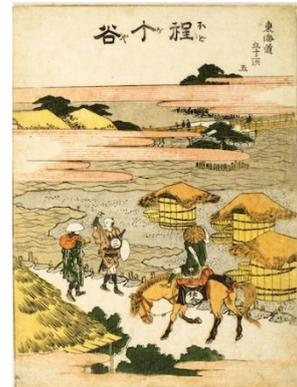




760 神奈川 (東京富士美術館)

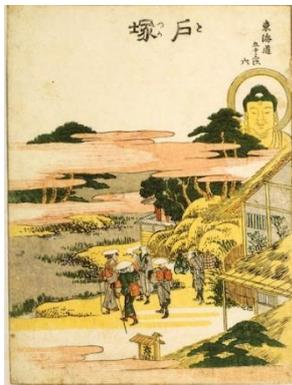
☆ 〈程ヶ谷〉 (21.9×15.7)

※「仕合」と染め抜いた腹がけをした馬の鞍に左手を置いて乗っている男と、向かい合わせに来る二人の旅人。男の腹がけには「三」の文字が記されている。砂浜には大きな桶が三つ並び、その上に筵が掛けられている。



761 程ヶ谷 (東京富士美術館)

☆ 〈戸塚〉 (22.4×16.6)



※巨大な観音像の上半身が松林の背後に見える街道を行く男女の旅人。手前の屋根越しに「大仏」と書かれた看板が見える。

762 戸塚 (東京富士美術館)

☆ 〈藤澤〉 (22.8×17.0)

※二頭の牛が浜辺を行く。一頭に子どもが乗り、一頭に牛飼いが棒で牛を操っている。旅人が背を向け歩いて行く。

763 藤澤 (藤沢浮世絵美術館)



☆ 〈平塚〉

※石の鳥居と松の木のある街道を行く侍と、荷物箱を担ぐ二人の従者。その脇で「吉」と染めた腹掛けをする馬を休ませている馬子がいる。

☆ 〈大磯〉

※「とら子石注」と彫られた大きな石碑を見る旅人や、天秤棒を担ぐ行商人たち。
注) とら子石：虎子石、虎石、虎御石とも。延台寺 (現神奈川県中郡大磯町大磯1054) の虎が石が有名で、曾我十郎祐成を賊の矢から防いだところから、身代わり石と呼ばれ、曾我十郎祐成の妾であった遊女虎御前に因んで「虎子石」といわれたとも伝えられる。その他いくつかの伝説がある。当時、図のような大きな石碑があったかどうかは不明

764 大磯 (慶応大学図書館)

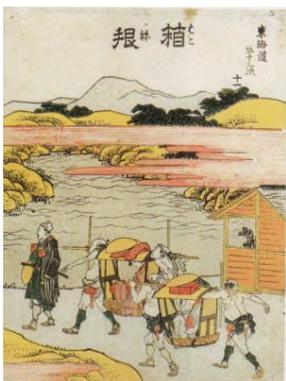


☆ 〈小田原〉 (22.7×17.0)

※莫座を日除けにした茶屋で腰掛けて休む三人の旅人に向かって、手を上げて挨拶する男。

☆ 〈箱根〉 (22.8×17.0)

765 箱根



※二台の駕籠にそれぞれ乗る婦人と、前に行く旅姿の男が山道を行く。

☆〈貳島〉(22.8×17.0)

※三島神社の鳥居前を行く侍と供人たち。石垣を丸く組んだ台が描かれる。

☆〈沼津〉(22.5×16.9)

※千本松原沿いの街道を女旅人が山駕籠注に乗っている。その後ろには鬘を手拭いで覆って、刀を差した共の男が煙管で一服し、松の木陰では駕籠かきが暑さをしのいでいる図。

注) 山駕籠：駕籠の両脇に簾がない駕籠。旅人が道中で乗る一般的な駕籠。

☆〈原〉(22.8×17.0)

※江戸参府の朝鮮通信使の一行が真近な富士山の裾野を見ながら進む図。

766 原 (島根県立美術館)



☆〈吉原〉

※名物の白酒つくりで、臼を挽く男と子ども。臼を回す棒に括りつけた紐の先の横棒を引く二人の女。

☆〈蒲原〉(22.0×15.3)

※砂浜で桶に海水を汲む男女。後ろには塩焼の窯に火が燃えている。海岸は白浜が続き塩作りに適していた。

☆〈由井〉(22.0×15.3)

※袴姿の二人の侍の前で、扁額に文字を書く異国風の男。その側で墨を摺る小坊主。

☆〈奥津〉(22.9×16.6 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵)

※二人の旅人が話をしながら街道を行く。対岸には松林が続いている。

☆〈江尻〉(22.9×17.2)

※馬子が馬の背で煙管をくわえて休んでいる隣では、折りたたんだ駕籠の背負い棒を肩に担いでいる駕籠かき。

☆〈府中〉(22.9×17.2)

※部屋で談笑する二人の遊女。廊下ではもう一人の遊女が猫を抱いている。

☆〈鞠子〉(21.8×15.5)

※「御泊屋」の看板のある縁側で、宿屋の主人が名物のとろろを力を入れて擦っている。女がすり鉢を両手で支えている。側でもう一人の女が、おろし金で長芋を擦っている。とろろ汁は鞠子の名物。店先には版元の伊勢屋利兵衛の定紋が染められた布を背に掛けた馬と、そこから荷物を下ろそうとしている旅人。

☆〈岡部〉(22.8×17.2)

※「い勢屋」と染め抜いた暖簾の掛かる宿場の縁台に、団扇を持って胡座をかいて休む二人の旅人。その前で馬が荷物を下ろされて休んでいる。

☆〈藤枝〉(23.2×17.4)

※「二十三夜供養塔」と彫られた石碑のある街道を、手拭いを被った女と箱を背負った男が行く。そこにすれ違う旅人の男が二人。遠くには紅葉が咲いている。

注) 二十三夜供養塔：庚申講と同様、民間信仰のひとつ。人々が集まって月を信仰の対象として「講中」といわれる仲間が集まり、飲食をし、お経などを唱えて月を拝み、悪霊を追い払うという月待行事を行い、その記念や供養のあかしとして建てられたもの
〔wikipedia〕より)



☆ 〈嶋田〉

※川越しの人足四人が焚き火で暖を取っている。もう一人の人足が旅人に川越を誘っている。

☆ 〈金谷〉 (22.8×17.2)

※雄大な富士山を背景に、図の下に、坂道を往来する旅人が描かれる。

☆ 〈日坂〉 (23.0×17.2)

※笠を被り、うつむいて馬の背で煙管をくわえて休む馬子。その側を坊主と侍が通りかかり、馬に乗ろうかと思案している。

☆ 〈掛川〉 (23.2×17.3)

※空には三本の遠州凧が揚がり、馬の背で煙管をくわえて休む侍と槍持ちの男。馬の脇には笠を被ったもう一人の旅姿の男が立っている。

☆ 〈袋井〉



※荷物を担ぐ行商人や僧侶、先を行く侍など。前方に老松の大木がある。

768 袋井 (山星書店 Web より)

☆ 〈見附〉 (23.0×17.2)

※大名行列の先頭を行く槍持ちと、荷物を背負った馬が松の木の側でやすんでいる。

☆ 〈濱松〉 (22.8×17.1)

※柴木の束を置いて休む女が二人。一人は草鞋の紐を直そうとしやがんでいる。後ろの土手の上でも三人の旅人が休んでいる。

769 濱松 (「名品揃物浮世絵 9 北斎Ⅱ」より転載)



☆ 〈舞坂〉 (23.0×16.7)

※荒井との間の「今切の渡し」の船着き場で舟に乗せる荷物を点検しているのだろうか、刀を差した旅人が何かを指示している。沖には松林の小島。更に水平線には帆掛け船の帆が並び、朝日が昇ろうとしている。

☆ 〈荒井〉 (22.9×16.5)

※関所の調べ所の前で土下座している男が二人。部屋では役人が書類を見ている。土下座している後には二頭の馬が荷を下ろして待っている。

☆〈白須賀〉 (22.0×15.5)

※海辺の道で笠を差し上げて遠くを見ている旅人と、天秤の荷物を下ろしている供の男。道端に座り、釣り糸を垂れる旅の途中の男。その隣に腰掛けて遠くを指さす男。遠く水平線には四隻の帆が見える。

☆〈双川〉 (22.8×17.1 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵)

※川のこちら側で休む旅人。一人は馬に乗り、一人は荷物に腰を下ろし煙管をくわえている。一人は立って、全員が川の向こうを見ている。馬の足元には馬子がしゃがんでいる。

☆〈吉田〉 (22.9×17.1)

※豊川橋を渡る四人の旅人。合羽に笠の男について行く荷物を担いだ人足。その後ろには道中差しの二人の男が歩く。

☆〈御油〉 (22.8×17.0)

※「庚申塔」と彫られた石碑のある路に立つ旅人と、天秤棒の荷物を担ぐ人足。旅人の前には腰を下ろして荷物の整理をする男。

☆〈赤坂〉 (22.8×17.1)

※「うんどん」の文字のある看板のある茶店で茶を飲む手拭いを被っている男と、同じく手拭いを被って立っている女旅人。

☆〈藤川〉 (22.8×17.0 太田記念美術館：ピーター・モース・コレクション)

※馬に乗り、来た方向をふり返る女と、笠を被って馬の世話をする馬子。

770 藤川 (島根県立美術館)



☆〈岡崎〉 (23.2×17.3 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵)

※雪降る中、長い矢作橋を埋めるように渡る大名行列。遠くの岡崎城に向かっている。

☆〈池鯉鮒〉 (23.2×17.5)

※柄のついた大きな網を立てて持ち、捕まえた大きな鯉が路で跳ねている様子を、もう一人の子供と腰蓑を着けた漁師とともに見ている。この地にあった殺生禁断の池に鮒や鯉が多く生息していたところからつけられた地名という。現在は、知立と表記する。

☆〈鳴海〉 (22.8×17.2 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵)

※名産の絞り染(鳴海絞)を造るため、糸で布を括る作業をしている婦人の前に布を差し出す客。手前には柱に紐を結わえ、強く引いて布を括る職人。鳴海は、現在の名古屋市。

☆〈宮〉 (22.8×17.1) ※二艘の五大力船が沖に向かっている。桑名と宮の間には「七里の渡し」があった。

☆〈桑名〉 (22.9×17.1)

※道筋で蛤を団扇で扇ぎながら焼いている女。その前で二人の旅人が腰を下ろして焼き上がるのを待っている。女の脇には箆に入れた蛤を持ってきた子どもがいる。

☆〈四日市〉 (23.3×17.6 四日市市立博物館蔵)

※日永（現三重県四日市市日永）の「追分 参宮みち」の道標のある追分の図。東海道と伊勢神宮への伊勢街道との分岐点。小さい鳥居の側の饅頭屋。その前に立っている、三度笠を被り縞の合羽姿の旅人の後ろ姿に向け、伊勢参りの二人の旅人が柄杓や笠を差しだして施しを求めている図。

☆〈石薬師〉（23.3×17.3）

※「うなぎ」の箱看板が置かれた店の前の小さな板橋の上に立つ二人の旅人。橋の脇には桜が咲いている。771 石薬師（尾道市立美術館）



☆〈庄野〉（23.0×16.6）

※「左 大神宮道」と彫られた石の道標の横には小さな祠があり、その前で牛に乗った子どもと、牛を牽く牛飼い。

☆〈亀山〉（23.3×17.2）

※茶店でくつろぐ旅姿の男にお茶を差し出す店の女。縁台の脇では跪いて足回りを直す男。

☆〈関〉（22.8×17.1 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）雪景色の寺社の境内を行く四人の男の合羽にも雪が積もっている。

☆〈坂の下〉（23.3×17.3）

※寺の縁側で天蓋を脱いで脇に置き、腰を下ろして休む虚無僧。縁側の下では女が煙管を手にして虚無僧を見つめ、その脇で子どもが横笛を吹いている。



☆〈土山〉（22.8×17.1）

※紅葉の咲く山道の途中に岩を掘り抜いて格子を填めた洞があり、その前を行く旅人と駕籠かき。

772 土山（島根県立美術館）

☆〈水口〉（22.8×17.2）



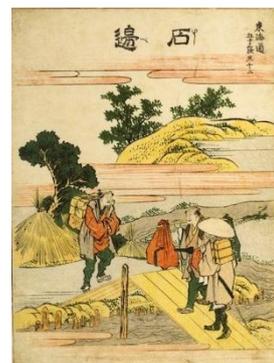
※「東海屋 水口宿」と書かれた道標の前の店には「ところてん」と書かれた看板がある。店の中では畳に胡坐をかいて休む旅人と、手拭を被った女たちが仕事をしながら店先を見ている。店先には旅装束の男が歩き、その後ろには天秤の荷物を担ぐ、上半身裸の人足がついて行く。

773 水口（東京富士美術館）

☆〈石邊〉（22.9×17.2）

※狭く小さな山形の板橋を渡る旅人。一人は振り分け荷物を担ぎ、一人は天秤の荷物を担ぐ。橋の向こうには背中に荷物を背負っている男が橋の空くのを待っている。

774 石部（東京富士美術館）



☆〈草津〉（23.2×17.3）

※「本家 和中散^{わちゅうさん}注」と書かれた釣り看板のある店の前を馬子に牽かれた馬が行く。その前を歩く旅人と、立っている虚無僧。

注) 和中散：腹痛などに効く道中薬。この地の和中散本舗^{わちゅうさんほんぽ}の生産。



775 草津（東京富士美術館）

☆〈大津〉（23.2×17.4）

※逢坂大谷町の茶店にあった走井から吹き出す水を使って採ってきた野菜などを洗ったりする男たち。「寿」の文字が染められた暖簾が掛かる茶店でくつろぐ男に饅頭を差し出す店の女。走井は、水が枯れることなく甘味があったという。



776 大津（東京富士美術館）



☆〈京都〉（22.9×17.2）

※貴人の行列の後ろ姿を描く。胡籜^{やなぐい}を背負った警護の武士の後ろに牛車の屋根が見える。画面の上部には、いわゆる「源氏雲」（すやり霞）がかかる。

777 京都（酒井好古堂）

☆〈大内山〉（22.8×17.0）

※このシリーズの最終図。衣冠束帯^{いこうそくたい}の貴人が二人、御所の庭先に立って談笑している図。

●錦絵『五十三次江都の往かい』（文化元～10〈1804～13〉。「東海道五十三次」物の一。画題は袋による。横小判。56 図。無款（但し、神奈川・程ヶ谷・戸塚・藤沢・大磯・箱根・藤枝に「北斎画」とある。伊勢屋利兵衛版。各平均 11.2×17.4 太田記念美術館/オランダ国立民族学博物館/ギメ美術館/ボストン美術館/島根県立美術館：永田コレクション/東京国立博物館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※画面右上の丸枠の中に「五十三次 東海道 駅名」が書かれ、その近くの別枠に駅番を記したもの。ほとんどの絵に朱色のすやり霞が描かれる。「蒲原」「桑名」「石薬師」は二図描かれる。最終図は「都」。

※「別図」12 図（〈四十六 石薬師〉も含む）による『五十三次江都の往かい』版がギメ美術館、ボストン美術館、東京国立博物館、名古屋テレビ放送、すみだ北斎美術館ら：ピーター・モースコレクション、島根県立美術館にあるという。別図を描いた後に、北斎自身が気に入らぬに描き直したか、版元の伊勢屋利兵衛の要望かは不明だが、別図のほうが先行して描かれたと推測している（吉田和子「東海道江都の往かい」について『北斎研究 23 号』所収 葛飾北斎美術館編 東洋書院）。

☆〈袋〉※図の手前に日本橋、奥に江戸橋。左岸には蔵が立ち並ぶ。中央の遠景に富士山。

☆〈日本橋 老〉

※日本橋脇の魚河岸の賑わい。魚を売る者、籠に入れた魚を運ぶ者たち。左隅に橋の擬宝珠が描かれる。

☆〈しな川 弐〉

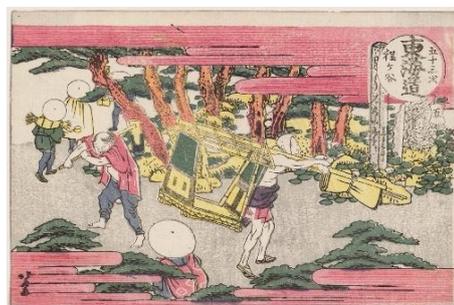
※天狗の面と三つ巴紋のある神輿を担ぐ男たち。扇を開いて囃している男も数人混じる。遠くに祭礼の幟が数本立っている。

☆〈川崎 三〉

※野外の作業台で、桶に入れた物を並べて作業する男と女たち。台に手をかけて作業を見ている子ども。側に立てかけた葦簀を支えている男がいる。

☆〈神奈川 四〉（落款：北斎画）

※海に投げ入れた網を引き寄せる漁師と、舵を取る男。遠くにも同様の船が浮かぶ。



778 程ケ谷（すみだ北斎美術館）

☆〈程ケ谷 五〉（落款：北斎画）

※空駕籠を一人で担いでいる駕籠かき。鋤を担ぐ農夫。傘を被った旅人たちが松並木の街道を行く。

☆〈戸塚 六〉（落款：北斎画）

※宿で煙草盆を囲んでくつろぐ四人の旅人。部屋の前の廊下に茶を持ってきた宿の女が立っている。

☆〈藤澤 七〉（落款：北斎画）

※大山詣での奉納の神事か。「月」と書かれた笠を被る神事の月番の人々。切長の弓張提灯を掲げて先頭を行く二人。「奉納 大山石尊大権現」などと書かれた奉納用の長い長く大きな木刀を持つ男の後には男たちが続く。家の門前には「月番替」と書かれて提灯が掲げられ、天秤に据えられた御幣の付いた屋根型の作り物を担ぐ男もいる。シーボルト・コレクションの「大山講山帰り」（文政9年項参照）も同画趣。



779 藤澤（すみだ北斎美術館：JJI・COM より）

☆〈平塚 八〉

※石灯籠のある朱塗りの寺社門を通ろうとする天秤の荷物担ぎの男。女旅人と振分けを肩にした供の男。傘を被り合羽を着た道中姿の旅人。平塚には平塚八幡宮などがあるが、この絵の寺社は不明。

☆〈大磯 九〉（落款：北斎画）

※「とらが石」と書かれた立札の前で、思い石を持ち上げようとしている男。休み処の

床几しとうぎに腰掛けこしかけそれを見ている旅の女や男たち。「虎が石とら いし」は、山下長者やましたちやうぢやの妻が子に恵まれず虎池とら いけ弁財天べんざいてんに祈願したところ、夢に弁財天が現れ、翌朝目を覚ますと大きな美しい石が置かれていた。妻はこの石を日夜にちや拝んだところ子を授かったと言われる。子供は「虎」と名づけられ、成長するにつれ石も大きくなっていったという。その後、曾我十郎そがのじゅうろうの敵・工藤祐経くどうすけつねの使者が十郎に矢を放ったところ、この石が十郎を救ったとも言われる（「大石町ホームページ」より）。

☆〈小田原 十〉

※馬の背から荷物を下ろして餌箱えきばこの前で休ませている馬子。側で二人の侍が立ち話をしている。遠方に小田原城が見える。 780 小田原（すみだ北斎美術館）



☆〈箱根 十一〉（落款：北斎画）

※箱根路を急ぐ合羽かっぴを着た道中姿の旅人と、笠を被り荷物を背負う供人。後ろから女を乗せた駕籠かごが付いて行く。

☆〈三島 十二〉

※鉄箱てつばこを担いで道を急ぐ飛脚ひやくと、一緒に走る同行の仲間。二人にすれ違う旅人の後姿。

☆〈沼津 十三〉

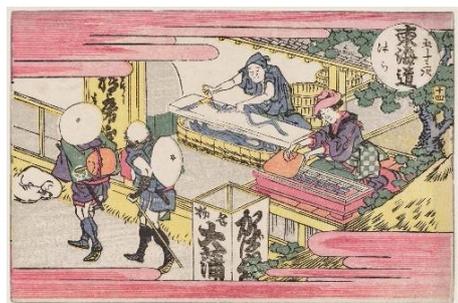
※海岸に沿った街道を行き交う侍、天秤棒てんびんぼうの荷物運び、虚無僧こむそうなど。海岸の砂浜では何かを釣くわで漁あきる男が小さく描かれる。

※別図：海上に帆かけ船がある。

☆〈はら 十四〉

※富士の見える松林に腰を下ろして景色をスケッチする男や旅人。馬の背の荷物の上に乗って行く旅人もいる。原からの富士の眺めは東海道随一と言われた。

※別図：鰻料理店うなぎが描かれる。



781 はら（別図 すみだ北斎美術館）

☆〈吉原 十五〉

※「名物 山川白酒やまかわしろざけ」と書いた箱看板のある茶店で休む人たち。店の前では柴木の束を背負った樵しほきが杖を立てて立ちながら休んでいる。山川白酒は、山に流れる水が泡立つと白くなり、白酒に似ているところから付けられ、この地の白酒を称するようになったという。

※別図：川と富士山を望む風景。

☆〈蒲原 十六〉

※休み茶屋の前では笠に格子縞こうしじまの合羽かっぴを着た旅人の前には、柄杓ひしやくを持った男の子たちがいる。太い松の幹の陰には天秤棒てんびんぼうの先に風呂敷ふろしき包みを下げた男もいる。

☆〈蒲原 十六〉

※浜辺で海水を天秤棒で塩釜しおがまに運ぶ女と男。砂ごを箒すくに掬う女。

☆〈由井 十七〉

※日照り続きの中、雨が降り注ぎ、蓑みのを着た農民たちが喜び踊っている。差した傘には「くらさか」と書かれている。西倉沢村の風俗を描いたといわれる。

☆〈奥津 十八〉

※一般に「興津」と表記する。松林の中で細木の束の上に腰を下ろし、煙管で一服する女。側くまで熊手で落葉を集める子どもと、籠かごに落葉を入れる子ども。松林の向こうには富士山が見える。

☆〈江尻 十九〉

※浜辺で吊るした網を修理する二人の漁師。沖には沼津へ向かう帆かけ船が浮かぶ。

☆〈府中 二十〉

※廓くわくの前の道を道中する二人の花魁おいらん。側に笛を吹く按摩あんまの男。その後ろには、料理を乗せた大きな盆を担ぎあげて運ぶ男。

☆〈鞠子 廿一〉

※鞠子宿まりこの街道を行き来する旅人を小さく鳥瞰ちようかんず図で描く。

☆〈岡辺 廿二〉

※立ち止まる馬の背の荷物の上に乗っている旅人。荷物を整えている馬子まご。馬の先には、刈り取った草をいれた籠かごを置いて草鞋わらじの紐を整えている農夫。

☆〈藤枝〉（落款：北斎画）

※茶屋の前で荷物を振り分けに背負った馬の背に乗る女と、轡くつわをとる馬子まご。馬子に話しかける旅人。茶屋で笠を被ったまま背を向けて休む旅人。

☆〈寫田 廿四〉

※大井川おおいがわを輦れんだいに乗って渡る二人の女。それぞれ七人の人足が台を担いでいる。

☆〈金谷 廿五〉

※富士山の見える峠で休む旅人。はさみ縛りはさみばりで立てた三本の杭くわいの下に置かれたものを見る三人の旅人。『富嶽三十六景』に〈金谷の不二〉がある。

☆〈につさか 廿六〉

※「日坂」をひらがなで表記している。荷物運びの二人の人足を従えた侍が、山道の小屋の前に着いた様子。急な佐夜さよの中山峠なかやまとうげがある。

782 につさか (lp. p. pia. jp より)



☆〈掛川 廿七〉

※名物の遠州凧えんしゅうだこを揚げる準備をしている三人の子ども。大凧おおだこを上げている三人の男。凧紐たこひもを整えている男。

☆〈袋井 廿八〉

※笠を被り、振り分け荷物を背にした馬に乗る女。その両脇に付き添う男と女。馬子まごは

煙管をくわえて馬を牽いている。

783 袋井 (すみだ北斎美術館)



☆〈見附 廿九〉

※天竜川を渡る舟には、多くの旅人ともに人を乗せた駕籠も乗っている。船首と船尾には二人の船頭が竿を差している。

☆〈浜松 三十〉

※蓮の葉の浮かぶ池の前で休む二人の女と二人の男。

☆〈舞阪 卅一〉

※三味線を担いだ女や男たちが茶店にたどり着いた様子。門付け芸人の一行か。

☆〈荒井 卅二〉

※遠州灘の数艘の渡し舟が浮かぶ。街道には宿場の家並みが続く。遠景に「秋葉山」と記された山が見える。全体に鳥瞰で描かれる。

☆〈白須賀 卅三〉

※「鏡岩」の書き込みがある。大きな鏡のように立つ岩の前で二人の人足が手を広げて、その大きさを計るような仕草をしている。それを休みながら見ている他の旅人たち。

☆〈二川 卅四〉

※松の木の側にある二つの人形の岩を指差す男や、岩を眺めている旅人たち。

☆〈吉田 卅五〉

※停泊する船に乗るために、人足に背負われて浅瀬に行く二人の女。荷物を差し上げている男と、荷物を背負う男もいる。

☆〈御油 卅六〉

※天然記念物の松並木が有名だが、それを描かず、御油宿の室内で客を迎えるために掃除をしている男や、口紅を塗ったり髪を整えたりして女たちを描いている。

☆〈赤坂 卅七〉

※縄をなえている男。その先で杭を支えている女。脇でできた縄を丸めている子供と男がいる。

☆〈藤川 卅八〉

※柵の中に高札が立っている。その前で、荷物を下ろした馬が暴れるのを馬の轡に手をかけ鎮めている馬子。

☆〈岡崎 卅九〉

※二人の宿場女がそれぞれ道行く旅人の荷物を引っ張って呼び込んでいる。いわゆる「留女」が描かれる。

☆〈池鯉鮒 四十〉

※「庚申塔」と刻された塚の前で旅人たちに馬を勧めている男。旅人は手を上げて困った様子。側には五頭の馬がいる。この地では馬市が多く開かれた。

☆〈なるミ 四十一〉

784 なるミ (すみだ北斎美術館)

※「鳴海」を平仮名とカタカナで表記している。絞り染めの反物を竿に掛ける職人。腰を下ろして休みながらそれを見ている職人。鳴海は藍の絞りが有名で「鳴海絞」や「有松絞」などと呼ばれる。



※別図：染物屋の風景のものがある。画題も「鳴海」。

☆〈宮 四十二〉

※次の桑名まで船で渡り、七里の渡しと呼ばれた。石垣脇の海には「宝」と染め抜いた帆かけ船や、版元の伊勢屋利兵衛の定紋を染め抜いた帆かけ船が浮かんでいる。宮は熱田神宮の門前町。

※別図：宿の中、三味線を弾く芸者など。

☆〈くわな 四十三〉

※「桑名」をひらがなで表記している。名物の蛤を団扇であおりながら焼いている男。その隣に腰掛けて扇子を使っている女。床几の前に焼き蛤を指差している旅人や、それを見ている男たち。

☆〈桑名 四十三〉

※伊勢屋利兵衛の定紋を染めた帆を張った船や、荷物を積み込んだ帆掛け舟が沿岸に浮かぶ。宮から桑名まで「七里の渡し」が使われた。

☆〈四日市 四十四〉

※雨降りの中、合羽や蓑を着た男たちや、笠で雨をしのぐ男。

別図：鳥居の前を通っている旅人。

☆〈石薬師 四十五〉

※「一ぜんめし」の箱看板のある店の前で、馬に乗った旅人や、合羽を着た旅人たちがいる。全員がうつむき笠の中の顔が見えない。別図あり。

☆〈石薬師 四十五〉

※「牛若 はち桜」(不明)と書かれた立札のある桜の木の下で、腰を下ろして花見をする旅人や人足たち。僧侶や荷物運びの男も立って見ている。石薬師寺には源範頼が鞭にしていた桜の枝を武運を占うために地面に刺したところ、そこから育ったという蒲桜が名所となっている。

☆〈庄野 四十六〉

※山道を行く旅人が遠くの庄野城と思われる城を指差している。

※別図：寺の中で経をあげる人々。

☆〈龜山 四十七〉

※「道祖」と刻された道標の前の道を往来する旅人。柴木の束を運ぶ農夫もいる。

※別図：宿の台所の風景。

☆〈関 四十八〉

※天狗の面を付けた笈を下ろして休む金比羅参りの男の前に行く合羽を着た男と、振分けを背負った旅人たち。

※別図：有名な夷岩や大黒石を驚いて眺める旅人。

☆〈坂の下 四十九〉

※滝を眺めながらくつろぐ旅人たち。

☆〈土山 五十〉

※琵琶湖のほとり、雨降りの中、鳥居の前で「栗林」と記された傘をさす男女。馬の荷の上に乗る旅人は傘を被りうつむいて雨を避けている。鈴鹿馬子唄に「坂は照る照る 鈴鹿は曇る あいの土山雨が降る」と歌われ、雨の多い地域として有名。「栗林」は現滋賀県大津市栗林町か。

☆〈水口 五十一〉

※「名物ところてん」の看板のある茶店の床机に腰掛けてところてんを食べている旅人と人足。その前に立つ柴木の束を背負った男と荷物を背負った旅人。

☆〈石部 五十二〉

※「いちぜんめし」「高菜飯」の看板のある店の座敷で、荷物を脇に置いて食事をする旅人たち。

☆〈草津 五十三〉標灯のある琵琶湖の船着場から船に乗り込む天秤棒を担ぐ人足。その後ろで乗船を待つ二人の旅人。すでに乗っている男が手を上げて招いている。

☆〈大津 五十四〉

※「大津絵」の看板のある店先で絵を描く二人の絵師。後ろで紙を用意している女。後ろの屏風には描かれた絵が掛けられている。大津絵は江戸時代初期からこの地で描かれてきた民俗画。神仏や動物が教訓的に戯画化され、旅の土産として人気があった。



785 大津（すみだ北斎美術館）

☆〈京 五十五〉

※幕を張った野外で雅楽の「胡蝶楽（胡蝶の舞）」の舞いを踊る二人。それを見ている衣冠束帯の貴人と、矢を背負った武人。

☆〈都 終 五十六番〉

※左下に「了」の字。庭先に控えている貴人たち。帝か高貴な人を迎えるのだろうか。

●錦絵『別本：仮名手本忠臣蔵』（文化元～4年〈1804～07〉）。北斎画。錦絵揃物。伊勢屋利兵衛版。太田記念美術館：長瀬コレクション蔵

※次項の文化初期『仮名手本忠臣蔵』とは別種のもの（『長瀬武郎コレクション葛飾北斎図録』昭和55年 太田記念美術館編 p105 による）。他の忠臣蔵物と区別するため、「別本」とした。

☆〈かなでほん忠臣蔵 二だん目〉 (23.2×17.3)

☆〈仮名手本忠臣蔵 四だん目〉 (22.8×17.5)

☆〈かなでほん忠臣蔵 五だん目〉 (22.7×17.3)

●錦絵『仮名手本忠臣蔵』(文化元年～4年〈1804～07〉)。中判。北斎画。伊勢屋利兵衛版。太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※「十二段」あることと、段により表記がひらがなになっている。内容は寛政10年『新板浮絵忠臣蔵』、文化3年『仮名手本忠臣蔵』を参照のこと。

☆〈仮名手本忠臣蔵 初段 つるがおか〉(「鶴ヶ岡」23.0×17.5)

☆〈かなでほん忠臣蔵 二段 松きり〉(「松切り」22.9×17.3)

☆〈かなでほん忠臣蔵 三段目 けんくハのまく〉(「喧嘩の幕」23.0×17.5)

☆〈仮名手本忠臣蔵 四段め あふぎがやつ〉(「扇が谷」23.0×17.5)

☆〈仮名手本忠臣蔵 五段目 山さきのたん〉(「山崎の譚」23.0×17.5)

☆〈かなでほんちうしんくら 六段め ミう里〉(「身売り」23.1×17.5) 身売りの段。京の一字屋に身売りすることになったおかるを迎える駕籠が屋敷の外で待っている。枕屏風の前で悲しむおかる。側に帰って来た勘平が腕組みをして立っている。

☆〈仮名手本忠臣蔵 七段目 あけ屋〉(「揚屋」23.0×17.5)

☆〈かなでほんちうしん蔵 八たんめ 道行〉(「道行」23.2×17.4)

☆〈仮名手本忠臣蔵 九段目 山しな〉(「山科」23.1×17.4)

☆〈かなでほん忠臣蔵 十段目 天川屋〉(「天川屋」23.1×17.1)

☆〈仮名手本忠臣蔵 十一段目 ようち〉(「夜討」22.7×17.1) 討入乱闘の場。

☆〈仮名手本忠臣蔵 十二段目 ようち〉(「夜討」22.6×16.8) 炭小屋・高師直の場。

●錦絵「見立忠臣蔵」(文化元年～8年〈1804～11〉)。色紙判丸枠。北斎画。19.0×17.0

※丸枠の中に描かれているのが特徴。落款の「北斎」から文化初期～中期の作とした。北斎は、他に「見立忠臣蔵 七段目」(天明年間。縦長判摺物。春朗画。太田記念美術館蔵)などがある。

☆〈初段〉物入れの箱の蓋を開け、中の包を見る三人の女。一人は三味線を持って立っている。

☆〈三段目〉部屋の中で、女を打擲しようと、立って手紙を持った手を振りあげる女を、後ろから腰に手を回して止めようとする女。

786 見立忠臣蔵三段目 (ARC ホータルデーパーズ)

☆〈五段目〉海辺の松の木の側で、貝殻などを箆に入れて売っている女の前で、蛇の目傘を閉じて持ちながら紐付きの袋を差し出している女。

☆〈八段目〉母親と振袖の娘が道標のある道を歩いている。母親は藁蓑を下げている。

☆〈九段目〉雪を被った笹の絵のある屏風の前で、座って身をよじる娘と、その後で箆のようなものを持って立っている年増。



☆〈十段目〉長持に左膝を乗せ、注連縄のある神棚に手を伸ばしている女。その脇で赤子を抱いてしゃがみながら女の様子を見ている女。神棚には大福帳が下げられている。

●錦絵『かな手本忠臣蔵』（文化元年～10年〈1804～13〉）。横小判10枚。北斎画。伊勢屋利兵衛版）

※北斎は本図を含めて「忠臣蔵」を7種類描いているという。本図はシンシナティ美術館所蔵だが、六段目と七段目が所蔵されていないという（『新北斎展図録』p323）。また十一段目が2枚ある。

☆〈初段〉鎌倉の鶴ヶ岡八幡宮で、塩谷判官の妻顔世が新田義貞の兜を鑑別していると、高師直が言い寄っている。そこへ若狭守が現れた場面。

☆〈二段目〉松切りの場合。若狭守が加古川本蔵に高師直を討つ決意を語る。本蔵はその決意を受け取った証拠に、縁先のまつの枝を切り、自分の意志を表す場面。

☆〈三段目〉主人塩谷判官の身を案じ、早野勘平が館の裏門に来る。そこへおかるが来て勘平と会う。鷺坂伴内が来ておかるを渡せと迫るが、勘平に投げ飛ばされる場面。

☆〈四段目〉塩谷判官の切腹後、妻の顔世の身を案じる家来たちの様子。

☆〈五段目〉山崎街道の場合。おかるの父与市兵衛、おかるの身売りで得た50両を斧定九郎に奪われ殺される。遠景に勘平が千崎弥五郎に逢い、怪しいものではないと鉄砲を渡し、同じ家臣であることが分る場面が描かれる。

☆〈八段目〉道行きの場合。大星方弥の許嫁、加古川本蔵の娘小浪と母親の戸無瀬が、京都・山科の方弥のもとに行く場面。

☆〈九段目〉山科閑居の場合。山科の方弥宅に着いた戸無瀬と小浪。父親である加古川本蔵は、若狭守が高師直を討つという本懐を止めた男であり、高師直にへつらった男のため、小浪と大星由良之助の息子の方弥との結婚は許されぬと、由良之助の妻お石から拒否される。恥辱の末、戸無瀬は小浪を殺して自分も死のうとするとところへ、加古川本蔵が門口に現れる場面。

☆〈十段目〉天川屋の場合。仇討ちに協力し、武具などを調達した堺の天川屋義平の家に浪人たちが出入りして妻の身が危ないので妻のおそのを離縁する。その後、おそのが去り状を持って義平の家の門に来る場面。

☆〈十一段目〉討ち入りの場合。浪士たちが高師直の屋敷に押し入ると、「前」とかいてある葛籠の蓋を開けて男が出てきた場面。

☆〈十一段目〉炭部屋本懐の場合。炭小屋にいた高師直を三人の浪士が取り囲んでいる場面。一人は「忠」と書かれた提灯で高師直を照らしている。

●錦絵「放屁する仕丁」（「放屁する神人」とも。文化元年～4年〈1804～07〉）。短冊判。北斎画。伊勢屋利兵衛版。33.9×5.9 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

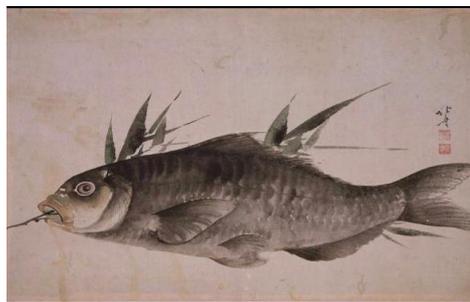
※賽銭箱の後ろに付けられた灯り皿の火に尻を突き出して放屁する男の図。

●肉筆画「茶摘図」（文化元年～10年〈1804～13〉）。絹本着色一幅。東陽北斎席画。印 亀毛蛇足。19.5×26.1 太田記念美術館蔵）

※襷がけをして姉さんかぶりの女が、摘んだ茶を入れた^{ざる}茶笥を持った上半身の図。

●肉筆画「^鮒鮒図」（文化元年～文化10年〈1804～13〉）。紙本着色一幅。北斎。印不明印不明。26.2×38.0 千葉市美術館蔵

※笹の枝を鰓から口に刺された鮒。体全体は墨の濃淡で描くが、口には薄い朱を添える。もとは『肉筆画帖』の一図であったかという考察もある（「千葉市美術館収蔵品検索システム」より）。



787 鮒図（千葉市美術館）

●肉筆画「^猿猿図」（文化6年～10年〈1809～13〉）。紙本着色小型掛物一幅。北斎。印亀毛蛇足。37.2×25.0 島根県立美術館：永田コレクション蔵

※烏帽子を被り御幣を持って踊る猿の図。陰陽五行説で鬼門を守る比叡山の日枝山王権現の使いとして描かれる。寛政10年(1798)頃にも同題の「猿図」がある。

●肉筆画「^{海老}海老図」（文化6年～10年〈1809～13〉）。紙本淡彩一幅。北斎筆。印亀毛蛇足。22.6×29.0 島根県立美術館：永田コレクション蔵

※墨と薄い朱色を用いて描く。長い二本の鬚が弧を描くように細く描かれる。余白部分が広くあるので、賛を入れる予定があったと考えられている。

●扇面画「^{朝比奈}朝比奈図扇面」（文化6年～10年〈1809～13〉）。紙本着色扇面。北斎。印亀毛蛇足。17.7×51.3)

※布袋のような裸の腹を出して、箱に右肘をかけて頬杖をしている朝比奈三郎。背中には長い刀が置かれている。朝比奈三郎を扱ったものは、黄表紙『朝比奈御髭の塵』（寛政8年：挿絵）、錦絵「朝日奈三郎平ノ義秀」（寛政3年～5年）、摺物「朝比奈三郎の鏡割り」（寛政10年）などがある。

●肉筆画「^{ほととぎす}ほととぎすを聞く読書美人図」（文化元年～10年〈1804～13〉）。紙本着色一幅。無款。116.4×49.7 北斎館蔵

※ほぼ直角に首をかしげて読書をする女。着物の胸がはだけている。脇には冊子が数冊積まれている。図上にはほととぎすが一羽飛んでいる。浅草庵市人の賛が記される。

788 ほととぎすを聞く読書美人図（北斎館）



●肉筆画「^{西瓜}西瓜と^{包丁}包丁」（文化7年～15年〈1810～18〉か）。紙本着色一幅。北斎画。印葛しか。北斎館蔵

※天保10年(1839)にも「西瓜図」がある。

789 西瓜と包丁（北斎館）



●錦絵「^{東都品川御殿山}東都品川御殿山」（文化2年～5年〈1804～08〉）。紙本。北斎画。23.0×34.3 西村屋与八版。島根県立美術館：永田コレクション/太田記念美術館：長瀬コレクション蔵

※文化2年『百疇』の八丁の一枚を錦絵にしたもの。額縁取りの絵。図中央に桜の大木があり、木の下では敷物を敷き、三人の男が花見をしている。そのこちら側では三人の子どもが逆立ちをしたり海老反りをして遊んでいる。図右下からの桜の大木に向かう道にはこれから花見に向かう親子連れや男たちがいる。図左にも花見用の仮小屋に数人の男女が品川沖を眺めている。海には帆を畳んだ船が七隻浮かんでいる。

●錦絵「隅田川」（文化3年～8年〈1806～11〉。横大判。かつしか北斎画。25.0×36.6 日本浮世絵博物館蔵）

※図右に支え木のある橋脚を大きく描き、その下を二人の女を乗せた猪牙船が行く。船頭は艀を踏ん張って漕いでいる。女の一人は船端から手拭いを水に晒している。もう一人の女は大きな日傘を背にしている。夏の夕暮れだろうか。空にはすやり霞のように茜雲が横にたなびいている。遠くの土手には数人の人物がいる。川の先には屋根船が一艘浮かんでいる。

●肉筆画「源氏物語図」（文化6年～7年〈1809～10〉。縦長奉書一幅。葛飾北斎。印 亀毛蛇足。84.5×36.5 太田記念美術館蔵）

※光源氏が御簾の中の女性（朧月夜といわれる）を覗いている図。部屋の中では官女が扇子を開いて口元に当てている。大和絵の吹抜屋台注の構図で描く。

注) 吹抜屋台：鳥瞰図的画法で、屋根を取り払って天井から家の中を描く。

790 源氏物語図（太田記念美術館）

●錦絵『風流東都八景』（あるいは「東都」は、そのまま「とうと」と読むか。文化5年～7年〈1808～10〉。縦中判揃物。北斎画。伊勢屋利兵衛版。各 23.1×17.3 ハーバート大学サクラ美術館/名古屋テレビ放送/島根県立美術館：永田コレクション蔵）
※すやり霞をかけた鳥瞰図風画法。画題は横書きでふりがながある。



☆〈品川の帰帆〉（北斎画）

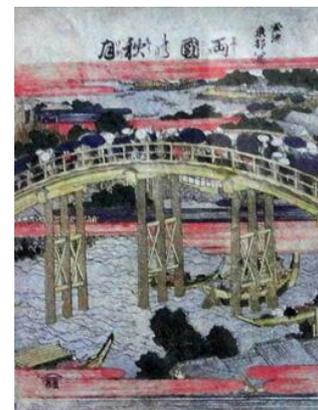
☆〈上野の晩鐘〉（無款）

※桜に囲まれた東叡山寛永寺と不忍の池を俯瞰している。池の中央にある弁財天へ渡る太鼓橋を歩く人々や、池で舟遊びをする人などが描かれる。

☆〈両国の秋月〉

※高い橋桁の間を抜けるように進む屋形船などが数隻。反り橋風の両国橋の上には傘を開いて渡る人々で埋め尽くされる。すみだ北斎美術館蔵）

791 両国の秋月（すみだ北斎美術館）



☆〈飛鳥の夕照〉

☆〈待乳の落雁〉（無款）

※待乳山と、その前の今戸橋などを鳥瞰画法で描く。

☆〈隅田川の暮雪〉

☆〈吉原の夜雨〉

☆〈浅草の晴嵐〉

●肉筆画「花魁図」（文化6年～10年〈1809～13〉）。紙本着色一幅。葛飾北斎筆。印雷辰。112.8×26.0 太田記念美術館蔵



※北斎は寛政から文化期にかけて多くの花魁図を描いている。本図は落款と印号から文化8年頃と思われるが、一応文化中期頃としておきたい。図は、横兵庫髷の花魁が小首を傾げて足元を見ている。裾から高下駄を履く足が見える。亀甲模様の前帯と仕掛（打掛のことを吉原ではこう呼んだ）の◎を散らした裾模様が特徴的。仕掛けの背は墨絵風に描いている。

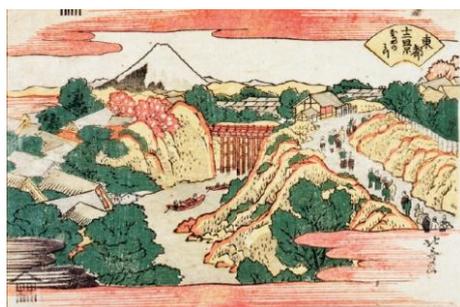
792 花魁図（太田記念美術館：tamegoro.exblog.jpより）

●錦絵『東都十二景』（文化元年～5年〈1804～08〉）。横小判揃物。北斎画：一部無款。伊勢屋利兵衛版。各約11.2×16.9 ヴィクトリア・アルバート博物館/すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション/一部太田記念美術館蔵

※北斎は〈かんだめうしん〉〈しのはす〉〈五百らかん〉〈おちやのみつ〉〈りやうごく〉〈すみだ川〉〈ミめくり〉を描き、勝川春亭が〈たかなハ〉〈すみだ川：北斎と別図〉〈あすか山〉〈あさくさ〉〈よしはら〉〈さかい丁〉〈りやうごく：北斎と別図〉（『長瀬武郎コレクション葛飾北斎図録』p100より）を描いている。

☆〈おちやのみつ〉（11.5×17.5 北斎画。すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション/太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※お茶の水の右側の昌平坂を往来する人々。神田川には一艘の船が浮かぶ。その先には玉川上水の分岐水道橋の樋が描かれる。ボストン美術館に本図の画稿があるという（『長瀬武郎コレクション葛飾北斎図録』p100）。



793 おちやのみつ（すみだ北斎美術館）

☆〈りやうごく〉（11.4×17.3 無款。太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※両国橋を往来する多くの人々。隅田川には屋形船や緒牙船などが数艘行き来している。ボストン美術館に本図の画稿があるという。同題の春亭の絵もある（『長瀬武郎コレクション葛飾北斎図録』p100）。

☆〈すみだ川〉（11.5×17.4 無款。すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※雪景色の隅田川堤の風景。鈎形に曲がった土手の上を行く人々。同題の春亭の絵もある（『長瀬武郎コレクション葛飾北斎図録』 p 100）。

☆〈すみだ川〉（勝川春亭）

☆〈あさくさ〉（勝川春亭。太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

☆〈かんだめうじん〉（無款）

☆〈しのはす〉（無款。太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

☆〈五百らかん〉（無款）

☆〈ミめぐり〉（無款）

☆〈よしはら〉（勝川春亭。太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

●錦絵「目黒不動」（横大判 文化3年～8年〈1806～11〉か。かつしか北斎画。25.2×38.0 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※『長瀬武郎コレクション葛飾北斎図録』所収「長瀬武郎コレクション寄贈総目録」による。

●錦絵『中判 近江八景』（文化5年～7年〈1808～10〉。享和元年～文化7年〈1801～10〉説あり。中判8図揃物。『銅板近江八景』（文化8年）と同画趣だが、描き方やサイズ違いのもの。全図俯瞰描写。北斎画。伊勢屋利兵衛版）

※画題は図の右に縦書きで示され、図の上部に和歌が記される。

☆〈瀬田の夕照〉（23.2×17.4 太田記念美術館：長瀬コレクション/ハーバート・大学サッカー美術館/ヴィクトリア・アルバート美術館/すみだ北斎美術館・ピーター・モース・コレクション/島根県立美術館蔵）

※図中央に小さく瀬田の唐橋を往来する人々。手前の山間を歩く人々。海上には手前に二艘の舟。夕照の趣を朱色のすやり霞で表す。

794 瀬田の夕照（すみだ北斎美術館）



795 石山の秋の月（すみだ北斎美術館）

☆〈石山の秋の月〉（22.7×16.9。

太田記念美術館/ハーバート・大学サッカー美術館/ヴィクトリア・アルバート美術館/神戸市立博物館/すみだ北斎美術館・ピーター・モース・コレクション/東京国立博物館蔵）

※崖の上に立つ石山寺の先に満月が描かれる。崖下には琵琶湖が広がる。寺の舞台と参道に小さく参詣人が描かれる。図の上部に「石山や にほの海てる 月かけハ 明石も須磨も 外ならぬかは」の和歌が記されている。

☆〈栗津の晴嵐〉（23.2×17.5 太田記念美術館：長瀬コレクション/ヴィクトリア・アルバート美術館/島根県立美術館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※瀬田から膳所にかけて松並木が続いていたという。強風に松の枝葉がざわめくのを晴嵐

と称した。膳所城が彼方に見える道を旅人が数名向かっている。

☆〈唐崎の夜雨〉 (23.2×17.6 太田記念美術館：長瀬コレクション/ウィクトリア・アルバート美術館/島根県立美術館/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵)

※唐崎神社境内の松の老木に図左上から斜め右下に激しく雨が降りそそぎ、岸边には数艘の舟が舳っている。

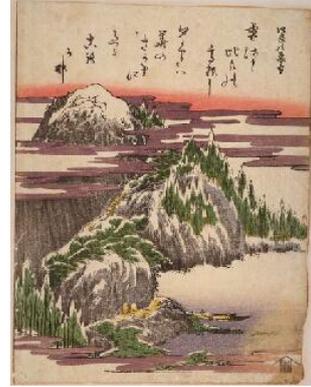
☆〈比良の暮雪〉 (23.1×17.3 ウィクトリア・アルバート美術館/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵)

※三井寺に参詣する人々が門の所にいるのを俯瞰して描く。

中央にすやり霞を配している。

注) すやり霞：大和絵の手法で、画面の中に横にたなびく霞を挿入するもの。

796 比良の暮雪 (慶応大学図書館)



☆〈堅田の落雁〉 (23.2×17.5

島根県立美術館：長瀬コレクション/ウィク

トリア・アルバート美術館/すみだ北斎美術館・ピーターモース・コレクション/太田記念美術館蔵)

※琵琶湖の岸边から湖上に突き出た橋の先には浮御堂 (満月寺) がある。空飛ぶ雁ではなく、岸边に舞い降りた雁の群れが小さく描かれる。

797 堅田の落雁 (すみだ北斎美術館)

☆〈矢橋の帰帆〉 (22.6×16.9 すみだ北斎美術館・ピーターモース・コレクション/島根県立美術館蔵)

※全体に夕方の色合いの中、帆を下ろした船が数隻船着き場に帰ってきている。

798 矢橋の帰帆 (すみだ北斎美術館)

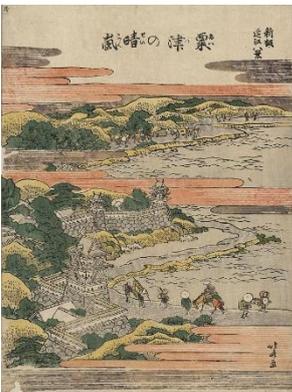
☆〈三井の晩鐘〉 (23.1×17.4 島根県立美術館：長瀬コレクション

/ウィクトリア・アルバート美術館/太田記念美術館すみだ北斎美術館：ピ

ーターモース・コレクション/ボストン美術館蔵)

※三井寺を俯瞰して描く。山門には数名の人がいる。奥には鐘楼が描かれる。

●錦絵『新板 近江八景』 (文化6年～10年〈1809～13〉)。



中判。揃物。北斎画。版元名記載なし)

※画題は図上部に「新板近江八景」とあるが、『近江八景』と同画趣。全図に朱色のすやり霞が挿入される。

☆〈瀬田の夕照〉 (23.2×17.4 太田記念美術館/島根県立美術館：永田コレクション蔵)

☆〈粟津の晴嵐〉 (23.2×17.6 太田記念美術館/島根県立美術館：永田コレクション蔵)

799 粟津の晴嵐 (ARC 古典籍ポータルベース)



☆〈唐寄の夜雨〉 (23.2×17.6 太田記念美術館/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵)

☆〈比良の暮雪〉 (22.8×17.2 太田記念美術館/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵)



800 比良の暮雪 (すみだ北斎美術館)

☆〈堅田の落雁〉 (23.2×17.5 太田記念美術館蔵)

☆〈矢橋の帰帆〉 (22.6×17.2 太田記念美術館/島根県立美術館：永田コレクション蔵)

☆〈三井の晩鐘〉 (23.1×17.1 太田記念美術館/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵)

801 三井の晩鐘 (すみだ北斎美術館)



☆〈石山の秋月〉 (22.8×17.2 太田記念美術館：長瀬コレクション/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵)



※本図と上記〈三井の晩鐘〉は二枚続きで、切断されないままの二丁掛であったという（『ピーターモース・コレクション北斎図録』より）。

802 石山の秋月 (mail.aflo.com より)

●錦絵『横小判 近江八景』(文化6年～10年〈1809～13〉)。横小判。揃物。「あはづのせいらん」「からさきのよるのあめ」のみ北斎画。伊勢屋利兵衛版。各平均 11.5×17.4 すみだ北斎美術館ピーターモース・コレクション蔵)

☆〈せたのせきせう〉(無款)

※瀬田の唐橋を望む湖に二艘の渡し船が浮かぶ。手前の土堤には駕籠に乗る人や荷物を背負う行商人などがある。



803 せたのせきせう

☆〈いし山のあきの月〉(無款)

※崖に建つ石山寺の下には紅葉が咲いている。



804 いし山のあきの月

☆〈あはづのせいらん〉(北斎画)

※城に向かう湖を渡る道を行く旅人たち。馬に乗る男もいる。

805 あはづのせいらん

☆〈からさきのよるのあめ〉（北斎画）

※巨大な松の前の小さな鳥居。その前で掃除をしている思われる男がいる。岸边には二艘の舟が浮かぶ。



806 からさきのよるのあめ



☆〈ひらのぼせつ〉（無款）

※雪の積もった道を行く旅人の笠や蓑にも雪が被っている。

807 ひらのぼせつ



☆〈かたゝのらくがん〉（無款）

※多くの雁が岸边から飛び立っている。



808 かたゝのらくがん

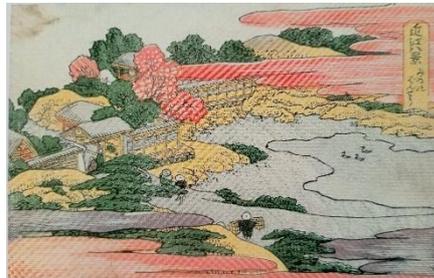
☆〈やばせのきはん〉（無款）

※三隻の舟が船着き場に戻っている。手前の街道には馬に乗る旅人などが描かれる。

809 やばせのきはん



☆〈みるのばんせう〉（無款）



※三井寺に向かう二人の男や荷物を担ぐ男。寺の庭から伸びる木からは赤い葉が茂っている。

810 みるのばんせう

●錦絵『秀逸 六玉川』注(文化元年～5年〈1804～08〉。文化4年頃とする説あり。中判六枚。揃物。北斎画。伊勢屋利兵衛版。東京都江戸東京博物館/ヴィクトリア・アルバート博物館蔵)

注) 平安から鎌倉期に和歌に詠まれた玉川の総称をいう。

☆〈陸奥 千鳥〉(23.3×17.4「野田の玉川」「千鳥の玉川」
とも。太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※川辺に立つ二人の娘。側に傘を閉じて小脇に抱えた供の男。川
辺から飛び立つ千鳥の群れ。

811 陸奥 千鳥 (https://blog.goo.ne.jp/より)

☆〈近江 はぎ〉(22.2×16.9「萩の玉川」「近江の玉川」と



も)



※うねるように流れる川の岸边に立って右手をかざして何かを眺める娘。側には縦縞の着物を着た使いの女が弁当の包みを手にしてひざまず跪いている。岸边の群生している萩に向かってこちらに背を向けている供の男。

812 近江 はぎ (https://blog.goo.ne.jp/より)

☆〈山城 井出〉 (22.5×16.9 「山吹の玉川」 「井出の玉川」 とも)

※大きな琵琶を抱えている男、子どもを背負っている男とその様子に顔を向けている男。馬の手綱を引いている男。仕丁らしき男たちが川に足をを入れて渡ろうとしている。

813 山城 井出 (ボストン美術館)

☆〈津の国 打衣〉 (22.5×16.9 「擣衣の玉川」 「三島の玉川」 「砧の玉川」 「掬津の玉川」 とも。すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵)



814 津の国 打衣 (江戸東京博物館)

※野外に敷いたゑだ莫座の上に立膝で座り、道具に巻きつけた布を叩く角隠しの女。側で畳んだ布を持って立っている角隠しの女。その女のほうへ子どもが向かっている。

☆〈紀伊の国 毒の玉川〉 (23.3×17.7 「高野の玉川」 とも)

※滝の様に流れる対岸には「毒の玉川」と書かれた高札が立っている。こちら側の岸边には長袴の官女風の二人の女。

一人は袖を口元に当て、一人はひら桧扇の様な物を持って横の女を見ている。二人の後で茶坊主が両手をあげている。

815 紀伊の国 毒の玉川

(https://blog.goo.ne.jp)

☆〈武蔵手作〉 (23.0×17.8 「調布の玉川」 とも)



816 武蔵手作 (ボストン美術館)

※岸边にしゃがんで布をさらしている角隠しの女。側で干し竿に白布を干している角隠しの女。後ろで臼に入れた布を両頭のたてぎ堅杵で叩いている男。



●肉筆画「六歌仙図」(文化3年~5年<1806~08)。紙本着色六幅対。もと押絵貼六曲一双屏風か。左端のおおもくろぬし大伴黒主にのみ葛飾北斎印印亀毛蛇足の落款あり。131.1~131.4×53.1~55.5 フリーア美術館蔵)

※全図の上部に、薄い朱色を垂らしたような「うち曇り」といわれる画法が使われている。右図から、

☆〈喜撰法師〉墨染の法衣に袈裟を羽織り、後ろ向きに赤い杖をついて歩く姿。

☆〈文屋康秀〉折烏帽子・狩衣姿で、赤い巻鞘を帯びた顎鬚の康秀が、遠くを眺めている。

☆〈在原業平〉梓弓を背負い、縹色の袍（中将の地位を表す）を着るのは、業平図のパターン。本図では扇形に広がった籠に入れた矢を背負っている。

☆〈小野小町〉紅の打袴姿、檜扇を持つのは、小野小町図のパターン。

☆〈僧正遍照〉朱の僧衣で袈裟を腕に掛け、中啓と呼ばれる扇を持って立っている。

☆〈大友黒主〉黒の衣冠束帯姿で、笏を膝に立てて何かを考えている姿。この絵にのみ図左下に北斎の落款がある。

●錦絵「道の踊り」（文化3年～7年〈1806～10〉）。かつしか北斎画。45.5×25.5 プーシキン美術館蔵

※プーシキン美術館では落款を「勝川しの北斎」としているが、この落款を使用した例はないと思われる。「かつしか北斎」の崩し字を読み間違えた可能性があるとする。

ひょっとこの面をつけた男が扇子と紙幣をつけた播粉木を持って踊りながら歩く。後ろから深編笠を被った男が太鼓で拍子を取っている。笠にはウラジロが飾られている。その脇では高下駄を履き笠を被った女が三味線を弾いている。正月の風景。

817 道の踊り（プーシキン美術館 Web より）



●肉筆画「竹に昼顔図」（文化5年～10年〈1808～13〉）。紙本着色一幅。北斎。印亀毛蛇足。27.0×37.4 島根県立美術館：永田コレクション蔵

※擦ったような筆使いで、図の左下から右上に一気に薄墨を生かして描いた竹に、蔓をからませた昼顔の花が白と薄紅色に咲いている。竹の根元近くと節は墨を少し濃く色づけている。

818 竹に昼顔図（島根県立美術館）

●屏風絵「春秋美人図」（文化7年～15年〈1810～18〉）。他に文化7年～9年〈1810～12〉説、文化3年～10〈1806～13〉年説あり。絹本着色双幅。葛飾北斎筆。印雷震。82.9×33.8 出光美術館蔵



※右一幅には、扇子を持つ体を左によじる武家の夫人。背景に緑と黄色を横に引いている。緑の着物に葵花模様がちりばめられ、裾は赤い無地。帯は赤く花模様で後に垂らしている。左一幅には、青い縞模様の打ち掛け、白地に赤い花模様の着物をまとい、花模様のある赤い帯を背に大きく結び、虫籠を持ち右を向く町家の夫人を描く。二幅とも鮮やかな色使いの図。

※落款の「葛飾北斎筆」は二代目北斎注の落款であるので、同人の作とする説あり。初代

北斎は「葛飾北斎」に続く字は「画」とするという
(日本浮世絵博物館所蔵『北斎』 p 14 読売新聞社)。

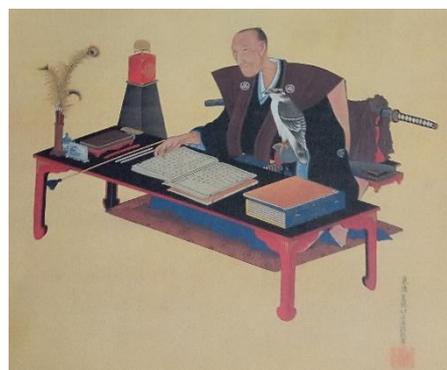
注) 二代目北斎：文化 11 年 (1813) に亀屋喜三郎
に北斎号を譲っている。 819 春秋美人図 (出光美術館)

●肉筆画「千野兵庫肖像」(文化 7 年～9 年 (1810
～12)。掛幅絹本着色。東陽葛飾北斎辰政写。印
雷震。78.9×40.8 個人蔵)

※文机の前に端坐して書物を読む袴姿の武士・
千野兵庫。机の右脇には和時計が置かれている。机
の右には孔雀の羽根と筆を入れた筆筒が置かれ、兵
庫の右腕には鷹がとまっている。兵庫の背後には刀
置きに大刀が置かれ、その上に布が掛けられている。
背景は黄色地の塗りつぶし。

千野兵庫(1736～1812)は、信州諏訪藩の家老。三
の丸様と呼ばれ藩の政治を取り仕切ったといわる。
※この絵は、文政 9 年 (1826) 頃にオランダに渡っ
た北斎工房の数種の作品同様の画趣であるので、あ
るいは落款は後に加えられたものとも考えられてい
る。

820 千野兵庫肖像 (部分：『北斎 東西の架け橋展図録』より転載)



●肉筆画「梅樹図」(文化元年～13 年 (1804～18))。「白梅図」とも。紙本着色額装。
北斎。印辰印政

26.2×37.9 千葉市美術館蔵)

821 梅樹図 (千葉市美術館)



●肉筆画「梅樹図」(文化 7 年～
11 年 (1810～14) 絹本着色一幅。
北斎。印雷震。115.0×41.5 ネル
ソン・アトキンズ美術館蔵)



※白梅の古木が画面右下から左上に伸び、画面中央から右上に弧を描くように伸びて多くの花を咲かせている。

822 梅樹図 (ネルソン・アトキンズ美術館)

●掛軸墨絵「墨竹図」(文化 4 年～10 年 (1807～13))。紙本墨絵。
北斎。印亀毛蛇足。38.0×26.2 フランス国立図書館蔵)

※「松・竹・梅・蘭を南画では四君子と称し、習画の手ほどきにその筆法を学ぶが、この絵もそうした習作か」といわれる (檜崎重宗『秘蔵浮世絵大観 8』図録解説 p 270)。

図は、竹の幹が太いものと細いものが二本並べて描かれる。節は濃い墨で、幹と根元の葉は濃淡のグラデーションで描かれる。

●肉筆画「花魁と禿」（「桜花美人図」とも。文化3年～7年〈1806～10〉。絹本着色一幅。北斎。印亀毛蛇足。117.3×33.3 静嘉堂文庫美術館蔵）

※花魁の両脇に立つ二人の禿の図。横兵庫の花魁が小首をかしげて立っている。花魁の右側に飾りのついた角隠しのようなかぶり物を被って立っている禿と、花魁の左に芥子房のような頭に飾り物を付けて立っている禿。図の上部には房のように集まった桜の花が、浮いているように描かれる。

823 花魁と禿（静嘉堂文庫美術館）



●肉筆画「夏粧美人図」（文化7年～12年〈1810～15〉。掛装絹本着色一幅。北斎戴斗。印亀毛蛇足。72.0×29.9 東京芸術大学芸術資料館蔵）



※制作年不明だが、従来、亀毛蛇足印を使い始めた早い時期の作といわれる。但し、亀毛蛇足印は享和2年（1802）から文化12年（1815）頃まで使用しているが、北斎戴斗の落款は文化7年（1810）から文政2年（1819）頃の使用であるので文化7年から文化12年頃の作とする。

※膝を立て体を左にねじり、左腕を畳みについて座り、団扇を手にする女。足元には金魚鉢がある。

824 夏粧美人図（東京芸術大学芸術資料館）

●屏風絵肉筆画「鶴鶴図」（「つるこうのとらず」とも。文化7年～15年〈1810～18〉。絹本着色二曲一隻屏風図。北斎筆。印雷震。25.1×155.8 鎌倉国宝館：氏家浮世絵コレクション蔵）

※右図に五羽の鶴、左図に二羽のコウノトリの飛翔を描く。



825 鶴鶴図（氏家浮世絵コレクション）

●団扇絵「菖蒲に鯉図」（文化6年～10年〈1809～13〉。団扇絵色摺。北斎画。ボストン美術館蔵）

※水垣の側に咲く菖蒲を横に、水草の浮かぶ水面を泳ぐ一匹の鯉。

826 菖蒲に鯉（ボストン美術館）

●肉筆画「糸瓜に雀図」（文化6年～10年〈1809～13〉。絹本着色一幅。北斎。印亀毛蛇足。35.5×25.0



摘水軒記念文化振興財団：府中市美術館寄託）※図右に水墨画の様に縦長の糸瓜を描き。図左に雀を描く。

827 糸瓜に雀図（府中市美術館寄託）



【「潮干狩図」の謎】

※北斎の「潮干狩（図）」は文化期にいくつか描かれているが、資料が混在しているので、更に検討を要する。寛政5年～9年（舳先の下の子どもと亀判）と、寛政5年～9年（摺物：しがみつく子ども判）、享和～文化（摺物：巨大な朝日判）、文化3年（摺物：花見判）、文化3年～10年（掛幅判）、（摺物：亀と舟の後部判）、文化4年～7年（重文判）、文政3年～天保5年（多人数判）、年代不詳（摺物：手を引かれる子ども判）、「先ノ宗理北斎画」の落款（シカゴ美術館）のある摺物（文化庁の「国指定文化財等データベース」の解説による）など「潮干狩図」を描いている。各図の区別のため、その特徴を示す（～判）を仮に付した。

●摺物「潮干狩図」〈亀と舟の後部判〉（文化3年～10年〈1806～1813〉）。横長判。紙本色摺。かつしか北斎画。19.4×52.8 北斎館/東京国立博物館蔵

※図の左に三隻の船が浮かび、手前の干潟では褌姿の男と、尻はしよりをした男が腰をかがめて貝を漁っている。その右では手拭を被った女が箆を砂に入れて貝を漁っている。さらにその右では、左手に箆を持ち、右手を上げて何かを指し示している。その横には箆を両手に持って立っている女と、亀を手をしている子どもがいる。図の右端には浜に打ち上げた舟の後部が描かれる。

●摺物「潮干狩図」〈手を引かれる子ども判〉（年代不明。色摺。東京国立博物館蔵）

※箆の貝を持ちあげようとしている二人の男。子どもの手を引く母親。裾をはしよって右手を口元に上げ立っている女。その右では、尻端折りをした下男が屈んで貝を掬っている。さらにその右では腰まで水に入って両手を突き出している男が



いる。沖には数艘の舟が浮かぶ。

828 潮干狩図（手を引かれる子ども判：東京国立博物館）

【北斎作品の重要文化財指定第1号】

●肉筆画「潮干狩図」〈重文判〉（文化4年～7年〈1807～10〉）。『日本美術全集 15』では文化10年頃（1813）としている。絹本着色一幅。葛飾北斎。印 亀毛蛇足 54.7×86.5 大阪市立美術館蔵。重要文化財）

※近景の土坡は墨による漢画法で、円形の富士山、山、雲、空は油彩式と明暗法による西洋画法を用いている。品川の光景といわれる。箆を持って角隠し風に手拭を被った女三人の側で、腰を屈めて貝を掘る子ども三人。図の右には、棒に笠をくくりつけて船尾に立て

ている。三人の女の背後では盥たらひに貝を入れた桶を頭上に掲げている男がいる。真ん中の女の背後で、貝を漁る子供たちを指差している子供もいる。沖の干拓地でも潮干狩りをする男たちと女たち。沖には帆を降ろした船が数隻浮かんでいる。背景には雪に覆われた富



士山とやまが描かれる。

829 潮干狩図（重文判：大阪市立美術館）

※「（略）さいとうげつしん 斎藤月岑編『東都歳時記』春・下・三月条（天保3年：1832刊）では、深川洲崎の汐干狩の絵に続けて、当時の潮干狩の様子を紹介している。

「汐干狩は三月から四月、其内三月三日を節とす。（略）しぼう 芝浦・たかなわ 高輪・しながわ 品川沖・つくだじま 佃島沖・ふかかわ 深川洲崎・なかがわ 中川の沖、そうたん 早旦（朝）より船に乗じてはるかの沖に至る。卯の刻（午前6時ごろ）すぎ 過より引始めて、うま 午の半刻（正午ごろ）には海底陸地と変ず。ここにおりたちてかきはまぐり 蛎蛤を拾ひ、砂中にひらめをふみ、引残りたる浅汐に小魚を得て宴を催せり」（ルビ・句読点・注は筆者による）。

※平成9年（1997）9月17日、本図が北斎作品中初めての重要文化財に指定された。文化庁の「国指定文化財等データベース」には次の記載がある。

「本図の『かまへ 亀毛蛇足』印は、上限は享和三年（一八〇三）：狂歌絵本『ひなうたつきくわし 夷歌月微妙』にあるので、少なくともこの年以前に遡る。

同印（「かまへ 亀毛蛇足」印）を門人北明に譲るといふ墨書のある『りぎよず 鯉魚図』（埼玉県立博物館）が文化十年（一八一三）の作であることから、この頃までは確実に用いていたと推測できる。同印を有する作品は少なくとも五十点余が知られており、印の周囲の長方郭が次第に欠損していくことが指定されている。（略）

三人のうちには眉をそり落した年輩の女、桜の模様の小袖を着た年長の娘、黒地の振り袖を着た若い娘と、衣装風俗に巧みに年齢の差が表現されており、裕福な町方の母親と子どもたちが三月三日の潮干狩に興じる様子を表したものとみえる。女たちを含めた右側の人物群が一様に砂の上の貝に注意を向け、左側の少年たちは砂を掘る手元に関心を集中することにより画面に緊張感がもたらされている。

北斎は摺物や版画で同様の主題を何度か制作しており、本図よりさかのぼる『宗理画』（東京国立博物館）あるいは『先ノ宗理北斎画』落款（シカゴ美術館）のある摺物等には同種の図様が見いだされる。（略）北斎はあらゆる日本人画家のうちで世界的に最も知られており、外国での研究も盛んに行われているが、本図は、北斎の美人画、風俗表現お

評価を得ている作品である」

●扇面画「猪口とほおずき図」(文化5年～10年〈1808～13〉)。着色扇図。北斎筆。

印辰印政。山城屋版。17.6×46.0 太田記念美術館蔵)

※白地の扇面に、山水画風に家並みと森、遠景に山並みの絵付けがされた茶碗を描く。茶碗の上に赤く日の丸が描かれている。



830 猪口とほおずき図 (太田記念美術館)



拡大部分

●肉筆画「大黒に二股大根図」(「二股大根と大黒図」とも。文化5

年～10年〈1808～13〉)。紙本着色一幅。葛飾北斎筆。印亀毛蛇足。

58.4×25.0 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※二股大根は、甲子待ち(甲子の日に商売繁盛を願って大黒天を祀る)の日に供される。図は、巨大な二股大根に首を挟んで担ぎあげている大黒天を描く。本図はフランスの作家・エドモ・ド・ゴンクール(Edmond de Goncourt)の旧蔵品という(『永田生慈北斎コレクション展図録』p195)

831 大黒に二股大根図 (島根県立美術館)



●扇面画「桔梗図」(文化7年～11年〈1810～14〉)。紙本着色扇面一面。北斎戴斗筆。印ふもとのさと。55.6×26.8 北斎館蔵)

※扇を縦にして描いた図。二本の茎が長く上に伸び、その先端に蕾も含めて花が咲く。茎の根もと近くでも薄藍の花と白い花を咲かせている。

832 桔梗図 (北斎館)

●扇面画「箱にもたれる美人図」(「芸者図」とも。文化5年～10年〈1808～13〉)。紙本着色扇面一面。北斎画。印辰印政。22.3×47.3 東京国立博物館蔵)

833 箱にもたれる美人図 (部分：東京国立博物館)

※団扇を持ったまま、大きな黒い箱(三味線箱か)に肘をついてもたれている美人。鶯の声を聞いている。



る常套的なポーズという解説もある。

●肉筆画「宝尽し図」（文化 5 年～10 年〈1808～13〉。紙本着色一幅。北斎。印辰印政。37.0×25.5 島根県立美術館：永田コレクション蔵）



※隠れ蓑を着、宝珠を転がし、鉤を背負い、隠れ笠（市女笠）を被るように、めでたいものを組み合わせて人物のように描く。蓑笠で災厄から身を隠し、鉤で宝の蔵を開け、宝珠で願いをかなえる事を象徴する。めでたい宝物を描くのを「宝尽し図」という（永田生慈『北斎クローズアップ I』東京美術 p 30）

834 宝尽し図（島根県立美術館）

●扇面画「布袋図」（文化 5 年～10 年〈1808～13〉。紙本着色扇面一面。葛飾北斎筆。印辰印政。23.0×48.8 島根県立美術館：永田コレクション蔵）



※身長より大きな袋の上で仰向けに太った腹を突き出して眠る布袋の図。

●肉筆画「布袋図」（文化 5 年～10 年〈1808～13〉。絹本着色一幅。葛飾北斎。印亀毛蛇足。115.2×29.7 すみだ北斎美術館蔵）

※大きな袋に腰掛けて笛を吹く上半身裸の布袋の図。背中に軍配。袋の側に墨摺の笹。図の上部の薄い墨摺りの山には、小さく一匹の鹿が描かれる。

835 布袋図（すみだ北斎美術館）

【為一翁は曲画を善す】

●肉筆画「逆筆布袋図」（文化 7 年～11 年〈1810～14〉。紙本着色一幅。戴斗逆筆。33.6×46.8 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※「逆筆」とは、書道では一般的に「起筆における筆の入り方の一種で、進行方向とは反対の方向に筆を入れ、進行方向に対して穂先を押ししていくように軸をやや反対に傾ける気持ちで書くこと。軸ではなく毛の方を先行して書く方法」と説明される。他には「逆筆という、筆の竹製の柄で描かれた奇妙な画法」という説明もある（リチャード・レイン『伝記画集 北斎』（p 110）。但し、北斎がどのように描いたかは不明である。曲描の一種。

『浮世絵類考』（仲田勝之助編校 岩波文庫）には斎藤月岑の増補版の記述を載せている。

「伝に曰、為一翁は曲画を善す。（升玉子徳利管すべて器財に墨をつけて画をかく）、左筆も妙なり、下より上へ書き上ぐる逆画をかけり、中にも爪にて墨をすくひかく画は勝れて妙なり、筆にて画たるが如し、画く処をみざればその実をしるべからず」（p 147 ルビは筆者）



布袋が大きな袋に寄りかかるようにして、軍配の柄で背中を搔いている。団扇に付けた布だけが薄朱色で、全体は薄墨色で描かれている。北斎は弘化元年（1844）にも「逆筆布袋図」を描いている。
836 逆筆布袋図（『真北斎展図録』より転載）

●錦絵『鳥羽絵集』（以前は「鳥羽絵集會」とも。文化8年～11年（1811～14）。横中判揃物。

北斎画。山城屋藤右衛門の行事印。伊勢屋利兵衛版）

※全21図。現在19図が確認されているという（2018年『江戸の戯画展』図録P244）。鳥羽絵は、鳥羽僧正の「鳥獣戯画」のような絵を指すが、一般的には江戸中期に京都で画かれ始めた滑稽洒脱な絵を指している。手足が異常に長い人物が特徴。いくつかの絵は『軽筆鳥羽軍』（大岡春卜画か。享保5年：1720。三巻一冊）からの影響が指摘されている。後年の『北斎漫画』に繋がる。

北斎より少し前に耳鳥斎（筆者注：大坂の浮世絵師。享和3年：1803没）が鳥羽絵を描いて評判を取ったが、北斎の鳥羽絵は余り評判とならなかった。また太った人物戯画を描いて「狂画葛飾振」と名づけたが、これも評判とならなかったという（『北斎美術館3美人画』p107）。

☆〈くつろぐ中間〉（22.6×16.5 ベルギー王立美術歴史博物館/ハブリック・メイン美術館蔵）

※中間三人が店の床几に腰掛け太くびをしている。その内の一人は両手を挙げて背伸びしている。店の側の立看板には「鳥羽絵集會」と画題が記されている。

837 くつろぐ中間（「名品揃物浮世絵 9 北斎Ⅱ」ハブリック・メイン美術館より）



☆〈久米仙人〉（22.7×16.8 島根県立美術館：永田コレクション）

※盥で洗濯をしている女の着物の裾を持ちあげようとしながら、空から逆様に落ちて来る久米仙人。持っていた軍配が手放されて空中に浮かんでいる。

☆〈道成寺〉（22.4×16.9 ベルギー王立美術歴史博物館蔵）

※道成寺の釣鐘の下でおどけた格好の二人の小坊主。その前の格子門の外側に立つ娘。

☆〈助六の股をくぐる男〉（22.2×16.1 ベルギー王立美術歴史博物館蔵）

※蛇の目傘を広げ、白い越中褌を前に垂らして足を広げる助六の股をくぐる脇差を差した男。

☆〈身づくろい〉（ベルギー王立美術歴史博物館蔵）

※衝立のこちら側で、鏡の前に坐り長い髪をといてもらう女と、櫛をくわえてその女の髪をとく女。その脇でカミソリで顔を剃っている女がいる。

838 身づくろい (ベルギー王立美術歴史博物館)

☆〈出語り〉 (22.9×16.9 ベルギー王立美術歴史博物館蔵)



※三人の唄い方の男の声に合わせて、刀を落とし差しにした男と、膝をついて反り返って踊る女。「歌舞伎」で、竹本(義太夫語り)は、舞台上の手の上の「床」と呼ばれる場所で御簾を下ろして演奏するのが一般的だが、特別に舞台に出て演奏することを「出語り」という。



839 出語り (ベルギー王立美術歴史博物館)

☆〈お稽古〉 (22.8×16.8 ベルギー王立美術歴史博物館蔵)

※三味線を弾く女師匠の前で、扇子で拍子を取りながら唄の稽古をする男たち。壁には弟子の名を記した札が掛けられている。

840 お稽古 (ベルギー王立美術歴史博物館)



☆〈魚頭観音〉 (ベルギー王立美術歴史博物館蔵)



※鯛の頭も信心からの凶。大きな魚の頭を拝む人たち。『軽筆鳥羽車』の影響あり。

841 魚頭観音 (ベルギー王立美術歴史博物館)

☆〈鉦叩き〉 (「戸塚宿」とも。22.4×16.9 ベルギー王立美術歴史博物館蔵)

※「戸塚宿 右かまくらみち」の表記のある道標の前で鉦叩きに銭を寄進する男たち。一人は銭縶(穴あき銭に紐を通して纏めたもの)を上差し上げている。

☆〈見立礼拝〉 (ベルギー王立美術歴史博物館蔵)

※結跏趺坐の形に坐る女を仏像に見立て、盆の上に塩を盛り、数珠を持って有難く礼拝する男たち。賽銭に見立てた銭やおひねりが置かれている。

☆〈転ぶ駕籠舁〉 (22.7×16.8 ベルギー王立美術歴史博物館/中右コレクション蔵)

※前の駕籠かきが柱にぶつかりバランスを崩し、後ろの駕籠かきが転び、傾いた駕籠の客侍が落ちそうになっている。

842 転ぶ駕籠舁き (「名品揃物浮世絵9 北斎II」パブリックドメイン美術館より)



☆〈柱くぐり〉 (〈胎内くぐり〉とも。22.9×16.5 島根県立美術館:永田コレクション蔵)

※柱くぐりは、柱の穴などを潜り、蘇生を願う禊祓などの信仰。



図は、踏み台になっている男の背に足を掛けて大柱の穴を潜りおおぼしら抜けようとしている男が、うまく抜けられなくなっている様子を描く。傍らでは同行の男があきれ顔で立っている。

843 柱ぐり（「名品揃物浮世絵 9 北斎Ⅱ」パブリック・メイン美術館より）

☆〈川渡しかわわたし〉（23.1×16.8 ベルギー王立美術歴史博物館蔵）

※太った女を背負って川を渡る人足と、それを肩で後押しする人足。その向こうでは、荷物を肩に担いで川



を渡る人足。

844 川渡し（「名品揃物浮世絵 9 北斎Ⅱ」パブリック・メイン美術館より）

☆〈夫婦の団樂だんらく〉（「一家の団樂」とも。22.8×16.7 ベルギー王立美術歴史博物館蔵）

※「鳥羽」と大書した屏風に着物が掛かり、その前に布団が畳んである。それを背にして、行燈の陰から顔をのぞかせる子を両膝を抱えて楽しそうに見ている夫婦。

☆〈酒盛りさけもり〉（「酒宴しゅえん」とも。22.7×16.8 ベルギー王立美術歴史博物館蔵）



※刺身の皿を前にして酒盛りをしている三人の男。女房が茶碗で辛子を懸命に練っている。男の一人は辛子が効いたのか、鼻をつまんでいる。周りには、伊勢屋利兵衛の定紋が記された三本の徳利と「鳥羽」と書かれた屏風がある。

845 酒盛り（ベルギー王立美術歴史博物館）

☆〈門付の瞽女こゝろ〉（22.6×16.8 ベルギー王立美術歴史博物館/島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※伊勢屋利兵衛の、山形に「林」の伊勢屋の定紋のある店先で、三味線を持つ二人と、杖を突いて歌う瞽女たち。側では犬が吠えている。

☆〈喧嘩けんか〉（ベルギー王立美術歴史博物館蔵）

※上半身裸の女の髪を引っ張り、棒で叩こうとする男を止めに入る二人の男。後ろでうろたえている男は間男か。床には茶碗が割れて転がっている。

●錦絵『風流おどけ百句』（文化 8 年～11 年〈1811～14〉。滑稽な画で描かれる。横小判揃物。北斎画。伊勢屋利兵衛版）

※現在 39 図報告されているという（2018 年『江戸の戯画展』図録 p 245）。

謎かけのある絵を分類し『謎かけ戯画集』として別本とする説が有力だが、画集や所蔵館によっては、両本を区別せず『風流おどけ百句』に全ての絵を所収しているものもある。全何図かは不明だが、題名から 100 句が予定されていたか。

☆〈井戸替いどか替〉（11.5×17.4 北斎館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※井戸の底の泥などを汲み出す網を滑車を使って引き揚げ二人の男と、井戸に垂らした網を両手で操る男。狂句「井戸替えに下女くれぐれも銀ながし」は、井戸に落とした銀流しの簪などもくれぐれも探してほしいの意。「銀流し」は、水銀に砥粉を混ぜて金属に擦りつけて銀色に仕上げ、装身具に利用した。はがれやすいところから、見かけだおしの意味でも用いる。

☆〈かたつむり〉（11.5×17.5 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※巨大な蝸牛を「色」の字が記されている提灯を差し出して恐る恐る見ている男。側で独鈷の杖を立てて眺めている男。文化7年の『己痴羣夢多字尽』にも同様の絵がある。狂句はない。

☆〈あんまとり〉（11.8×17.5 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※按摩に頭を揉ませる男。その男に煙管を差し出す宿の女。「盃を手渡しにするあん満と里」

846 あんまとり (www/osaka-art-museum.jp より)



☆〈御慶〉（大英博物館蔵）



※正月の酒宴の後、泥酔して歩けない袴姿の侍が供の男に腰を支えられ、もう一人の小奴が前で支えられながら門松に向けて挨拶している。「酒呑ハ御慶に節をつけている」。

「御慶」は祝いの挨拶のこと。

847 御慶（大英博物館）

☆〈むかい酒〉（島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※手足の長い男女が向かい酒をする図。亭主が女房に酒徳利を差し出している。「一升の女房ねがふむかい酒」

☆〈若い信女〉（〈つつはらみ〉とも。11.5×16.4 島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※「信女」とは、仏教で、五戒を受けた在家の女性の信者。優婆夷とも。着物をはだけ、孕んだ腹を突き出している女のまえで、両手を突き出して驚いている男。「とんだ事若いしん女がつつはらみ」

848 若い信女（島根県立美術館）



☆〈妊婦〉（11.4×17.3 北斎館蔵）

※大きな腹に腹帯をした妊婦が悲しそうに右袖を顔に当てて座っている。側で老婆が長煙管を持って妊婦を見ている。呆れたような、困った様な表情で額に手を当ててのけぞっている男もいる。「其様に誰にされたと下女がやど」。

☆〈いくぢなし〉（〈夫婦〉とも。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※播り鉢ごと回して播っている胸のはだけた女を、後ろで煙管を持って笑いながら見ている男。「播り鉢をおつけまわすいくぢなし」

849 いくぢなし (島根県立美術館)



☆〈瓜の皮〉 (11.0×16.9 すみだ北斎美術館:



ピーターモース・コレクション蔵

※莫座の上に瓜を並べて売る男。側で買った瓜を丸ごと食べている男。その前ですべて仰向けにひっくり変えている男。「炎天にすべるをみれば瓜の皮」

850 瓜の皮 (すみだ北斎美術館)

☆〈玉簾〉 (〈まっぱだか〉とも。11.5×17.4 すみだ北斎美術館:ピーターモース・コレクション蔵)

※向こうむきで裸で三味線を弾く男。その横で、台本を見て禪一枚で浄瑠璃を歌う男。「玉簾の内にぞゆかしきまっぱだか」

851 玉簾 (www/osaka-art-museum.jp より)



☆〈天竺浪人〉

※天竺浪人とは、住所不定の浮浪人のこと。図は、雲



に乗る浪人と二人の中間 (実は雲助)。

☆〈皮きり〉 (〈見せられず〉とも。島根県立美術館:永田コレクション蔵)

852 皮きり (島根県立美術館)

※女に灸を据えられる男の情けない表情。「皮きり」とは、最初に据えるお灸のこと。「皮切りの顔

わ女にみせられず」

☆〈ひざがしら〉

※髪結いに髪を整えさせる男と鏡を見る男。

☆〈芋〉 (「犬つくね芋おろし」とも。島根県立美術館:永田コレクション/大英博物館蔵)

※巨大なおろし金で巨大な山芋を男が二人がかりで擦りおろしている。側では、擦られた芋に足を取られて仰向けに転んでいる男がいる。「とや切らん斯や切らんとつくね芋」

853 芋 (大英博物館:Snorql for Japan Search より)



☆〈下手のまり〉 (島根県立美術館:永田コレクション/すみだ北斎美術館:ピーターモース・コレクション蔵)

※男が鞆を蹴り上げたが、履いていた右足の草履が脱げ、鞆は侍の顔に当たっている。二人の間で小奴が驚いて両手を上げている。「下手のまりはやくよこせとせがまれる」

☆〈万能膏〉（ベルギー王立美術歴史博物館蔵）

※「紅毛伝法 万能膏」と大書きした衝立の前に、ひっくり返って足を上げ、万能膏の入った鍋を引っ掛けている男。火鉢の前では両手を差し出して驚いている女。「馬鹿なげが万能膏で焼けどなり」とあり、何にでも効くという万能膏をつけたら、かえってやけどになったの意。

☆〈夜鷹に旦那〉（すみだ北斎美術館）

※材木の立てられている側で手拭を被った夜鷹が、通りすぎようとする男の着物を引っ張って呼び込もうとしている。夜鷹の足元には、煙管を銜え巾着を手にした男がしゃがみこんでいる。「商売に武士つき合と夜鷹いゝ」

☆〈きつねつき〉（すみだ北斎美術館）

※男が膝をついて鉦と数珠を持って囃している前で男が狐憑きになったように足と腕を振り上げて踊っている。「きつねつききぬけのされてつねのひと」

☆〈いやな下女〉（すみだ北斎美術館蔵）

※下女が二人、朝の化粧をしている。一人はお歯黒をしている最中で、もう一人は跪いて鏡の前で化粧をしている。下品な額つくりをしているので上品な富士額ならぬ浅間額になっているというもの。「いやな下女浅間びたひにつくるなり」

☆〈にくみ口〉（大英博物館蔵）

※女房が座敷箒を抱えて夫らしき男を部屋から掃き出そうとしている。男は仰向けになって股の間から両手を出して手を合わせている。脇には化粧箱が倒れ櫛が転がり出ている。「にくみ口はき出すやつく（？）しゆる箒」。しゆる箒は、棕櫚の葉を束ねて作った箒。

854 にくみ口（大英博物館）



☆〈編み笠の男と奴二人〉（すみだ北斎美術館蔵）

※編み笠を被った侍が手にした扇の先を土下座する二人の奴に向けて何か言っている。狂句はなし。

☆〈やすもの〉（すみだ北斎美術館蔵）

※太鼓腹の男が飯を食べている。その側で女房が空になったお櫃を持って立っている。「やすものゝめしうしないは喰いぬけ」。

☆〈乳母こまり〉（すみだ北斎美術館蔵）

※乳母の背中の子どもを風車であやす男。座ってそれを見ている子ども。「朝はどうからお●●乳母こまり」。

☆〈縛られる泥棒〉（すみだ北斎美術館蔵）

※藁笠を被った泥棒が盗んだ着物を抱えて逃げようとするが、蒲団に跪きながら泥棒の禰

の先を掴んで逃がさないように引っ張っている亭主。その側で、何も気づかない女房が灯りに火をつけようとしている。「泥棒もしばって置けば咄する」。

☆〈評判の悪さ〉（すみだ北斎美術館蔵）

※旨をはだけて開いた手紙を持ち、片方の長煙管を下女に差し向けている女房。跪く下女は袖を顔に当てながら右手で女房の持つ手紙を指さしている。「評判のわるさ女房と下女が論」。

☆〈糸目〉（すみだ北斎美術館蔵）

※太い糸目を引っ張っている男。その下の糸を寝転びながら引っ張る男。側で子どもが糸を見上げているが糸は描かれない。「貧ながき糸目をもって呵られる」。

☆〈不承知〉（すみだ北斎美術館蔵）



※枕屏風の脇に蒲団の敷いてある部屋で、立ち上がった下女の寝間着の紐を引っ張って言い寄る男。下女は頭に二本の人差し指を立てて拒否をしている。「不承知な下女はひたいに二本あて」

855 不承知（すみだ北斎美術館）

☆〈色事〉（島根県立美術館：永田コレクション蔵）

☆〈武道〉（島根県立美術館：永田コレクション蔵）

☆〈月見〉（島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※三人の男が部屋で食べ物の皿の周りに車座になって酒宴をしている。

☆〈頼朝〉（島根県立美術館：永田コレクション蔵）

☆〈唐崎のまつ〉（中右コレクション蔵）

●錦絵『謎かけ戯画集』（文化8年～11年〈1811～14〉）。謎かけの内容なので『風流おどけ百句』と分ける傾向がある。32図が確認されているという。横小判。各平均11.5×17.5。北斎画。伊勢屋利兵衛版。『新北斎展図録』では、文政元年～天保2年（1818～31）としている。（一部、謎かけ不明あり）

☆〈おあしが八本〉（島根県立美術館：永田コレクション/名古屋テレビ放送）

※「(たご)とかけて三貫二百文ととく 心ハおあしが八本」

大蝸が座布団に座って頭の布にの足を当て、他の足で算盤を持って玉を弾いている。膝の前に紐に通した銭が八本置かれている。その前で小僧の蝸が盆に乗せた茶碗を差し出している。



☆〈下手の将棋〉（島根県立美術館：永田コレクション）

856 下手の将棋（島根県立美術館）

※「雷とかけて下手将棋ととく、心ハ●●ニで逃る」（新北斎展図録）

雷に驚いて、将棋盤をひっくり返してのけぞって怖がる三人の男。

☆〈下手の鞠〉（ベルリン東洋美術館/島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※二人のやせた男が鞠を蹴っているが、鞠に当たらず下にある（謎かけ不明）。

☆〈下手な碁〉（名古屋テレビ放送/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※「下手な碁とかけてよい娘ととく 心ハ誰も一もくおしたがる」

男と碁を打つ娘を見つめる男の図。

☆〈鍋の中〉（島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※「鍋の中の氷とかけてなぞときの坊主 心ハかければとける」

囲炉裏に掛けた鍋が沸騰し、女と男が驚いてのけぞっている。

☆〈手習子〉（島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※「手習子とかけて田植ととく 心ハきじ●●戻る」（新北斎展図録）

三人の子ども。一人は傘を広げて向こう向きにしゃがんでいる。下駄の足だけが見える。一人は風呂敷の荷物を持ち上げている。一人は蛇腹状の紙束を広げている。

☆〈ばばさまの小言〉（名古屋テレビ放送蔵）

※「ばばさまの小言とかけて九月卅日ととく 心ハ秋はてた」

孫に肩を叩かせながら、嫁に小言を言っているばばさまの図。 857 ばばさまの小言（名古屋テレビ放送蔵）



☆〈桂馬〉（ベルギー王立美術歴史博物館蔵）

※「桂馬とかけてのみととく 心ハはねだしてとらるゝ」

枕のある部屋で、上半身裸の夫婦らしき男女が、畳の上や着物に出てきた蚤を潰そうとしている。

☆〈孕んだ男〉（すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/名古屋テレビ放送蔵）

※「孕んだ男とかけて落た青梅ととく 心ハうむ事がならぬ」

孕んで大きくなった裸の腹を突き出して座る男の前で、ばばさまが腕を組んで困った顔つきをしている。その間にうつ伏して僧侶が頭を抱えている。

858 孕んだ男（すみだ北斎美術館蔵）



☆〈鬼ころし〉（〈金時〉とも。名古屋テレビ放送蔵）

※「金時とかけて地酒ととく 心ハ鬼ころし」

恐ろしい形相で片膝を立てた金時が、面前でしゃがんでいる鬼を見ている。

☆〈囲炉裏端〉（〈鍋の中の氷〉とも。名古屋テレビ放送蔵）

※「鍋の中の氷とかけてなぞときの坊主ととく 心ハかければとける」

囲炉裏にかけた鍋が噴きこぼれ、囲炉裏端にいた向かい合わせの男女が驚いてのけぞっ

ている。

☆〈本蔵が娘〉（ベルギー王立美術歴史博物館蔵）

※「本蔵が娘とかけてさいの河原ととく 心は大石こいし」

本蔵とは、「仮名手本忠臣蔵」に登場する加古川本蔵で、その娘小浪は大星由良之助（大石内蔵助）の息子大石力弥と許婚の仲である。図は、白無垢の着物に白の綿帽子を被った娘が、右袖を目に当て泣いている。その前で両手両膝をついて慰めている母親。

☆〈雷〉（〈一の富〉とも。名古屋テレビ放送蔵）

※「一の富とかけて雷ととく 心はどこへ落るともしれぬ」

雷に驚き、蚊帳から出て耳をふさいで怖がる娘と年増。

☆〈陰乱男〉（〈秋口の蛇〉とも。すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/名古屋テレビ放送蔵）

※「陰乱の男とかけて秋口の蛇ととく 心は穴計見付て歩行」

蔵の土台に開けられた鼠除けと空気通しの穴を、箒と塵とりを放り出して、腰をかかめて覗く二人の掃除人。

☆〈茶碗拍子〉（〈月夜鳥〉とも。名古屋テレビ放送蔵）

※「月夜鳥とかけて茶碗ひやうしのいたことととく 心はうかれて出る」

三味線の女師匠の前で、茶碗を箸で叩いて拍子をとる男と、その隣で手踊りをする男。

☆〈鑄かけ〉（名古屋テレビ放送蔵）

※「鼠猫鳥とかけて鍋釜鑄かけととく 心はちっふうかあ」

寺の釣鐘が下に横に置かれ、その前で僧侶が台に腰掛けている鑄掛屋に話しかけている。鑄掛屋はどうしたものかという顔をしている。



859 鑄かけ（ボストン美術館）

☆〈五合徳利〉（〈馬鹿〉とも。名古屋テレビ放送蔵）

※「馬鹿とかけて五合徳利ととく 心は一せう（一生・一升）つまらぬ」

太った芸者が長煙管で煙草を吸っている。その横で三味線を膝にして、頭の右側で結ぶ馬鹿鉢巻をして、うれしそうに芸者を見ている男。脇に徳利が転がっている。

☆〈唐辛子〉（名古屋テレビ放送蔵）

※「唐辛子とかけて秘蔵娘ととく 心は色づくほどきびしくなる」

図は、食事をした男があまりの辛さに、皿の唐辛子を指差して顔をゆがめている。それを見て笑う芸者の姿。

☆〈鰻〉（ベルギー王立美術歴史博物館蔵）

※「鰻とかけて儘ならぬ恋路ととく 心ハさかれてのちに身をこがす」

大きな魚籠から逃げ出した大鰻を両手で捕まえようとしている男と、その様子を驚いて見

ている男。 860 鰻 (ベルギー王立美術歴史博物館)

☆〈湯屋の桶〉 (すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵)

※「湯屋の桶とかけて年男ととく 心ハ明を尋る」

☆〈両国の名物〉 (名古屋テレビ放送/島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※「唐壺のまつとかけて両国の名物ととく ころろハいくよ久しい」

遊女に肩を叩かせ、胡坐をかいて薬缶から椀に茶を注いでいる男の前で、牡丹餅を食べている小奴。

☆〈江戸子〉 (呉服屋の商) とも。島根県立美術館：永田コレクション/名古屋テレビ放送蔵)

「江戸子とかけて呉服屋の商 ととく 心ハちつとでもまけねへ」

上半身裸の二人の男が胡座を組んで酒宴の様子。脇に大徳利と鶴徳利があり、一本が転がっている。男の背後に伊勢屋の定紋が描かれた書き付けの紙が広げられている。

●錦絵『狂句入り戯画』(文化 11 年～15 (1814～18))。「風流おどけ百句」に似ているが、全て無款で画題がない。横小判 伊勢屋利兵衛か)

※天保元年～5 年 (1830～34) にも「狂句入り戯画」がある。

☆〈悪い酒〉 (島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※菰を巻いた大樽酒の前で泥酔した男の腕を肩に回して連れて行く男。「悪い酒くだを巻いたりからんだり」とある。

☆〈刎つるべ〉 (島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※井戸から水を汲む男と、桶の柄を片手で持つ太った女。「汲分けて御らんと下女の刎つるべ」とある。

☆〈桶や〉 (島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※横になった籬の外れた大きな桶に手を掛け、空を見上げる桶やの男。遠くで槌を放り出してひっくり返る男がいる。「井戸がハの中から桶や空を見る」とある。

☆〈下女ヒンビン〉 (島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※桶に入っている瓜を取り出して男に向かって投げつける胸もあらわな女。落書きの相合い傘に「長松/おはん いろいろ」と書かれている。「御馬なき(?) 下女ヒンビンとはねつける」とある。

☆〈薬研形〉 (島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※前をはだけた半裸の太った女の前で、薬研で薬をひいている男。「薬研形 たを拵へる道具也」とある。

☆〈嘘の川〉 (島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※煙管を銜えてほらを吹いているような男と、その前で包丁を研いでいる男。「嘘の川



「一夜ひとよひらよくに深くなり」とある。

●肉筆画「注連繩しめなわに鶏にわとりの絵馬えま図」（文化4年～10年〈1807～13〉）。紙本着色一幅。北斎画。花押。25.0×32.5 誓教寺蔵）

※薄紅で描かれた注連繩に寄せ掛けられた雄鶏が描かれた絵馬。焉馬名えんまなが記される。

●錦絵「浅草観音あさくさくわんおん雷神門らいじんもん」（文化元年～10年〈1804～13〉）。横大判。北斎画。西村屋与八版。国立国会図書館蔵）

861 浅草観音雷神門（国立国会図書館）

※いわゆる「新板浮絵」風な描法だが、その表題はなし。大提灯の掛かる雷神門が図の右に描かれ、その前の広場に往来する人々が小さく描かれる。図の左には火の見櫓ひのみぐらの先に浅草寺近くの本願寺本殿の大屋根が見える。



●肉筆画「墨堤三美人ぼくでいさんびじん」（文化6年～10年〈1809～13〉）。絹本着色一幅。葛飾北斎画。印 亀毛蛇足。52.9×114.7 嵯峨嵐山福田美術館蔵）



862 墨堤三美人（嵯峨嵐山福田美術館）

※隅田川に涼を求めに来た女性たち。一人は手拭を被り裾を端折って、笊ざるで浅瀬の魚を獲ろうとしている。堤の縁台に、絹の着物の二人の女性のうち、若い娘がその様子を楽しげに見ている。眉を剃った年増は、片膝を立てて煙管を手てにしている。画面上に、風にそよぐ柳の葉が描かれている。（文化6年条 P325 にも図番号 515 として重複掲載しているが、そのままにした）

●肉筆画「五美人ごびじん図」（文化5年～10年〈1808～13〉）。横長絵。絹本着色一幅。葛飾北斎画。印 亀毛蛇足。40.8×78.9 細見美術館蔵）



863 五美人図（細見美術館）

※二人の婦人が反物に物差しを当てて広げ、裁断しようとしているのか。下に鉢はちまが置かれている。側で娘が様子を見ている。近くで黒の羽織おかみの女将が長い煙管をくわえて、その

隣で座っているもう一人の女と何かを話している。賛に「画中群女がちゆうのぐんじよ 顔催かおにえくほをもよおす 靨ががいの 画外

一夫 口出涎 君かため目に正月は したれ共 こゝろに起す 盆々煩惱 能舞亭三鞠
題」とある（読み下し・ルビは筆者）

●肉筆画「五美人図」（文化元年～10年〈1804～13〉）。縦絵。絹本着色一幅。葛飾北斎画。86.4×34.3 シアトル美術館蔵

※上から、筆をくわえて手紙を書く武家の奥方、鉢の花に水をやる町娘、外出姿の黒い着物の御殿女中、鮮やかな色の着物を着た花魁、本を読む町人の女房が描かる。

864 五美人図（シアトル美術館）



●扇面画「縁台の三美人図」（文化5年～10年〈1808～13〉）。紙本着色扇一面。葛飾北斎筆。印 亀毛蛇足。18.7×47.0 太田記念美術館蔵

※三人の婦人や娘が。花で飾られ、山水画が描かれた箱行灯が吊るされた縁先に敷かれた赤い毛氈の上で涼をとっている。



865 縁台の三美人図（太田記念美術館）

右（部分拡大）

●肉筆画「立美人図」（文化7年～8年〈1810～11〉）。縦長絹本着色一幅。葛飾北斎筆。印 雷震。82.3×30.6 フリーア美術館蔵



※紗の打掛を背中を抜いて羽織り、赤と茶色地で片輪車と呼ばれる文様の帯をしめ、白地の扇子を広げて小首をかしげる遊女。髷の前と元結いには赤い飾り布がある。赤草色の襦袢の襟をチリチリに描くのはこの頃の北斎の特徴とされる。

※落款の「葛飾北斎」に続く字は「画」とされるので、「葛飾北斎筆」とあることから、北斎自筆か疑うむきもある。

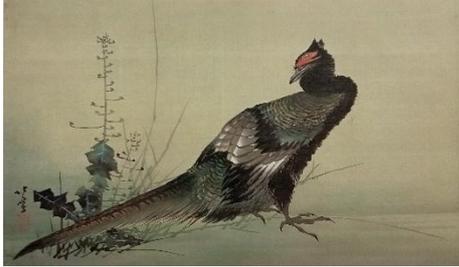
866 立美人図（フリーア美術館：amazon.co.jpより）



●肉筆画「美人夏姿図」（文化3年～10年〈1806～13〉）。掛幅。絹本着色一幅。葛飾北斎画。印 亀毛蛇足。85.3×29.4 個人蔵

※弓なりに体をひねって、白いしごき帯を締める女の図。首を極端に傾けて立っている。薄い着物の下に透けて見える紅色の下着が淡く描かれる。典型的な宗理型美人図。

●肉筆画「雉子図」(文化5年~10年<1808~13>)。絹本着色一幅。北斎画。[印]亀毛蛇足。32.1×55.4 MOA美術館蔵)



※薄墨で描かれた薺の葉に真直ぐ伸びた尾を乗せるようにして、首を背の方に向けている雉子。目の周りの赤色や、首から背にかけて緑から青のグラデーションになっている。

868 雉子図 (MOA美術館:『2005 北斎展図録』より転載)

●肉筆画「化粧美人図」(「けわいびじんず」とも。文化7年~8年<1810~11>)。文化10年頃説あり(井上和雄『北斎』)。絹本着色一幅。葛飾北斎。[印]亀毛蛇足。95.7×33.2 城西大学水田美術館蔵)



※脇の黒塗りの鏡台に左肘を掛けたまま柄鏡を手にして、右手に化粧筆を持っている女の図。衣桁には帯が掛けられ、女の前には鏡の蓋があり、その上に鼈甲の簪が置かれている。

869 化粧美人図 (城西大学水田美術館)

※享和元年~文化元年<1801~04>に描かれた「化粧美人図」(MOA美術館蔵)の絵とは別のもの。宗理美人と違い若干ふくよかな顔つき指摘となっている。

●肉筆画「羅漢図」(文化7年~14年<1810~17>)。紙本墨画淡彩一幅。北斎戴斗筆。[印]ふもとのさと。100.0×41.5 東京国立博物館蔵)

※この図と同様のものが『北斎漫画』二編に、半諾迦尊者が掲げた鉢から出る煙の中に龍が描かれているので、それを描いたといわれるが、鉢を

掲げて毒龍を制する伐那婆斯尊者ではないかという説もある。『北斎漫画』では、半諾迦尊者と並んで伐那婆斯尊者が描かれているが、こちらは座って煙の中の龍を見ている。同画題の「羅漢図」は弘化3年(1846)にもある。

870 羅漢図 (東京国立博物館)



●肉筆画「野人对瓶花」(文化6年~10年<1809~13>)。紙本着色一幅。画狂老人北斎筆。[印]一人人形。113.5×49.0 北斎館蔵)

※腰に蓑をつけた農夫が、地面に座り岩の上に置かれた破れ鍋に生けられた白牡丹を見上げている図。

※「牡丹鍋と男」(本書p547。文政元年~4年<1818~21>)紙本着色一面。もと掛幅。

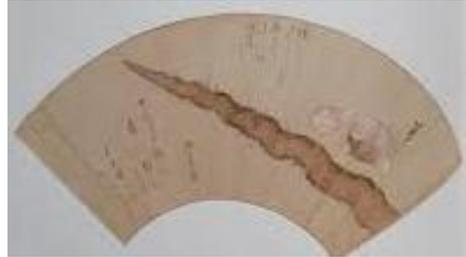


北斎改葛飾為一筆。[印]葛しか。127.3×54.5 フリーア美術館蔵『2005 北斎展図録』p 36 所収)と同一画であるが、制作年・落款・印・寸法・所蔵館が違うので、検討を要する。

871 野人对瓶花 (北斎館)

●扇面画「芋の図」(文化7年～11年〈1810～14〉)。扇面着色一面。北斎戴斗。[印]辰[印]政。17.5×48.5 個人蔵)

※長芋を扇の右下から左上に描き、図右に里芋を二つ描く。北斎自賛「鱈となりてまつたからんより屁となりてわらひを催すべし」、



872 芋図 (『2019 新北斎展図録』より転載)

浅草庵市人の賛「謡はず舞はず狂歌よみ芋の煮るも知らぬたのしさ」がある。

●肉筆画「舟まんじゅう図」(文化11年～15年〈1814～18〉)。絹本着色一幅。北斎画。[印]辰[印]政 24.0×30.0 個人蔵)

※夕暮れから箱崎辺りや、日本橋浜町河岸に、大きめの泊り船の近くで小舟を漂わせ、客を取った私娼。天明の頃、隅田川の船中で饅頭を売るのを表向きにしていたのでこう呼ばれる。32文(約800円)であつたらしい。船虫、船君、船狐とも呼ばれた。『色里名所鑑』



873 舟まんじゅう図 (2012年大阪市立美術館『北斎一風景・美人・奇想 一』展図録より転載)

(安永年間)には「船饅頭といふ浮草あり、少しの古石場の上に横根さし、(略)花の数は三十二に極まる、入相の頃より中洲箱崎の辺に多く漂ふ、また所々泊り船のほつりをちらちら流れありて」とある(「ウキ°テヱ」より)。

※小舟の上で、御高祖頭巾を被り、火鉢を足で挟んで、籠にもたれてうつろなまなざしで暖をとる女。背後の籠には正月飾りのウラジロが入れられている。

●肉筆画「雪中傘持ち美人図」(「雪中美人図」とも。重要美術品。文化10年～文政2年〈1813～19〉)。絹本着色一幅。前北斎戴斗筆。[印]ふしのやま 99.5×34.7 個人蔵)

※太田南畝(蜀山人)の賛「たおやめの あたゝか さうに見えたるハ 空に しられぬ 雪の はたえ(肌)か」

※雪中に客を迎える花魁の姿ともいわれるが、そのような迎えを花魁はしないともいわれる。宗理風美人から抜けて、ふっくらした顔立ちの美人図となっている。

※本図は「大坂三越呉服店肉筆浮世絵展」(大正8年:1919)に「雪中少婦の図」名で出品され、図録(大正9年:1920)によれば、「松江・桑原羊次郎氏所蔵」となっている。



874 雪中傘持ち美人図（個人蔵 2005年『北斎展』図録より転載）

●肉筆画「**浅妻舟**」（文化元年～10年〈1804～13〉。紙本着色一幅。北斎。印亀毛蛇足。84.0×26.5 光ミュージアム蔵）

※金の烏帽子に水干姿で白拍子姿の女性が鼓を足元にして、琵琶湖に浮かぶ小舟の中で遠くを眺めながら浪にたゆたう図。朝妻舟は琵琶湖の朝妻と大津間の渡し船の名称だが、都落ちした平家の女房が船上で春を売った柳の下の舟として描いている。藍亭青藍の賛「人夜かふねにあふみちのあさつまやめはふかくならぬひとのちにふの名たふれやなれにしとこの山嵐にねみたれ髪柳かけつなかぬふねのうきてよにつひのよるへはいさやかはいさしらすちもこゑそへてうつやつゝみのうつゝたふや」が図の上部に記される。

875 浅妻舟（光ミュージアム）

●肉筆画「**大竜巻図**」（文化11年～文政4年〈1806～21〉。絹本淡彩一幅。葛飾戴斗筆。印不明（ふしのやま？）北斎館蔵）



※竜巻の中心の目を通して地上を見ているのか、天空を見上げているのか。常識を超えた視点による図。

876 大竜巻図（北斎館）

●扇面画「**なまこ図**」（文化11年～文政2年〈1814～19〉。紙本彩色扇一面。北斎改戴斗筆。印ふしのやま（永田生慈北斎コレクション展図録による）。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※扇に二匹のなまこだけを明清画風に描く。骨組みの扇に直接描いたものと思われる。なまこの表面は、付立（日本画で、筆に含ませた水と絵の具の加減で濃淡の効果を出すために、輪郭線を描かず、筆の腹で描く）の点苔（苔のように点を要所に打つ描法）で描かれる。

877 なまこ図（島根県立美術館）



●肉筆画「**読簡美人**」（文化年間〈1804～19〉。縦画一幅。総州葛飾郷前北斎戴斗筆。印（不明）。

※「大坂三越呉服店肉筆浮世絵展」（大正8年）の図録（大正9年）によれば、「京都広岡伊兵衛氏所蔵」となっている。

※首をかしげて巻手紙を読む女。手紙の端は女の右に垂れている。眉を剃っているので既

婚の女か。袖からは肘まで出ている。着物の裾からは右足首が出ている。中着の襟と袖はチリチリが強調される。

●画稿「**花魁図**」(文化 11 年～文政 2 年〈1814～19〉)。無款。114.2×54.0 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※墨画稿で、6 枚の紙を貼り合わせて描かれる。多くの**簪**を差し、顔が着物の襟に埋もれるかのように首を前に傾けて歩いている**花魁**図。花魁特有の三齒の下駄の齒が見えていて、足を踏み出した直後の姿となっている。前帯の**亀甲**模様や、打掛の花模様など細密に描かれる。完成された作品は発見されていないという。

878 花魁図画稿 (島根県立美術館)



●錦絵「**雪の隅田川**」(文化年間〈1804～18〉)。横大判。北斎旅中画。24.9×38.0 ベルギー王立美術歴史博物館蔵)

※午前の隅田川に二艘の船。遠くに一艘の船も見える。右下に一羽の鴨が泳ぐ図。

●錦絵「**桜花**」(文化年間〈1804～18〉)。横中判。かつしか北斎。18.8×24.2 ギメ美術館)

●提灯絵肉筆画「**龍虎**」(文化年間〈1804～18〉)。無款墨摺淡彩。40.6×30.5)

※墨摺風の地に龍虎が睨み合っている図が描かれる。提灯の上部に



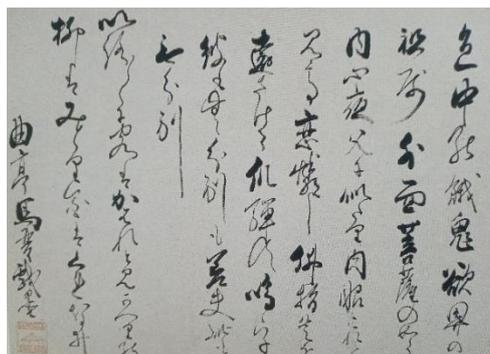
稲妻が朱色で横に引かれている。879 虎 (ビゲロー・コレクション：mauian.com 及び 令始ブログより転載)

●肉筆画「**桜花海浜図**」(文化 7 年～文政 2 年〈1810～19〉)。絹本淡彩一幅。前北斎戴斗筆。印葛しか。91.3×32.7 岡田美術館蔵)

※緑の葉繁る木々の幹に桜の花が咲き、遠景には小さく舟が**胡粉**で描かれる。図の上部は空が薄青く広がっている。

●肉筆画「**美人図・賛**」

880 人図・賛 (『2007 北斎展図録』より転載) 右：馬琴の賛



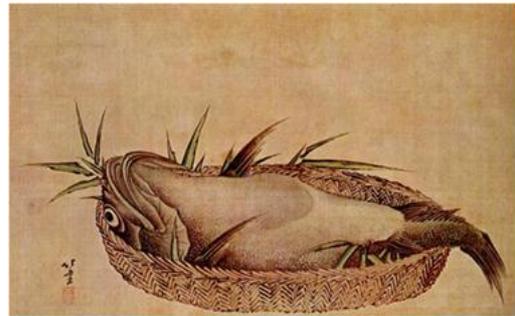
(文化 11 年～文政 4 年 (1814～21))。紙本淡彩一幅。前北斎筆。印辰印政。美人図 25.7 ×26.7 賛 26.8×36.2 個人蔵)

※全体に淡い墨絵風で、横座りの女の点描模様の帯と髻の結綿には藍色を用い、襦袢と髪飾りには赤が使われる。着物の枠は取らず、筆を摺るように描く。曲亭馬琴の賛の後半には「いろくに客はかはれど見かへりの 柳はみどり花はくれない」とある。

●肉筆画「鮫鱈図」(文化元年～文化 10 年 (1804～13))。絹本着色一幅。北斎画。印亀毛蛇足。30.5×55.5 すみだ北斎美術館蔵)

※箆に敷いた笹の葉の上に、腹を上にして置かれた鮫鱈。空を見るように見開いた大きな目と全身の点苔が生々しい。

881 鮫鱈図 (すみだ北斎美術館)



●掛幅肉筆画「新年の行事図」(「新年風俗図」とも。文化 3 年～8 年 (1806～1811))。絹本着色。掛幅二幅。「若水の用意」と「初夢」の対。北斎画 (花押) 。各 115.8×44.2 フリーア美術館)

☆〈若水の用意〉(〈朝化粧〉とも)

※ねずみ色の着物を着ている遊女が、漆塗りで蒔絵の湯桶を持って、朱塗りの三方に乗せた青白磁の椀に若水を入れようとしている。椀の脇には杓が入れ物の上に乗せられている。三方の脇には湯桶の蓋が紙の上に置かれている。図左の衣桁には着物が掛けられている。

882 新年の行事図 (フリーア美術館 ; 綴プロジェクト複製)

左図 : 若水の用意 右図 : 初夢



☆〈初夢〉

※髻の前と元結いに赤い飾り布を付けた遊女が首を直角に曲げ、坐って宝船の絵を見ている。膝の上で



蒔絵の箱枕に敷く髪油除けの紙を巻きながら、初夢の用意をしている。背後には屏風が立てられ、黒い着物が掛けてある。

●肉筆画「茶筌売図」(文化 5 年～10 年 (1808～13))。寛政末～享和初期 (1799～1801) 説あり。紙本着色一幅。墨摺淡彩。不染居北斎画。印辰政。46.1×23.6 島根県立美術館 : 永田コレクション蔵)

※墨染の衣が風に靡き、白い頭巾を被り袈裟をまとった茶筌売り。

883 筌売り図 (島根県立美術館)

茶筌は、正月の初釜用に売られた。棒の先の藁苞に挿した茶筌を担いで、歯を見せてこちらを見ている。全体に墨絵風に刷毛を使って描い

た趣の画。



●肉筆画「茶笥売図」（文化7年～8年〈1810～11〉。紙本着色一幅。北斎戴斗筆。印雷震。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※墨をさっと引いて描く墨染の着物。長い棒の先の藁包に挿した茶笥。図の上には月の下半月が薄く描かれる。「茶笥売図」（扇面）は文化14年にもある。

884 笥売図（島根県立美術館）

●扇面画「物想う美人」（文化6年～10年〈1809～13〉。紙本着色扇一面。北斎画。17.9×46.5。太田記念美術館蔵）

※首をかしげ両手を合わせ、座って何かを想う女。藍色の波模様の帯が印象的。

●屏風絵「屏風七小町図」（文化4年～10年〈1807～13〉。紙本着色。八曲一隻屏風。北斎改戴斗。印亀毛蛇足。各62.5×45.5〈第二扇～第七扇〉。62.5×42.5〈第一扇：石川雅望の詞書と第八扇〉。北斎館蔵）。

※小野小町を扱った能の「七小町」に基づいた七図。享和2年頃にも「七小町」（画狂人北斎画）がある。文化10年(1813)4月25日に「亀毛蛇足」の印を弟子の北明に譲っているの、それ以前の作と思われる。八曲の屏風だが図は七図。小野小町の一生の伝説を描いている。第一扇は、六樹園雅望（石川雅望）の詞書。それに続いて右から、

☆〈雨乞小町〉第二扇

※白無垢の着物に蓑を着て、右手に雨乞いの起請文を台に乗せ持ち上げる小町。長い髪が蓑の流れる線描と同化している。



885 雨乞小町（1図）

☆〈草子洗小町〉第三扇

※着物を脱ぎ、下着姿の小町が草子を洗い鉢で丁寧に汚れを落としている。



886 草子洗小町（2図）

☆〈鸚鵡小町〉第四扇

※百歳の老婆になった小町を帝が憐れみ「雲の上はありし昔にかわらねど見し玉だれの内やゆかしき」の歌を贈ったところ、彼女は「内ぞゆかしき」と一文字だけ変えて、鸚鵡返しに返歌したという話に由来する。但し、図では若い小町が赤い襦袢に白無垢の着物を着て首をかしげて座っている。周りには桜の花弁が舞っている。



887 鸚鵡小町（3図）

☆〈清水小町〉 第五扇



※小野小町が清水寺に参詣した折に、修行中の僧正遍照に逢い「岩の上に旅寝をすればいと寒し苔の衣をわれにかさなむ」と歌を贈ったところ、遍照は「世をそむく苔の衣はただ一重さねばうとしいざ二人寝む」と返歌したという話。図は、車の前で蓑傘姿の二人が向き合っている。顔は見えない。

888 清水小町 (4 図)

☆〈通小町〉 第六扇

※比叡山に毎日木の実と薪を持って通ってくる里の女に僧が名をたずねると、「小野とは言はじ薄生ひたる市原野辺に住む姥ぞ」と言って消えたが、実はいまだ成仏しない小野小町の幽霊だったというあらすじ。図は、薄の生えた道辺に、白装束の小町が首を傾けて座っている。

889 通小町 (5 図)



☆〈卒都婆小町〉 (誓教寺蔵) 第七扇



※乞食の老女が卒塔婆に腰掛けているのを高野山の僧が見咎めて説教を始めたが、逆にやり込められる。驚いた僧が名を聞くと小野小町だったという。図は、傘を背負った老女が卒塔婆に座ってぼんやりしている姿。

890 卒都婆小町 (6 図)

☆〈関寺小町〉 第八扇

※関寺の僧が、近くに住む老いた小野小町から歌の道を教わるとい話。図は、杖を肩に架け、傘を持ち俯



891 関寺小町 (7 図)

く白髪頭の老女。

●肉筆画「八朔注太夫図」(「吉原遊君八朔の行事」とも。文化4年~10年(1807~1813)。紙本着色一幅。葛飾北斎。印 亀毛蛇足。115.5×45.6 北斎館蔵)

注) 八朔: 旧暦8月1日に農民の五穀豊穰を祈る祭り。江戸城ではこの日に、徳川家康が天正5年8月1日に江戸城入りをしたことを記念し、旗本や御家人・大名たちが白帷子に長袴姿で将軍に祝辞を述べた儀式もあった。吉原では「物日」又は「紋日」と呼ばれる年中行事の一つ。旧暦8月1日、吉原の遊女は、江戸城の儀式に因んで白無垢の小袖を着て客を迎えた。

892 八朔太夫図 (北斎館)



※図は、8月朔日、白無垢の着物で遊郭の中を道中する花魁を描く。着物の縁取りは墨絵風に筆を擦るように描く。横兵庫髷に八本の簪と櫛を差す。前帯と襟元は朱色。平原商涼曇把山「一筋の黒髪能く大象をも繋ぐへく/半点の朱唇輒く千金をも擲しむべし/植させてさとの栄花や桜狩」（ルビは筆者）、花魁の美しさに千金も厭わないという賛が記される。

●肉筆画「相撲玩具で遊ぶ童子」（文化5年～10年〈1808～13〉。紙本一幅。着色。北斎画。印辰印政。42.8×38.5 東京黎明アートルーム蔵）

※団扇を軍配に見立てて紙相撲の行事をしている立て膝の芥子坊主頭の子ども。紙力士の背に「●多川」と四股名が書かれている。杏花園（大田南畝）の賛に「すてられぬものは団扇よ 草相撲」の句が書かれる。

●肉筆画「山部赤人図」（文化8年～14年〈1811～17〉。絹本着色金砂子地。葛飾北斎筆。印雷震。59.0×77.0）

※印の「雷震」は主に文化8年～14年の使用と思われる。

※丘の上に立つ赤人。折烏帽子を被り、口ひげを生やした束帯の袖は風に煽られ前方にたなびいている。赤人の前には子供が正装して膝まづき、赤人と同じ方向に顔を向けている。

●肉筆画「吉原土手夜景図」（「日本堤夜景」とも。文化元年～10年〈1804～13〉。紙本着色一幅。画狂人北斎画。印亀毛蛇足。96.7×26.3）

※吉原に続く土手を行く駕籠かきと往来二人の人物をシルエットのように小さく描く。背景に薄く山の稜線が描かれているが、全体に墨絵画風のアクセントとして描かれたものか。図上に杏花園（大田蜀山人）の賛「心ゆくかたへの山路ふみわけて 花ハひとりそ見るべかりける」がある。

●肉筆画「時鳥と獅子図 双幅」（文化元年～10年〈1804～13〉。紙本着色双幅。北斎。印亀毛蛇足。各36.8×25.3 個人蔵）

※左図：細い三日月を背後にして鳴きながら飛ぶホトトギス。右図：首を上に向けて膝まづく獅子。太い筆で右足と左膝、背の丸みを一気に描いた趣。

●肉筆画「煙管持つ立美人図」（「煙管を持つ遊女図」とも。文化11年～12年〈1814～15〉。縦長絹本着色一幅。北斎改戴斗筆。印ふもとのさと 71.7×26.7 フリーア美術館）

※図上部に太田蜀山人の賛「埋火のしたにさわらで和らかに いいよらん言の葉煙草もがな」がある。左手で長煙管を持って立つ遊女。茶の打掛を着て、着物の裾の間から両足先が見える。遊女の下唇は笹色紅（紅を何度も塗って緑色にする）である。襦袢の襟のチリチリは、この頃の北斎の特徴とされる。遊女と長煙管は付き物である。

893 煙管持つ立美人図（フリーア美術館）

●肉筆画「雪の信濃路」（文化7年～13年〈1810～16〉。縦長絹本着色一幅。前北斎戴斗筆。印葛しか。111.5×41.2 北斎館蔵）





※縦長の画面の上下に雪を信濃路を行く旅人達を描く。図上部には降りしきる雪の中、屋並みの連なる湾曲した街道を二人の男が行く。街道に続く山並みには駕籠や数人の男が描かれる。図下には同様に天秤棒を担ぐ行商人や駕籠が描かれる。上下のどの人物も笠を被り顔は描かれない。



894 雪の信濃路（北斎館蔵）

●肉筆画「白紙に熨斗 水引と銀熨斗付図」（文化8年～12年〈1811～15〉）。絹本着色一幅。

北斎戴斗。印一人人形。26.8×55.6 北斎館蔵）

※熨斗と紅白の水引と二つ折りの奉書。紙の真ん中に、子どもの養子入りや嫁入りの幸福を願う「仕付銀」と呼ばれる銭が置かれている。

る。

●肉筆画「鶏図」（文化11年～15年〈1814～18〉）。絹本着色一幅。前北斎戴斗筆。印ふしのやま。97.0×34.0 個人蔵）

※鶏一匹。鶏冠のみ朱色。体は墨色。くの字に立って首をこちらにひねっている鶏。

895 鶏図（個人蔵 <https://www.exblog.jp> より転載）

●肉筆画「鶏図」（「ひよこと朝顔」とも。文化6年～10年〈1809～13〉絹本着色一幅。北斎戴斗。印ふもとのさと。27.0×35.1 北斎館蔵）

※鶏の親とその前にいる二羽のひよこ。三羽のとさかの赤と親鳥の羽根の墨色。朝顔の藍色の淡彩の絵。



●扇面画「鶏図」（文化6年～10年〈1809～13〉紙本着色。扇面一面。前北斎戴斗筆。印縦長方印：ふしのやま 16.6×48.0 大英博物館蔵）

※ひよこと親鳥の扇面図。親鳥の腹と尾羽は墨色。ひよこの体と親鳥の頭と鶏冠は朱色。図には扇の骨の痕が残る。

●肉筆画「矢細工師」（文化年間〈1809～18〉）。紙本着色一幅。画狂人北斎画。印亀毛蛇足。20.0×28.2）

※矢の細工師が、タメ直し（矢の曲がり直す）をしているところを描く。炭火に矢を焙りながら矢を修正している。細工師の前にはタメ直しの道具が置かれている。

896 矢細工師（<https://tamegoro.exblog.jp> より転載）

●肉筆画「列子図」（文化6年～10年〈1809～13〉）。絹本着色一幅。東都葛飾北斎戴斗筆。印亀毛蛇足。





94.3×37.1 ミネアポリス美術館蔵)

※エビのように体を曲げて風に任せて浮遊する列子。紅葉の葉が散り舞っている。列子は、中国戦国時代の鄭の哲学者、列禦寇の尊称。仙人風の趣があり唐代に道教で神格化されたという。風を意のままに操る仙人として「列子御風図」が雪村（1504～？）により先駆的に描かれている。

897 列子図（メトロポリタン美術館）

●肉筆画「擣衣美人図」（「砧図」とも。文化11年～15年〈1814～18〉。文化8年〈1811〉説、文化14年〈1817〉説あり。絹本着色一幅。北斎戴斗筆。印葛しか。97.5×34.5 個人蔵）

898 擣衣美人図（個人蔵 <https://www.facebook.com> より）

※藍の手拭いを口にくわえ、両手で白い布を折りたたんだ布を重ねて持ち、高下駄を履いて立つ娘。背後に衣を巻いた砧の道具と木槌が置かれている。

着物や帯の縁は、北斎の特徴のチリチリの線で描かれる。

●肉筆画「達磨図」（文化8年～12年〈1811～15〉。着色一幅。北斎画。印雷震。28.1×19.8）



※赤い僧衣を纏い、耳飾りをした達磨が、胸をはだけて瞑想している図。

899 達磨図 (<https://www.pinterest.jp> より転載)

●墨絵「達磨図」（文化年間〈1804～18〉。紙本墨画。画狂人北斎画。108.5×38.5 誓教寺蔵）

※落款の「画狂人北斎」は、寛政後期～天保まで用いられているので年代は特定できないが、一応文化期とした。白の僧衣を頭から被り横向きに立ち、何か見つめている図。僧衣は濃い墨で縁どられている。足が描かれる。

900 達磨図（誓教寺）

●肉筆画「面壁達磨図」（文化6年～文政4年〈1809～21〉。絹本着色一幅。北斎改戴斗筆。印ふしのやま。太田蜀山人賛「渡江一韋面壁九年依然 柏樹独立庭前」。30.0×48.4 個人蔵）



面壁九年依然 柏樹独立庭前」。30.0×48.4 個人蔵）

901 面壁達磨図 ([web:ameblo.jp](http://web.ameblo.jp) より転載)

※壁の割れ目から面壁の達磨が見える。頭から赤い法衣を



被り、目を開けて前方を見ている。

●屏風絵「四季耕作図」（文化 6 年～10 年〈1809～13〉）。紙本着色六曲一隻屏風。葛飾北斎画。印亀毛蛇足。107.0×292.0。個人蔵）



902 四季耕作図 (http://totemokimagure.cocolog-nifty.com より転載)

●肉筆画「韓信の股くぐり」（文化 6 年～10 年〈1809～13〉）。絹本着色一幅。葛飾北斎画。印亀毛蛇足。93.0×33.6 個人蔵）

※三人の男が縦に並んで足を広げている。その前にうつ伏して男たちの股をくぐろうとする韓信。その様子を見ている人たち。図上半分は、近くの松の先に山が山水風に描かれる。

●肉筆画「花籠図」（「花籠に蝶図」とも。文化 6 年～10 年〈1809～13〉）。紙本着色一幅。北斎。印辰 印政 35.1×24.1 個人蔵）

※花籠には白い牡丹と緑の葉。その花籠の上を紋黄蝶が舞っている。

●肉筆画「青楼美人繁昌図」（文化 9 年～11 年〈1812～14〉）。縦長版着色一幅。北斎筆。印亀毛蛇足。個人蔵）

※令和 3 年（2021）1 月 14 日「読売新聞」夕刊に新発見として掲載された。縦長画面に 6 人の妓楼の女が描かれる。図上から勝川春好の幫間、勝川春翁の花魁、勝川春周の三味線箱に寄りかかる芸者、歌川豊国の肩に犬を乗せた振袖新造、勝川春英の年増、北斎の女将など。西日本の個人が所蔵していた物を東京の美術商が入手したという。

内藤正人・慶応大教授が、落款や線描や色使いから真筆と鑑定。すみだ北斎美術館は、落款の摩耗具合などから 1800 年前後の作と推定されるという。勝川派から離れた後も、不仲と言われた春好などと交流があったことが分かる絵という。

903 青楼美人繁昌図（読売新聞より転載）



●屏風絵「**雑画屏風**」（文化7年～文政3年〈1810～1820〉）。二曲一隻屏風。紙本着色。無款。各70.3×79.9 フリーア美術館蔵

※二曲の中に各図を散らして描く。絵手本風であるが、各図は素描ではなく、完成された絵の趣となっている。

☆「**左曲**」左から、〈梅の枝にとまる鴛鴦〉〈刈り取った稲の束を下に置き、笠を被ったまま地に腹這いになって両肘をついて、左足を折り曲げて休む農夫〉〈鳥居の柱を朱色に塗っている職人〉

☆「**右曲**」左から、〈黒雲の中の龍〉〈対座する僧侶と紙に文字を書きつける男〉〈紐の解けた止まり木の側から顔をのぞかせる赤い頭の雉のような鳥〉〈青白磁の絵付けのある椀の水に投げ入れた桜の小枝〉〈太い墨の描線で描いた、駆ける馬〉〈黒の着物の胸をはだけ、長煙管を指先で持つ遊女〉

※全体に黄色がかかった絵。五月の田植えから秋の刈取りなどの農家の風景を描く。鹿鳴館の設計者・イギリス人ジョサイア・コンドル（1852～1920）の旧蔵品であったが、1942年デンマークで落札されたという。

●肉筆画「**山鳩図**」（文化年間〈1804～18〉）。紙本着色一幅。北斎爪画注。花押「北」。個人蔵

※注）爪画：筆を用いず、指先や爪に直接絵の具をつけて描く絵。『増補浮世絵類考』（『浮世絵類考』岩波文庫版所収 p147）に「伝に曰く、為一翁は曲面を善す。（略）中にも爪にて墨をすくひかく画はすぐれて妙なり、筆にて画たるが如し、画く処をみざれば其実をしるべからず」とある（ルビは筆者による。肉筆画「**逆筆布袋図**」（文化7年～11年〈1810～14〉）の項参照）。

●肉筆画「**九天玄女図**」（文化年間〈1804～18〉）。紙本額装。一部着色。無款。個人蔵

※九天玄女は、道教の仙女。人面身鳥の姿で黄帝に仕えた七天女の一人。黄帝に兵法を伝えたとされる戦いの神。板下絵の一部に彩色した趣の図。団扇を持ち身体をくねらせて立つ仙女。袖の周りのピンク色、打掛け風の着物の黒、袖から覗く下着の黄色のみ着色してある。

●肉筆春画「**閨中交歓図**」（文化12年～文政2年〈1815～19〉）。戴斗房中写。印ふしのやま（?）。個人蔵

904 閨中交歓図（部分：<https://shoto-museum.jp/>より転載）

※「週刊ポスト」（2020/2/7号）掲載。平成31年（2019）1月発見され即売され個人蔵となったと報道された。落款のある肉筆画は極めて珍しく、「房中写」とあるところから、実際の交接を前にした写生ではないかとしている（国際日本文化研究センター名誉教授：早川聞多氏の解説）。



は文化12年（1815）から文政2年（1819）の56歳から60歳まで使用されていると考えられているので、この時期の作とした。但し、本図の真贋は今後の究明を待ちたい。

●肉筆画「**傾城図**」(文化11年～文政2年〈1814～19〉)。絹本着色一幅。前北斎戴斗筆。
107.0×41.2 朱方印：判読不能注。岡田美術館蔵)



※大きな鼈甲の簪を髪に挿し、青い前帯に松の葉模様の仕掛(打ち掛け)を着て、三つ歯の高下駄を履いて八文字で歩く花魁道中の姿。仕掛の裾が丸く広がっているのは、八文字の歩きかたによるもの。

注：総州葛飾郷前北斎戴斗筆の印影でも使用している。

905 傾城図(岡田美術館) 右：落款拡大図

●肉筆画「**大原女図**」(文化12年～文政2年〈1815～19〉)。掛幅絹本着色一幅。北斎改为一筆。94.5×30.3 ポストン美術館蔵)

※三束の柴木を頭に乗せ、黒い手巾をして頭上の束を支えて立つ大原女。袖からは赤い襦袢が覗き、着物を腰に巻き付け、裾からは白い下着が覗いている。白足袋で草鞋を履いている。柴木の束に桜の小枝が挿され、赤い小さな包みが結びつけられている。

906 大原女図(ポストン美術館)

●扇面画「**腕相撲**」(文化7年～文政10年〈1810～27〉)。紙本着色扇一面。北斎戴斗筆。印辰印政 太田記念美術館)

※男二人が鉢巻をして腕相撲をしている図。

●肉筆画「**花魁立図**」(文化6年～7年〈1809～10〉)。着色一幅。葛飾北斎。印亀毛蛇足)

※赤い着物の上に黒い仕掛(打掛)を肩からずらして羽折り、前帯を垂らし首を傾けて立っている花魁。少し開いた裾からは赤い襦袢と足袋の先が見える。



●校合摺「**扇に桜図**」(文化6年～10年〈1809～13〉)。墨絵。葛飾北斎筆。20.5×25.8 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※半開きの扇と全開の扇が重なっている上に、桜の小枝が乗せられている。扇の左にも桜の花びらが散らされている。

●肉筆画「**源氏物語 早蕨図**」(文化11年～文政4年〈1814～21〉) 絹本着色一幅。もと掛幅。北斎戴斗筆。印ふもとのさと。102.6×40.5 フリーア美術館蔵)

※御簾を上げた部屋から桜が見え、杉の板戸のある板の間では二人の女が座っている。側に几帳が垂れ下がっている。一人は手紙を手に持ち、二つの脚付き籠を前にして、首を傾けている女を見ている。二人とも笹色紅(下唇が緑色)の唇をしている。図の右下には画面を断ち切るように松景色が描かれる。『源氏物語』48帖宇治十帖(早蕨)からの画材。

桜咲く山荘で、中の君に送られた寺の阿闍梨からの手紙を読む女性と、一緒に贈られた蕨や土筆などを入れた籠を前にする女性。

907 源氏物語 早蕨図 (原画フリーア美術館：綴プロジェクト複製 すみだ北斎美術館)

●肉筆画「立美人図」(文化11年～文政4年〈1814～21〉)。絹本着色一幅。北斎改戴斗筆。印ふしのやま。108.0×40.5 個人蔵)



※登龍の描かれた打掛を着て、櫛を左耳の上に差した垂髪の花魁が龍のひねりに合わせるように身体をひねらせて立っている。裾からは花魁特有の三つ歯下駄が覗いている。

908 立美人図 (toricoroll より)

●肉筆画「時鳥図」(文化11年～文政4年〈1814～21〉)。葛飾北斎改戴斗筆。印ふしのやま。100.0×26.4)

※薄雲を背にして時鳥が一羽鳴きながら飛翔している。図の上半分に大田蜀山人の賛が記される。

●扇面画「亀と金魚図」(文化2年～7年〈1805～10〉)。扇面着色一面。北斎画。印なし)

※茶地に亀と金魚を描く。足元には笹の枝が横たわっている。

●扇面画「山水図扇面」(文化6年～11年〈1809～14〉)。紙本扇面着色一本。独流北斎画。印辰印政。17.8×47.5 個人蔵)

※小高い丘の上に東屋が立ち、巖頭の向こうには小島が描かれる。

●扇面画「筍」(文化11年～15年〈1814～18〉)。扇面着色一面。北斎戴斗。印辰印政。17.6×50.0 個人蔵)

※葉を付けた筍が交差するように描かれる。

909 筍 (個人蔵web:「愚意鑿」BINBOU コレクションIIより)



●団扇画「芥川」(文化5年～10年〈1808～13〉)。団扇絵一面着色。かつしか北斎画。

22.4×30.5 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※『伊勢物語』第六段「芥川」の場面を描く。ある男が高貴な女性を盗み出し、女を背負って芥川の川べりを逃げる途中、雷が鳴り、あばら家に逃げ込んだが、女は鬼に食べられるという筋書き。図は、烏帽子を被った裸足の男が女を背負って逃げる途中、女が草葉の夜露を指差して、あれは白玉かと尋ねる場面。芥川は高槻市を流れ淀川に注ぐ川。

●扇面画「烏賊に山椒図」(文化10年～文政2年〈1813～19〉)。紙本着色扇一面。北斎戴斗。印辰印政。23.0×48.2 すみだ北斎美術館蔵)

※透明感のある薄鼠色の紋甲烏賊と白色の鯛烏賊が並んで描かれる。紋甲烏賊の側に緑



色^{さし}の山椒^{さんしょう}の葉が添えられる。浅草庵市人^{あさくさあんいちひと}の賛「幽齋^{ゆうさい}もしらぬ伝授^{でんじゆ}の三鳥^{みつとり}は 鶯^{うい}とからすと甲^{こう}の白鷺^{しらさぎ}」。

●扇面画「生首図」^{なまくびず}（文化 7 年～11 年〈1810～14〉）。紙本扇面着色一面。北齋戴斗席上略筆。23.3×48.5 島根県立美術館：永田コレクション蔵

※扇の中央に上下逆様に描かれる。歯を食いしばり、唇を少し開け上目づかいに目を開いた男の首。月代部分は剃らないまま小さな髷^{まげ}を結っている。

「生首図」は、天保 13 年(1842)、嘉永元年(1848)にも描いている。910 生首図(島根県立美術館)



【「北齋筆」の落款は二代目北齋か】

●扇面画「水恋鳥図扇面」^{みづこいどりずせんめん}（文化年間〈1804～18〉年間。紙本着色一面。額装。葛飾北さみ。印^{いん}葛飾。20.8×44.2 北齋館蔵）

※水恋鳥は、赤翡翠^{あかしやうびん}（カワセミ）の異名。赤いくちばしを上に向けて笹の茂みの上を羽ばたく翡翠。背中は藍色、羽根は墨色で描かれる。印が「葛飾」という二代目北齋のものであるので、同人の作とする説もある（日本浮世絵博物館所蔵『北齋』p14 読売新聞社）。



911 水恋鳥図扇面（北齋館）

また、本図とは別だが、二代目北齋は落款に「筆」と記しているのが特徴で、北齋自らが「北齋」とした場合は「画」が続くとしている。二代目北齋は亀屋喜三郎と考えられる。弘化3年（1846）条の「犬北齋」の項参照。

●扇面画「風景図」^{ふうけいず}（文化 11 年～文政 2 年〈1814～19〉）。扇面着色一面。戴斗筆。印^{いん}辰政。23.0×50.0 島根県立美術館：永田コレクション蔵

※小高い山のある島の間を棹さす小舟が一艘、全体に墨絵風に淡彩で描かれる。

●肉筆画「年始まわりの遊女図」^{ねんしまわりのうでよめず}（文化 12 年～文政 2 年〈1815～19〉）。絹本着色一幅。前北齋戴斗筆。印^{いん}ふしのやま。110.4×41.8 フリーア美術館蔵

912 年始回りの遊女図（高精細複製画：すみだ北齋美術館〈原画：フリーア美術館〉）

※横兵庫髷^{よこひょうごまげ}に多くの簪^{かんざし}と笄^{こうがい}を挿した高位の花魁^{おいらん}が八文字^{はちもんじ}で歩く図。黒地に松葉文様で茶の線を強調した注連縄^{しめなわ}の刺繍をあしらった打掛^{うちかけ}を背抜きで羽織り、数枚重ねた白地で市松模様の掛下の裾^{すそ}を右手で持ちあげ、三つ歯^{くろげた}の黒下駄^{くろげた}を履いた裸足の右足を突きあげた姿。花魁の唇は、笹色紅^{ささいろべに}と呼ばれる、下唇が緑色である。紅花^{べにばな}からの紅を何度も塗



ると玉虫色に発色し緑色となる。襟など着物の輪郭のチリチリはこの頃の北斎の特徴。

●点印譜「於之波奈嘉々美」（文化10年～文政2年〈1810～19〉）。大本4帖。墨印。北斎筆・北斎改戴斗。27.4×20.5 島根県立美術館：永田コレクション蔵

※「点印譜」は、俳諧で、点者批評により得点を競ったが、その点者の印が捺されたものを集めて貼り込んだもの。本譜は5帖の仕立てとなっていて、北斎の印も10数点収められているという（『新北斎展図録』p327～328）。

円印に、弓矢姿の武人が馬に乗って、竹垣の陣屋を見ている印（北斎改戴斗）や、千鳥が飛ぶ下で、筏に竿さしている男の印（北斎筆）、岩山の麓を流れる川の印（北斎筆）などがある。

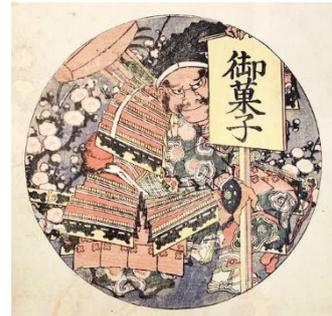
●柱絵「富士見西行図」（文化11年～15年〈1814～18〉）。北斎画。63.0×11.4 江見屋吉右衛門版。島根県立美術館：永田コレクション蔵

※天明4～5年（1874～75）に同題「富士見西行図（柱絵。北斎画）」がある。構図はほとんど同じだが本図は西行の向きが反転している。墨染めの衣を着て、笠を手に持ち、杖を突き、肩に風呂敷に包んだ物を巻き付けて立っている。図の上部に雲を抱いた富士山が描かれるが、西行は左を向いて見ていない。「富士見西行」は、日本画の画題の一つ。

●菓子袋「弁慶図」（文化5年～10年〈1808～13〉）。色摺。無款。20.3×20.9 島根県立美術館：永田コレクション蔵

※菓子袋の絵。円枠の中に鎧姿の弁慶が「御菓子」と書いた高札を支え立てている。北斎の描いた菓子袋は、他に「江戸八景」（天保初期。赤松屋庄太郎版）などの2種が知られているという（『新北斎展図録』p323）。

913 弁慶図（島根県立美術館）



●組上げ絵「しんはん石橋山合戦組上ケとうろうゑ」（文化4年～12年〈1807～15〉）。大判錦絵玩具絵2枚揃。無款。島根県立美術館：永田コレクション/国立国会図書館美術館/太田記念美術館：長瀬コレクション蔵

※「組上げ絵」は、関西では「立版古」と呼ばれることが多い。切り取り、組み上げて楽しむ玩具絵。本図は、石橋山の合戦の様子を組み立てる玩具絵。

☆〈上の巻〉（25.4×37.9）陣容の組上げ絵

☆〈下の巻〉（25.3×37.9）石橋山の地形の組上げ絵。

●組上げ絵「しん板くみあけとふろふ ゆやしんミセのづ」（文化4年～12年〈1807～15〉）。「新板組上燈籠湯屋新店図」。大判錦絵。5枚組。北斎画。丸屋文右衛門版。各38.0×25.7 太田記念美術館：長瀬コレクション/ボストン美術館/島根県立美術館：永田コレクション蔵

※各部分を切り取り、糊しろに糊をつけ、指示通りに組みあげると、二階建ての立体的な風呂屋の作品になるというもの。

●組上げ絵〈しんはんくみあけとうふろふゑ 天の岩戸神かぐらの図 上〉（文化4年～12年〈1807～15〉）北斎画。丸屋文右衛門版。26.5×38.3 ボストン美術館蔵

※天の岩戸伝説を題材にしたもの。

●組上げ絵「王子いなりこりとりばの図」(文化4年～12年〈1807～15〉)。無款。25.2×37.8 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

●組上げ絵「新吉原仮宅繁盛の図」(文化4年～12年〈1807～15〉)。無款。25.5×37.4 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

●組上げ絵「江戸中しん板はやり升屋みよ」(文化11年～15年〈1814～18〉)。大判着色。北斎老人画。丸屋文右衛門版。26.5×38.1 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵)
本図は、吉原の「升屋」の組上げである。

●校合摺「茶汲み美人」(文化12年～文政2年〈1815～19〉)。校合摺注。紙本。前北斎戴斗筆。26.1×31.0 アムステルダム国立美術館蔵)

注)「校合摺」は、色板作成のために、主板で摺った輪郭の黒線だけの摺物をいう。絵師はその一枚一枚に一色ずつの色名を文字で書き、凸版として残す部分に代赭墨を塗る。この色ざし様の校合摺が彫り師に渡されて色板が作られる(国立民族博物館『絵師はいかにつくられたp79』)。

版画を制作するだけに必要な消耗品なので、校合摺が残るのは珍しいとされる。

※茶托に載せた湯呑みを持つ女。眉を剃りお歯黒にしているので人妻か。

●摺物「小松引き」(文化元年～2年〈1804～05〉)。紙本色摺。画狂人北斎画。19.2×51.3 島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵)

※小松引きは、平安時代、正月初の子の日に、長寿を願い野に出て小松を引抜く遊びで、図では三人の官女が扇をかざし、下働きの二人の男が小松を引抜いている。その近くで男女の子どもが見ている。遠景には大きな日の出が描かれる。

●摺物「横九つ切り判銅板画風摺物シリーズ」(仮題。文化元年～7年〈1804～10〉)。色摺。横九つ切摺物3図。ほくさみうつつ(画面右上に横書き)。銅版画風。額枠内に描かれ。狂歌が添えられる)

☆〈金沢八景〉(日本浮世絵博物館/ボストン美術館蔵)

※海に架かる瀬戸橋と呼ばれた二つの連続した橋を渡る人々や、沖に浮かぶ帆船等を描く。橋は西洋のように石橋風に描く。

☆〈江の島遠望〉(「江の島風景」「江ノ島海岸」とも。藤沢市教育委員会/ボストン美術館蔵)

※七里が浜から江の島を望む風景。島に渡る人々が小さく描かれ、その脇には波のうねりが描かれる。

☆〈かまくら之里〉(すみだ北斎美術館/ボストン美術館蔵)

※入江になっている由比が浜から西を望む風景。海辺の道を行く人々。空には雁の群れ。水平線には帆船の帆が多く見え、遠くに雪景色の富士山が描かれる。

●摺物『三夕』(文化元年～5年〈1804～08〉)。横小判色摺。北斎画 各平均 13.2×18.1)

☆〈三夕の内 まきたつ山〉(北斎館/東京国立博物館/ヴィクトリア・アルバート博物館蔵)

※寂蓮法師「さびしさはその色としもなかりけり
真木立つ山の秋の夕暮れ」を踏まえる。川辺の入り江
に渡した小さな板橋の前に立ってどこかを見ている振
袖の娘。傍らには、若年増らしき女が片膝を立てて座
り、その横には供の男も風呂敷の荷物を抱えて座っ
ている。背後には二本の松の幹が描かれる。



914 三 夕の内まきたたつ山 (北斎館)

☆〈三夕の内 うらの苦屋〉 (北斎館蔵)

※藤原定家「見わたせば花も紅葉もなかりけり 浦の苦屋の秋の夕暮れ」を踏まえる。水
辺に立つ二人の女。供の男が河岸で風呂敷の荷物を整えている。背景に三軒の苦屋が描か
れる。二人の女が松の木側に立ち、真木の繁る遠くの小山を眺めている。女の後ろには
腰を下ろしている供の男がいる。

☆〈三夕の内 しき立さわ〉 (北斎館蔵)

915 三夕の内 しき立さわ (北斎館)

※西行法師「心なき身にもあはれは知られけり 嶋立
つ沢の秋の夕暮れ」を踏まえる。水辺に立つ二人の女。
一人は傘を閉じて持っている。供の小僧が両手を挙げ、
脅された鳴が飛び立っていく。



●摺物「猿」 (文化元年～2年〈1804～05〉)。正月。色摺。画狂老人北斎画。19.5×27.4
すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵)

※米俵の上で三番叟の烏帽子を被り、御幣を持った猿が扇をかざしている図。側に梅花が
ある。賛は「我年をかけハ米なり玉の春 右山川寿来翁」とある。句の作者名から米寿の
祝いの摺物か。

●摺物「出世弁財天詣」 (文化元年～5年〈1804～08〉)。紙本色摺。画狂人北斎画。19.9
×54.5 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※海辺の丘の上に、参詣に来た二人の女と供使いの小僧。小僧は笹の枝に魚などをくくり
つけて担いでいる。丘の下の鳥居の下には、供え物を乗せた三方を持つ娘と母親らしい女
がいる。その先には狛犬と弁財天の社殿が描かれる。海辺には屋根船が浮かんでいる。

●摺物「貴人と美人」 (文化元年～5年〈1804～08〉)。紙本色摺。画狂人北斎酔中画。
12.8×18.4 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵)

※落款に「酔中画」とある。

※二人の美人がしなやかに寄り添う間で、折烏帽子の高貴な老人が笑っている図。梅風舎
喜久丸の賛は「すみれさく野にうちむれてこのころは 松や引なん若草摘なん」とある。
山辺赤人の「春の野にすみれ摘みにと来し吾そ 野をなつかしみひとり寝にけむ」の歌が
思い浮かび、老人は、あるいは赤人とも考えられるという見方もある (『ピーターモース・コレクシ
ョン北斎図録』より)。

●摺物「王子料亭前」(文化元年～5年〈1804～08〉)。紙本色摺。北斎画。19.0×50.5
太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)



※料亭の前には「御神燈」と刻まれた石燈籠と、奉納王子(稲荷)と書かれた屋根付きの大きな立看板があり、その前にいる三人の女。その後ろには、荷物を担ぐ二人の小奴。図の左には、梅の木の後ろの柵の中に、水が流れる仕掛けが描かれる。王子には「海老屋」など有名な料理屋があった。

●摺物「箱入カルタの図」(文化元年～5年〈1804～08〉)。紙本色摺。九々屋北斎画。19.0×51.5 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※包布の上に置かれた箱から引き出された百人一首と思われるカルタが描かれる。図の左には竹里館直根などの狂歌が並ぶ。浅草庵連によるもの。

●摺物「盆踊り図」(文化元年～2年〈1804～05〉)。倍柱絵(超縦長)判二枚続。色摺。119.2×14.0 画狂老人北斎画。しなのや版。太田記念美術館：長瀬コレクション/東京国立博物館(絵のみ) すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション/島根県立美術館：永田コレクション蔵)

916 盆踊り図(すみだ北斎美術館)

※浅草庵市人の浅草側による狂歌摺物。上半分に狂歌を書き入れ、下半分に七人が踊る図。上から、傘をさす老人、向こうむきの侍、笠を被って背を見せる男、格子模様の着物の男、扇子をかざす男、手拭を被る女、顔を隠して踊る女が描かれる。

●摺物「檜破子ノ図」(文化元年～5年〈1804～08〉)。橘樹園ノ図葛飾北斎写。19.1×17.1 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※檜破子は、檜の薄板で作った曲物(食物を入れる仕切りのある器)。図は、房のついた簾の前に、梅の小枝を乗せた三方と丸と角の蓋付破子が二つ置かれている。橘樹園(山田早苗)の狂歌が添えられる。

●摺物「屏風一双之内」(文化元年～5年〈1804～08〉)。色摺。画狂人北斎画。六曲一双屏風)

☆〈竹内〉(16.9×7.5 すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション蔵)

※図は武内宿禰が新羅遠征の際、幼い応神天皇を守った故事に取材。幼帝を抱く宿禰は穏やかな顔に描かれる。側に立て膝で座って乳房を突き出し、宿禰の着物の紐を握っている女がいる。狂歌「命なかき竹の内にてさゝなきを たれもすくねや春の鶯 桜枝鞠」が添えられる。

☆〈大輔〉(19.8×9.1 すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション蔵)

※大輔は、源平合戦の際、源頼朝について三浦義明のこと。106歳の長寿を保ったといわれる。図は、海老やウラジロの正月飾りが乗せられた鏡餅の置かれた側で、烏帽子を被った長寿の大輔が、美女が持つ巻物を座って読んでいる。狂歌「門に注連ひきわたしつる弓とりのたけき心の松におひそふ 山辺道高」、「霞ひく三浦の海を見わたせば なかつきをする船の帆柱 真知亭十々也」、「もゝあまり六日の年を越ぬうち 寿命の延る千金の春 望月水面」が添えられる。

※長寿に関する人物の6図と中国周時代の六芸（礼・楽・射・御・書・数の教養）を題材にした6図の六曲一双の屏風とされる。他に〈西王母〉〈慈童〉〈東方朔〉〈楽〉〈射〉〈御〉〈書〉〈数〉があるという（『ピクチャーモース・コレクション北斎図録』p123による）。

●摺物「菊をめでのる官女」（文化元年～5年〈1804～08〉）。横長判色摺。画狂人北斎画。20.8×56.1 ヴィクトリア・アルバート美術館蔵

※庭先の菊を観る四人の女と家の中の三人。御簾の陰に二人の女の図。

●摺物「婦人と小姓図」（文化元年～10年〈1804～13〉）。横判色摺。かつしか北斎画

※揚帽子（角隠し）を被った二人の夫人が大きな釣鐘が置かれた寺の門前を歩く。婦人の後ろには小姓が般若の絵柄の凧を持ち、風呂敷包みを背負っている。釣鐘にはウラジロが付けられた注連縄が掛けられている。

●摺物「梅樹に鶴」（文化年間〈1804～18〉）。正月。紙本色摺。葛飾北斎画。38.4×52.4 すみだ北斎美術館蔵

※上下反転の図。上半分に、初日の出を背に鶴が飛び、梅樹が右から左に伸びている。常盤津門社中、岸澤門社中の催し案内。「千鶴万歳 叶」などの書き込みがある。

●摺物「井戸端の美人」（文化年間〈1804～18〉）。紙本色摺。北斎画。13.6×18.2 すみだ北斎美術館蔵

917 井戸端の美人（すみだ北斎美術館蔵）

※井戸から若水を汲む女が、手をかざして初日を見ている。側の汲み桶にはウラジロがかかっている。近くで梅が咲いている。



●摺物「見立業平東下り」（文化年間〈1804～18〉）。無款。横大奉書全紙判色摺。43.2×57.4 ボストン美術館蔵

※左奥に富士山。馬に乗る在原業平。供の者四人。右に松の木のある図。周囲を木目で刷り、鏡面は銀摺にしている。業平東下りは多くの絵師の題材になっている。

●摺物「鏡美人図」（文化6年～10年〈1809～13〉）

※鏡に映った美人の顔を大首絵のように描く。木製の折りたたみの鏡を開くと女性の顔が映っている趣向で、縦長判の下半分に顔を描き。上半分に狂歌を書いている。揃物だが全何図かは不明。

☆〈島根県立美術館：永田コレクション蔵の二図〉（色摺。無款。各20.3×7.0）

※二枚揃の左図は、櫛と簪を刺した髪^{かみ}の女が口に手拭いの端^{くわ}を銜^{くは}えている。口紅を塗っていない。額からほつれ毛^{ほつれけ}が一本垂れている。野中清水他の狂歌が記される。

右図は、角隠し^{かくがし}を被った灯籠髷^{とうろうまげ}でお歯黒^{おはぐろ}の女。周囲^{まわり}を木目^{もくめ}で刷り、鏡面^{きょうめん}は銀摺^{ぎんずり}にしている。

918 鏡美人図（島根県立美術館：永田コレクション）

☆〈すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション蔵の一図〉（色摺。無款。20.3×6.8）

※房のある髪留め^{かみどめ}をつけた角隠し^{かくがし}を被って外出する婦人の大首絵^{おほくびえ}があり、鏡の裏蓋^{うらがせ}（図の上部）に「さ



ほ姫の遊び道具^{あそびどうぐ}の紅筆^{べに}にふくむや宿^{しゆく}のむめのうす紅白寿人^{しゆくはくじゆうじん}」「風の手^{かぜのて}をたゞけハ近く座敷^{ざしき}までかよひし宿のむめか香^か 三味盛安^{さんまいせいあん}」の狂歌が記されている（すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション）。



919 鏡美人図（部分：すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション）

●摺物「おかめと桜図」（文化元年～5年〈1804～08〉。色摺。北斎画）

※桜咲くところで、盃の絵柄のある赤い幔幕^{まんとく}の内側で、薄絹^{うすきぬ}を頭から被り、右手をかざして楽しそうに踊るおかめの上半身を描く。

●摺物「日本堤を見る花魁」（文化元年～5年〈1804～08〉。色摺。北斎画。13.5×18.4すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション蔵）

※花魁^{おいらん}が日本堤^{にほんつみ}（吉原の土手^{どて}）を往来する人々を二階の籬窓^{まがき}から眺^{せんしゅうあん}めている図。千秋庵の狂歌に「春霞^{はるがすみ}たつ木^{たつき}もしらぬ籬^{まがき}よりむかふの人^{ひと}を呼子鳥^{よごどり}かな」とあるので、客を呼んでいる様子か。土手には小さく三人の男が描かれる。「呼子鳥」は、人を呼ぶように鳴く鳥で、一般にかっこうと言われるが、他にも説がある。他の狂歌に「長閑なる春もくるわのことはや おいてなんしにひらく梅^{うめ}か香^か 橘床世^{たちばなとこよ}」、「自出^{みで}たしや夢^{ゆめ}に見てさへよしはらのくつわにとむる春の駒下駄^{こまげ} 鈍亭和樽^{どんじやわづ}」がある。

●摺物「手紙を読む遊女」（「手紙を持つ遊女」とも。文化6年～10年〈1809～13〉。色摺。かつしか北斎画 17.0×12.7すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション蔵）

※立て膝の遊女^{あそびぢよ}が手紙^{てがみ}を持ち、極端^{ごくたん}に首^{くび}を前に曲げ、物思いに耽^{たふ}っている図。「仲の町^{なかつまち}はるの大夫^{おおとうら}の出立^{しゅつたつ}を誰も見^みにきよ花^{はな}の吉原^{よしわら} 蛙吹亭元住^{かむいぢやうげんぢゆう}」の狂歌が記される。

920 手紙を読む遊女（すみだ北斎美術館）

●摺物「人形図」（文化6年～10年〈1809～13〉。横長判色



摺。ホクサイ。19.8×51.0 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※「大傀来面●」と書かれた紙を貼った蓋を開けた箱の中で鼓を叩く女の子。箱の前では紙で作った四角い被り物を頭にして、馬になった男の子の背中に乗る男の子。箱の側面に「ホクサイ」と署名されている珍しい図。

●摺物「元結作りの母子」(文化元年～7年〈1804～10〉)。大奉書全紙判色摺。北斎画。36.2×48.9 エドアルド・キオツツオーネ記念ジェノヴァ東洋美術館蔵)

※立っている芸者の傍で腰をかがめて元結作りの用意をする母親と、その腰にすぎる子どももの図。下半分には三番叟を開催した出し物のプログラムの逆さで記される。

※寛政8年(1796)の「元結い造り」や、寛政11年(1799)春の「元結匠」(狂歌本『東遊』所収)など同画趣がある。

●摺物「花魁と禿」(文化6年～10年〈1809～13〉)。中判色摺。葛飾北斎画。19.1×26.2 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/島根県立美術館蔵)

921 花魁と禿 (部分：すみだ北斎美術館)

※大首絵風の花魁と禿の図。横兵庫の髷の花魁の髪飾りは銀摺に、帯は金摺で描く。その脇に華やかな髪飾りをした禿が花魁に寄り添う。「玉の春玉の柳のまゆにして玉につらなる傾城の礼一粒亭万盃」、「鉢植の梅とかむろのはこの子と



ともに数つく花のよしはら 二橋亭高紀」、「初ミせのはつすかきやい音にて ゐねの間のよろつよし原 浅流庵清志」、「なひくなり行きかふ風のふたかへり ミかへり柳ふりのよし原 野中清水」の狂歌が書かれる。

●摺物「鞠に梅花」(文化6年～10年〈1809～13〉)。色摺。葛飾北斎画。12.9×17.7 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵)

※文化6年に摺物「鞠と玩具」があるので、あるいは文化6年(1809)作か。鞠の周囲に梅花が描かれる。「去年の日にまろめし雪もまりほどに いつしかけぬる春のあたゝか大屋跡次」、「鞠よりも花の匂ひのけたかさに 爰にも梅のありとこそしれ 雪の屋鳥兼」の狂歌が記される。

●摺物「神三番之内」(文化3年〈1806〉以降)。かつしか北斎画。色摺。14.1×19.2 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵)

※下記「儒三番之内」を含めた「神儒仏」の三枚揃物の一図と思われる。梅の花咲く寺社の入り口の柵内に鎮座する武門の男の像。烏帽子を被り、檠の矢を扇状に広げて背負っている。その前には手水の盥と柄杓が置かれている。千秋連小男黒面の狂歌に「春くれは武士もみなさきかちに 忍ほうくと参る神垣」とある。

●摺物「儒三番之内」(文化3年〈1806〉以降)。かつしか北斎画。色摺。13.7×18.7 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵)

※寺社の屋根の鯢鉾を横切るように鳳の姿をした凧が上がっている。湯島の聖堂の屋根

といわれる。「所^{ところ}から仰^{あお}げは高^{たか}し聖^{せい}堂^{どう}の 楚^そ々に遊^{あそ}べる鳳^{ほう}凰^{おう}の 風^{かぜ} 千秋^{せんしゅう}連^{れん}瓢^{ひょう}振^{しん}人^{にん}」の狂歌が記される。

●摺物「菊慈童^{きくじどう}」（文化元年～5年〈1804～08〉）。横長判（半切）色摺。北斎画。18.7×51.4 すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション/千葉市美術館/エルヴィエム美術館蔵

※菊慈童^{きくじどう}は、靈効^{れいこう}のある菊^{きく}の下露^{したつゆ}を飲^のんで不老不死^{ふしじふ}を得たという中国の仙人。元は書き込みがあった大奉書全紙判。完全版は米国ウイスコンシン州のウイスコンシン大学エルヴィエム美術館にあるという。

裾^{すそ}の長い打掛^{うちかけ}を羽織^{はねおり}った菊慈童^{きくじどう}が、菊が多く咲いている岸^{きし}にしゃがんでいる図。文化2年（1805）にも同題の絵がある（九々屋北斎画）。



922 菊児童（すみだ北斎美術館）

●摺物「花魁道中^{おいらんどうちゆう}」（文化年間〈1804～18〉）。北斎画。色摺。14.3×28.4 フランス国立図書館蔵

※図右に花魁道中^{おいらんどうちゆう}の図。門松飾りの間を二人の花魁と羽子板を持つ禿^{かぶろ}が歩く。後ろに長柄の大傘を持つ男。正月二日、吉原仲之町の茶屋ごとに年礼にまわる行事を描く。

「春くれと客人とともに鶯の をいてなんしに梅のひらきぬ 五息齋壁塗」、「此^{この}里^{さと}の宝舟^{たからふね}とハ新艘^{しんそう}の つくりたてたる春の売初^{うりはつ} 住蝶菴百鼻人^{ぢゅうていあんひゃくばなにん}」、「ひとかへりまたふたかへりミかへりの 柳も土手のまねく春風^{はるかぜ} 紀長面^{きながつら}」の狂歌が記される。



923 花魁道中（フランス国立美術館）

●摺物「梅鉢に盃^{うめばち}」（文化元年～5年〈1804～10〉）。元旦。画狂老人卍筆。色紙判色摺。19.5×19.2 千葉市美術館蔵

※山水風の絵付けのある鉢^{ばち}に盆栽の梅が咲き、傍に寿の字のある朱塗りの盃^{さかづき}が置かれている。

●摺物「美人投網^{びじんとうあみ}」（「日の出^{ひのあ}」とも。文化3年～8年〈1806～11〉）。紙本色摺。半切。かつしか北斎画。19.0×52.2 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵

924 美人投網（部分：太田記念美術館）

※舟中に立って腰蓑^{こしみの}をつけた女が網を引き揚げている。網には魚が捕えられている。もう一人の女が魚を柄のついた攜網^{たもあみ}に受け取ろうとして海面に



差し出している。船頭は艀を操り舟を安定させている。遙か沖の陸地から大きな朝日が半分顔を覗かせている。

●摺物「滝に薪を投げる仕丁と貴人」（文化6年～10年〈1809～13〉。紙本色摺。かつしか北斎画。24.2×38.4 すみだ北斎美術館蔵）

※図左に、男が薪を抱え、滝に投げ入れようとしている様子が描かれる。その前には投げ入れられた薪の束がある。図右には、貴人が扇をかざして見ている様子が描かれる。貴人の側で二人の男が控えて座っている。

●摺物「住吉祭」（文化年間〈1804～18〉。色紙判色摺。前北斎戴斗筆。20.9×18.6 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※住吉祭の衣裳を着た男と甲冑を身に着けた男を描く。空満屋栲垣真枝の賛「住吉の日、つるめそといふ者のいみじうをかしけなるさまして、さるかうことゝも舞戯れけるを見侍りて、おもしろう興ある事におもうたまへしか、同じ心の友たちにかゝる物ありとたにしらせ参らせまほしう、一ひらの絵にうつしてたてまつるなり」とある。

●摺物「狂歌扁額」（文化年間〈1804～18〉。横判。色摺。葛飾北斎画。13.4×27.9 ベレス・コレクション蔵）

※奉納直前の額の図。枠に取りつける金具と木槌が描かれる。

●摺物「貝合わせ」（文化年間〈1804～18〉。紙本色摺。13.4×18.3 すみだ北斎美術館蔵）

※貝枠の内側に官女と貴人が部屋の中と外にいる図を極彩色で描く。

●摺物「日本橋霞」（文化年間〈1804～18〉。色摺。向岳北斎画。13.8×18.6 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※日本橋の擬宝珠のある欄干から身を突き出して川面を見る小奴。その側で立ち話をしてい御高祖頭巾の女と松の盆栽を持つ女。遠くに江戸城が見える。「初日影さす大小の日本橋 霞の糸のひしとかゝれり 太平楽住」、「魚市のこちかいなたか引初る 霞の網に風の手こたひ 蘭奢亭香保る」の狂歌が記される。

●摺物「高輪休茶屋」（文化年間〈1804～18〉。色摺。向岳北斎画。13.5×18.3 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※上記「日本橋霞」同様、江戸名所の歳旦揃物と思われる。落款の「向岳北斎」は、この二点にしか見当たらないという（『ピーターモース・コレクション北斎図録』による）。「ユウガク」と読むか不明。

925 高輪休茶屋（すみだ北斎美術館）



図は、休み茶屋でくつろぐ揚帽子（角隠し）で前帯の婦人と、煙草盆を差し出す茶屋の女。側で小奴が風呂敷の荷物の紐を頭に掛け、担いで笑っている。背景に、富士の見える海に浮かぶ数隻の帆かけ船。「みてはなを雪のほうしにふしひたひ 夢よりうれし春の曙 長閑春道」の狂歌が記される。

●摺物「屋形船羽根田丸」（文化年間〈1804～18〉）。色摺。画狂人北斎画。38.8×53.5 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵

※中村座・市村座・河原崎座の囃方の合同公演の番組案内。隅田川に屋形船の羽根田丸が、大勢を乗せて、鳴り物を鳴らしながら航行している図。船の屋根で二人の船頭が竿をさしている。船名を「富本丸」に替えた別刷りもある。

●摺物「見立女三宮」（文化年間〈1804～18〉）。絵暦か。色摺。北斎画。12.8×7.9 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵

※『源氏物語』女三宮に取材。三宮は光源氏の二番目の正妻。頭の中將柏木と密通し薫の君を生む女性。

図は御簾の陰に立ち、高蘭の手すりに寄りかかる猿を見ている女三宮。猫を女三宮に渡す夢を見た柏木が、猫のおかげで姿を見られたことを女三宮に話す場面があり、女三宮が猫をひきつける姿は浮世絵の人気画題であった。本図は猫の代わりに猿にしたのか。

●摺物「行楽帰り」（文化年間〈1804～18〉）。半切色摺。北斎画。18.8×51.3 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵

※釣りに出かけた二人の婦人と子どもたちの帰り道の風景。一人は煙管を銜えて左手に煙草入れを持っている。もう一人も煙管を手をしている。二人の前には釣り竿と魚籠を持った芥子坊主頭の子どもが二人いる。夫人の後には荷物を天秤にかけた小奴もいる。遠景に額に「弁才天」と書かれた神社の鳥居と桜が描かれる。深川の洲崎弁天と思われる。「同図で砂張市蔵を主催者とした全紙判や、風呂敷の柄が桜草である富元節の案内として作られたものがあり、本作品はそれらの後摺作品とされる」との説明がある（『ピーターモース・コレクション北斎図録』解説より）。

●摺物「行楽図」（文化年間〈1804～18〉）。全紙判色摺。かつしか北斎画。38.9×52.2 すみだ北斎美術館蔵

※杵屋岩治による長唄番組を図の下半分に逆さに書く。図は、行楽に出かけた女性たちが歩いている姿を描く。

●摺物「文台」（文化年間〈1804～18〉）。色摺。葛飾北斎画。12.5×17.0 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵

※螺鈿の文台に、硯と筆置きに置かれた細筆、文鎮、筆立てに差した数本の筆、孔雀の羽根を差した細瓶などが置かれている。「鶯のはつ音聞つゝ年始状 筆はしめせむ青軸の梅 菱花堂」の狂歌が記される。

●摺物「七福神 大黒の傀儡師」（文化年間〈1804～18〉）。色紙判色摺。葛飾北斎画。21.6×19.3。フランス国立図書館蔵

※大黒天の首から下げた宝船に他の五福神が乗っている図。あちこち巡回して首に下げた箱の人形を唄いながら操る傀儡師を大黒天に置き換えて、人形を七福神にしている。毘沙門天だけが、雲に乗り宝船から飛び出している。



926 七福神 大黒の傀儡師 (フランス国立図書館)

「年浪の大晦日のからくりも たちまち春と傀儡師がなく 垣生菴侘住」、「とし浪の灘を越れハ西の宮 いつも春めく傀儡師かな 穂長堂物梁」、「山猫にかませぬ箱の白鼠 子の日の興に芸やさすらむ 四方歌垣真顔」の狂歌が記される。

●肉筆画「詠歌美人図」(紙本着色。文化7年～文政2年(1810～19) 北斎改戴斗筆 印葛しか 87.6×29.6 似鳥美術館蔵)

※文机を前に筆先を口に含ませ、何やらしたためようとしている遊女の姿を描く。面上部に貼り付けられた色紙形には、柿本人麻呂の作とされる和歌「ほのぼのと あかしのうらの朝きりに 嶋かくれゆく舟をしそおもふ」が記されている。 927詠歌美人図 (似鳥美術館)



●摺物「朝日連三網之内父子」(文化7年～文政2年(1810～19)か。戴斗筆。21.5×19.0 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※『長瀬コレクション葛飾北斎図録』所収「長瀬武郎コレクション寄贈総目録」による。

●扇面図「太夫の図」(文化11～文政3(1814～20)。扇面1面。北斎戴斗筆。花押)

文化15/文政元(1818/4/22～) 戊寅 59歳 北斎改葛飾戴斗、葛飾北斎、戴斗、東都北斎戴斗、鼻山人、葛飾前北斎戴斗、葛飾前北斎戴斗老人、葛飾戴斗、印ふしのやま、雷震、たい斗：こと(48歳)、(阿美与：30歳)、(孫：9歳)、阿栄(21歳)

- ◇5月イギリス船でゴールドンが浦賀に来航。貿易を求めるも幕府は拒否。
- ◇ヤン・クック・ブロムコフ長崎オランダ商館長、江戸参府(2月13日～6月19日)。
- ◇文政期より春画豆本が流行。
- ◇4月13日、伊能忠敬没(74)。
- ◇10月17日、二代目柄井川柳没(生年不詳)。
- ◇10月21日、司馬江漢没(72)。

◇歌川広重、一遊齋の号でデビュー。

◇曲亭馬琴、息子興継（宗伯）を滝沢家当主として、神田明神下（石坂下同朋町。現、千代田区外神田三丁目、秋葉原芳林公園付近）の家を買い、妻の百と三女鋏とともに住まわせる。

○大田南畝（蜀山人）、狂歌集『蜀山百首』。

○瀬川富三郎、『諸家人名 江戸方角分』（寛政・享和・文化期の江戸の文化人の住所別一覧表）。

【彼人ハちとむつかしき仁故、『北越雪譜』の挿絵ならず】

★『馬琴書翰集成』（文政元年五月十七日 鈴木牧之宛「雪中奇観」画工の事）より。

「古人玉山（注：故岡山玉山・京都の人）ハ、自然と板木の画に妙を得たる人也。さして学問ハなけれど、才子なるべし。著述の事ハいざしらず、此人世にありて絵をたのみ、野生著述いたし候はゞ、尤よろしかるべし。江戸ニては北齋の外、この画をかゝすべきものなし。乍去、彼人ハちとむつかしき仁故、久しく敬して遠ざけ、其後ハ何もたのみ不申、殊に画料なども格別の高料故、板元もよろこび申まじく候。しからバ、誰と巻人ニ定めず、「東海道名所図会」のごとく、唐画・浮世絵、そのムキクニて、より合画ニいたさせ可申哉。これも画師一人ならねバ、諸方のかげ谷、格別わづらハしく候へ共、山水などハ、江戸の浮世絵師の手際にゆく事にあらず。又、婦人その外市人の形は、うき世絵ニよらねば損也。両様をかねたるものは、北齋のミなれども、右の意味合あれバ、より合図ニ可致哉と存候事」（注・ルビは筆者による）。

※「雪中奇観」は『北越雪譜』（天保8年〈1837〉初編3巻、二編4巻 鈴木牧之。）のこと。挿絵の山水は浮世絵師の手際でなく、市中の婦人や人物は浮世絵師がよく、その両方に長けているのは北齋だが、画料も高く気難しいので、それぞれに長けた人との合作にしたらいと云うのである。しかし、結局北齋単独の挿絵も合図の挿絵も実現しなかった。

鈴木牧之（1770～1842）は越後魚沼塩沢宿の商家の生まれ。学問・書画・俳諧に優れる。「北越雪譜」の出版を知己の山東京伝に依頼したが、費用等の問題で京伝が辞退したので曲亭馬琴に依頼したが京伝との関係が悪く出版に至らず。京伝没後、京伝の弟山京山の監修により漸く出版に至った。

【2・3月頃、牧墨僊宅から伊勢・紀州・大坂・京都へ行き江戸に帰る】

★「一説に、北齋尾州名古屋より伊勢に行き、紀州に入り、夫より大坂京都を歴遊し、江戸に帰りしといふ。按ずるに、北齋が尾州に到りしは、文化十四年の春にして、夫より一年程滞留せしなれば、其紀州に赴きしは、明年二三月の頃なるべし」（『葛飾北齋伝』p130～131）

●絵馬図「劉備檀溪渡河図」（文政元年〈1818〉。無款。桐板着色。61.0×98.0 常楽寺美術館蔵：上田市指定文化財。）

※昭和45年（1970）12月、小布施の宮沢四郎氏が発見。翌年『騷友』という雑誌に発表

された。図の左上に「文政元年 戊寅十月」とあり、右下に「上田原町赤羽氏」とあると瀬木慎一『画狂人北斎』（p106）で紹介している。

上田市の説明では「文政元年（1818）、上田原町の赤羽氏が常楽寺北向観音堂に奉納したことがわかる」としているが、「北斎の画であるか精査が必要」ともしている。

北斎が小布施に行ったのは、天保13年（1842）と考えられるので、北斎の画であれば、何らかの関係で依頼されて江戸から送ったものが奉納されたのだろうか。あるいは、この年の京都から江戸へは中山道を使い、途中上田に立ち寄ったか。常楽寺は長野県上田市別所温泉2347。



図は、劉備が愛馬で檀溪の激流を渡り、難を逃れる姿を描いている（『三国志』）。

928 劉備檀溪渡河図（常楽寺：『北斎 東西の架け橋展図録』より転載）

●絵手本『伝神開手 北斎漫画 八編』（1月。半紙本一冊。22.8×15.8 島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館/ホノルル美術館/山口県立萩美術館：浦上記念館/フリーア美術館：ブルヴァー・コレクション蔵）

※奥付には「東都画工 北斎改葛飾戴斗。印ふしのやま。同 校合 門人：魚屋北溪、斗円楼北泉、尾陽名古屋校合門人：月光亭墨僊、東南西北雲。文化十四年丑孟春注 竹川藤兵衛（江戸日本橋四日市）、英屋平吉（江戸本石町十軒店）、永楽屋東四郎（名古屋本町七丁目）、角丸屋甚助（江戸麹町平川二丁目）と記されている。

※後摺奥付には「東都画工 葛飾北斎筆。印雷震。尾陽名古屋 校 北亭墨僊、東南西北雲。書林：英屋平吉（江戸本石町十軒店）、竹川藤兵衛（江戸日本橋四日市）、角丸屋甚助（江戸麹町平川）、永楽屋東四郎（名古屋本町七丁目）」とある。

注 丑孟春（文化14年）：袋には「戊寅（文政元年）」とあり、実際にはこの年の刊行である。



929 伝神開手 北斎漫画八編（山口県立萩美術館）

【翁は葛飾一族の画祖なり】

☆序文「戴斗翁、幼きより画癖あり。唯食、唯画而已。遂にもて葛飾一風を興し、画名世に高し。於茲、其門に入り、伎を学ぶ者多し。翁これに教て曰、画に師なし、唯真を写事をせば、自ら得べし。門人これを愁ふ。或人翁か言を聞て翁を諫て曰。翁は葛飾一族の

画祖なり、翁が風を慕ふ徒は、これが風たらん事を欲す。然れば、何も他に師を索むべけん。離婁の明、公輸子の巧注も規矩を以てせざれば、方円を成事能はず。翁の門に遊ぶの徒、翁の臨本を得ざれば、葛飾風たるを不得。何ぞこれを察せらるやと。翁、この言を爾りとし、山水、人物、鳥獸、草木、堂宇、器財に至るまで閑ある毎に写し出し、上木し、以て門人に授く。漸々として八編に逮、これか序辞を予に議る。予、画を知らざれば、画を論ずること能はず。こゝにおみて此編の成る所以を記し、以て序辞に換こと爾り。縫（之繞がない）山題」（『北斎漫画』3「奇想天外」2011年 青幻舎 による。ルビは筆者による）

注) 離婁の明、公輸子の巧：離婁は離朱のこと。中国黄帝時代の伝説上の人物。視力にすぐれ、百歩離れた所からでも毛の先まで見ることができたと言われる。公輸子は名巧といわれた。『孟子』（巻第七離婁章句上 六十二節）に、離婁の目の良さでも公輸子の巧みさでも、定規やコンパスがなければ正しく四角や円を描くことが出来ないとの孟子の言葉があり、これを踏まえた記述である。

☆表紙：「八編 北斎漫画」と書かれた背景に、蝶と木の葉が風に舞っている趣の図。

●絵手本『伝神開手北斎画鏡』初篇（春。大本注墨絵一冊。全29丁。内題は『伝心画鏡』とある。戴斗。名古屋・菱屋久兵衛、京都・菱屋治兵衛、大坂・河内屋太助、江戸・角丸屋甚助、名古屋・永楽屋東四郎の合梓版。25.5×17.0 島根県立美術館：永田コレクション/日本浮世絵博物館/大英博物館/フリーア美術館：プルヴェアー・コレクション蔵）

※和漢の故事古典や動植物、風俗などを集める。1 ページ（半丁）を分割して多くの絵を挿入している。後、『秀画一覽』（色摺判。一冊。文政2年：1819）、『北斎画鑑』（淡彩摺本。一冊。安政5年：1858 永楽屋東四郎版）として改題再摺される。

注) 大本：美濃判紙を二つ折りにした大きさ。約26.0×18.0。普通、絵手本は半紙本（半紙を二つ折りにした大きさ。約23.0×16.0）が多い。

☆〈猩々舞〉猩々が酒宴を開き、一人が棒柄杓と扇子を持って踊り、一人が撥で三弦を弾く。背中合わせで酔ってもたれ合う二人もいる。右端に「寿」の字のある大盆に瑞亀が描かれる。猩々舞

☆〈牛飼〉川を渡る牛と手綱をとって細い板橋を渡る牛飼いの図。

他に、〈唐子遊〉〈三福神〉〈布袋〉〈耕作〉〈伊勢参〉〈旅中の雨〉〈雪中〉〈其二〉〈風〉〈其二〉〈月下〉〈盲人の喧嘩〉〈琴碁書画〉〈婦人子愛〉〈子供戯〉〈村老評議〉〈野来〉〈猪の番屋〉〈仁田の四郎〉など。

●絵手本『萍水奇画』（2月。二冊。色摺。暮雨巷三世帯梅撰。袋に「東都北斎戴斗画」とある。人物を北斎が、山水を流光斎注が描く。後半は俳句集となっている。末尾には「文化十五年戊寅仲春刻成」とある。両口屋弥四郎・永楽屋東四郎版。大英博物館/東京国立博物館/名古屋市蓬左文庫蔵）。文政4年（1821）1月に『狂歌画譜 貌姑射山』に改題後摺、更に文政年間に『絵本両筆』（一冊本）と改題後摺される。

※享和3年（1803）に刊行された流光斎如圭注の役者絵本『劇場画史』の改版。その中の人物を削り、新たに北斎の絵を入れたもの。

注) 流光斎：流光斎如圭。生年不明～文化7年（1810）頃に死去。上方の浮世絵師。

●艶本『津満嘉佐根』（序題は「津間佳左寝」の表記。半紙本色摺。三冊。口絵の書入れは北斎。序文と本文は鼻山人で「看板に偽なし然も大キナ 鼻山人誌」とある。

娘・阿栄の代作もあるか（『芸術新潮』1989年3月号「北斎」所収、林美一「北斎 艶本への挑戦」）「鼻山人」は北斎の鼻が大きいことを自嘲した偽名か、実在した鼻山人の作か不明。
930 津満嘉佐根：口絵（ARC 古典籍ポータルデータベースより）



【初の大判鳥瞰図】

●錦絵鳥瞰図「総房海陸勝景奇覧」（この頃か。「総房一覽図」とも。横大奉書全紙判。

葛飾前北斎改戴斗画。印文不明。葛屋重三郎（耕書堂）・鶴屋金助（双鶴堂）・角丸屋甚助（衆星閣）の合梓。鳥瞰絵図。袋（19.6×14.0 神戸市立博物館蔵）には、北斎改葛飾戴斗先生筆とある。38.4×52.8 島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館/太田記念美術館：長瀬コレクション/船橋市立図書館/東洋文庫：岩崎文庫蔵）

※葛屋重三郎の画中左の枠内広告に「後編板東図 八ヶ国の名所古跡且神社仏閣温泉の地に至る目前にのそミ見るかごとく工夫せし絵図なり」とある。「総房」とあるが、日本橋、品川、藤沢、江ノ島、鎌倉など江戸から三浦半島が中心に据えてある（『原色浮世絵大事典』第8巻p77 大修館書店）。



931 総房海陸勝景奇覧（すみだ北斎美術館）

【北斎、蕙斎の一覽図を窃かに笑う】

※鋏形蕙斎（1764～1824 北尾政美）の俯瞰一枚絵「江戸一目図屏風」（袋は「江戸名所の絵」とある。文化6年〈1809〉刊）などを北斎も見たか。

「蕙斎嘗て京師の人、黄崑山脚注が「花落一覽図」に倣ひ、「江戸一覽図」を画き、世人を驚かす。これ江戸八百八町を一紙の中に縮めたるを賞するなり。北斎窃かにこれを笑ひ、武蔵、相模、伊豆、安房、上総、下総を一紙に縮図して「総房一覽図」と名づけ、刊行せり。世人又其の巧妙、蕙斎の上に出づるに驚く」（飯島虚心『葛飾北斎伝』p72 ルビは筆者）。

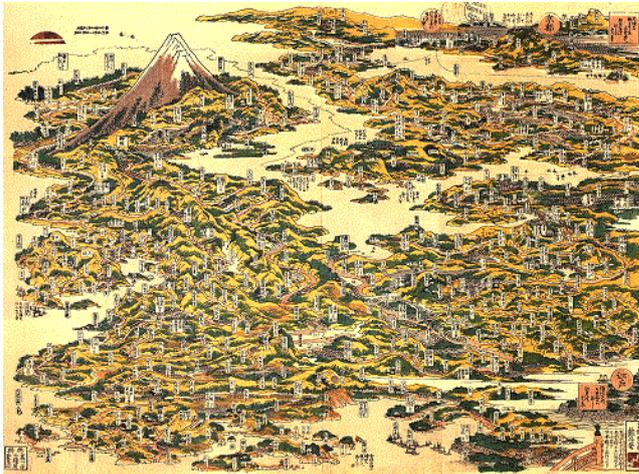
脚注）黄崑山：のち松村呉春（1752～1811 四条派の始祖）にもつく。天明4～天保8年（1784～1837）。

※大判鳥瞰図は、本図の他「東海道名所一覽」（文政元年：1818 頃）、「木曾名所一覽図」（文政2年：1819）「奥州塩竈松寫之畧図」（文政7年頃：1810）、「唐土名所之絵」（天保1年：1839）などがある。

☆〈袋〉（北斎改葛飾戴斗先生筆。書林 耕書堂 衆星閣 双鶴堂 合刻。島根県立美

術館：永田コレクション蔵)

●錦絵鳥瞰図「東海道名所一覽」(大大判鳥瞰図注一枚。葛飾前北齋戴斗筆。印たい斗。袋(46.2×32.6)には、文政戊寅新鑄 葛飾前北齋戴斗老人画とある。須原屋茂



兵衛(千鐘房)・小林新兵衛(嵩山房)・角丸屋甚助(衆星閣)合梓。43.2×58.2 すみだ北齋美術館：ピーターモース・コレクション/東京国立博物館/ライデン大学図書館/品川区立品川歴史館/島根県立美術館：永田コレクション/日本浮世絵博物館/神戸市立博物館蔵)

注)鳥瞰図：鳥目絵と呼ばれた。

932 東海道名所一覽(すみだ北齋美術館)

※一枚の絵に東海道全図を鳥瞰的に

描く。鋏形蕙斎(北尾政美 1764~1824)

の「江戸一覽図」(文化7、1810)の真似か(斎藤月岑『武江年表』：寛政年間の記事より)。

図は、右下の江戸・日本橋から図の左に向けて東海道名所が描かれ、図の右上に京都が配置される。

☆〈袋〉(葛飾北齋戴斗老人画。東都書林 衆星閣蔵。島根県立美術館：永田コレクション蔵)

●扇面図「蔬菜に撫子図」(紙本着色扇面一面。北齋戴斗筆。印ふしのやま。17.8×49.6 ホノルル美術館蔵)

※蔬菜は青野菜をいうが、図は葉付の山葵、蓮根、独活、茄子が描かれ、茎の先に咲く撫子の花が添えられる。

文政2(1819)己卯60歳 北齋改葛飾戴斗、東都画工葛飾北齋、葛飾戴斗、葛飾北齋、葛飾前戴斗、前北齋戴斗、前北齋戴斗老人、戴斗、葛飾前北齋戴斗 印ふしのやま、雷震、たい斗：こと(49歳)、(阿美与：31歳)、(孫：10歳)、(阿栄：22歳)

◇この頃、江戸で料理茶屋が繁盛する。

◇10月26日。勝川春英没(58)。

○十辺舎一九『清談峯初花 初編』。中判読本のバリエーションとしての「人情本」の初め。後編は文政4年(1821)刊。

○12月、小林一茶、俳文集『おらが春』成稿(一茶没後、嘉永5年(1852)に白井一之が自家本として刊行)。

【戴斗を北泉に譲り、為一号を翌年から用いる】

★「戴斗」号を門人の斗円楼北泉に譲る(本名：遠藤注伴右衛門)。二代戴斗となるにもか

かわらず、落款には二代と記さず「戴斗」とあるので、初代戴斗（北斎）作との区別には注意を要する。

注) 遠藤：近藤とも。『増補浮世絵類考』（『浮世絵類考』岩波文庫版 p 158）に「戴斗（文化文政の人）俗称伴右衛門 遠藤氏（小笠原家浪人なり）始は北泉」とある。『森銑三著作集第四巻』（p 474）には「翹町平川町天神前京極殿家臣、画名、後ノ北斎戴斗、近藤伴右衛門」とある。

★「為一」と改名（天保4年頃まで使用）。還暦を迎えて「もう一度」の意味を込めたか。ただし、実際に使用したのは翌年からか。

●絵手本『伝神開手 北斎漫画 九編』（春。半紙本一冊。22.7×15.8 ホノルル美術館/山口県立萩美術館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/フリーア美術館：ブルグエー・コレクション蔵）

※奥付には「東都画工 北斎改葛飾戴斗。印ふしのやま。同 校合 門人：魚屋北溪、斗田楼北泉。尾陽名古屋校合門人：月光亭墨僊、月斎哥政。文政二年 卯春 竹川藤兵衛（江戸日本橋四日市）、英屋平吉（江戸本石町十軒店）、永楽屋東四郎（名古屋本町七丁目）、角丸屋甚助（江戸翹町平川二丁目）」と記されている。

※後摺奥付には「東都画工 葛飾北斎筆。印雷震。尾陽名古屋 校 北亭墨僊、東南西北雲。書林：英屋平吉（江戸本石町十軒店）、竹川藤兵衛（江戸日本橋四日市）、角丸屋甚助（江戸翹町平川）、永楽屋東四郎（名古屋本町七丁目）」とある。

☆表紙：軍配に篆書体で「漫画 九編」と書かれ、七星が描かれる。

☆序文「漫画となづけたるふみ、次にこゝのたび木にゑりぬとか。こたびはことさらにめづらかなるさまをとて、もろこし、やまとをいはず、ふるきよのいくさ物語どもを、こゝかしことえりとうでゝ、例のたへなる筆にものせられつ。（略）六樹園注」

注) 六樹園：宿屋飯盛（石川雅望）

☆〈近江国貝津ノ里・傀儡女金子カ力量〉

※平安末期、近江の国貝津の遊女お兼は川で洗濯の帰り道、あばれ馬の手綱を足駄で踏み押さえたという伝説を描いた画は歌川国芳「近江の国の勇婦於兼」（洋画風）に影響を与える。



933 九編 傀儡女金子カ力量（すみだ北斎美術館）

●絵手本『伝神開手 北斎漫画 十編』（春。半紙本一冊。22.9×15.4 ホノルル美術館/山口県立萩美術館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/フリーア美術館：ブルグエー・コレクション蔵）

※末尾（29 丁裏）に、亀甲模様の着物を着た寿老人が、筆を持ち、「大尾」（最終）と書いた紙を持っている図がある。以上で一応完結としたが、好評により続刊される。

※奥付には「東都画工 北斎改葛飾戴斗。印ふしのやま。同 校合 門人：魚屋北溪、斗
 田楼北泉。尾陽名古屋校合門人：月光亭墨僊、月齋哥政。文政二年 卯春 竹川藤兵衛(江
 戸日本橋四日市)、英屋平吉(江戸本石町十軒店)、永楽屋東四郎(名古屋本町七丁目)、角
 丸屋甚助(江戸麹町平川二丁目)」と記されている。



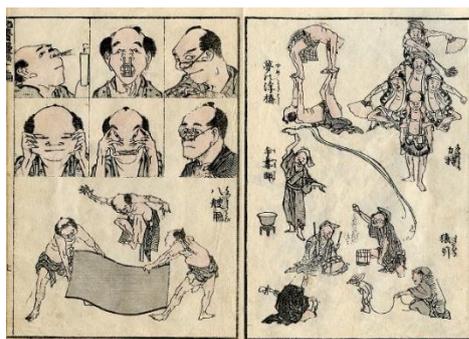
934 十編末尾 (ARCポータルデータベースより)

※後摺奥付には、画工名はなく「京都書林
 伏見屋藤衛門(堀川通)、大坂書林：
 柏原屋与右衛門(心齋橋通)、同清右衛門、
 同河内屋木兵衛、同敦賀屋九兵衛、東都書
 林：角丸屋甚助(糀町四丁目)、大坂屋茂
 吉(日本橋砥石店)、前川六左衛門(同
 新右衛門丁)、尾陽書林：永楽屋東四郎(名
 古屋本町通七丁目)」と記される。

☆序文「おのれざえなくて、よろづのわざにあたはざること多かり。されど、囲碁、
 蹴鞠などすぐれたる上手の物するを見ても、あなめでたとおもふばかりにて、人をうらや
 み、みづからをくゆるこゝろうごかず。たゞ、絵こそ堪ざる身をつみて、よくする人のう
 ら山るゝ物はあれ。さるは読書するにも、殿舎、調度、こゝはかくあるぞ、それはしかあ
 るしと、文字に書きとりては、おぼくしくのみあるを、絵にうつし出しては、こよなくさ
 とりやすし。北斎漫画十編まで梓(版木)にゑりて(彫って)、世に行はる。おのれこれ
 を見て、堪ざるくひは、千度にあまれり。あはれ世上の君子たち、翁にならひて、堪ざる
 くひし給ふな、ゆめぐ。文政二年十月 榊欄台老人 (『北斎漫画』3「奇想天外」2011
 年 青幻舎より)



935 十編 累の怨恨 祐天和尚 三日月上人菊女ケ壺



大人遊びの百面相力持 猿引 夢の浮橋 手妻師

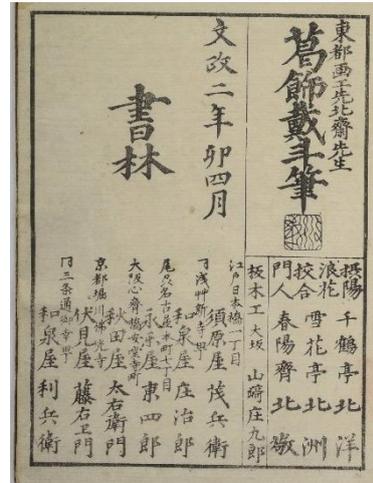
☆表紙：「漫画 十編」と書かれた下に「文昌星」が描かれる。「魁星」ともいい、
 「魁」を分解すると「鬼」と「斗」(升)となるので、鬼が龍に乗り片手に升を持ち、片
 手に筆をもっている図。筆は古代中国の科挙の試験に臨むことを象徴し、龍は星を象徴し
 ているという。北斎の北斗星信仰からの着想。

●絵手本『北斎画式』(4月。大本淡彩摺一冊。画題のない図が多い。25.7×18.3 46
 頁の多くが見開き一図の構成。全23丁、扉半丁と序文1丁半は含まず。葛飾戴斗筆。

印ふしのやま（すみだ北斎美術館では「よしのやま」）。大英博物館/すみだ北斎美術館/島根県立美術館：永田コレクション/フリーア美術館：フルヴェー・コレクション/メトロポリタン美術館蔵)

936 奥付（メトロポリタン美術館）

※奥付に「東都画工北斎先生 葛飾戴斗筆 印ふしのやま 板木工 大坂 山崎庄九郎 文政二年卯四月」とあり、書林は須原屋茂兵衛（江戸）・和泉屋庄治郎（江戸）永楽屋東四郎（名古屋）・秋田屋太右衛門（大坂）・伏見屋藤右衛門（京都）・和泉屋利兵衛（京都）が連記されている。



「フリーア美術館
フルヴェー・コレクション

日本絵本コレクション目録稿」では文政元年9月序としている。

937『北斎画式』〈蛭子〉（大英博物館）

※初めの図の前に「臥遊」と表記している。

※動植物、宗教画、風俗などを描く。関西の版元からの刊行なので文化14年(1817)の大達磨の



パフォーマンス時に制作したものかとの見方あり。

※文政3年の『良美瀟筆』からも図を追加挿入して、『北斎画譜』（半紙本。三冊。永楽屋東四郎版）と改題。初巻は天保初年に、中巻と下巻（嘉永2年）は北斎没後7ヶ月後にも刊行された。

※八隅景山（東都景山処士）の序文。

「(略) 爰を以、今年浪華宋榮堂（注：秋田屋太右衛門のこと）の主人、此画式を乞、山水人物禽獸草木、初心の規矩となるべきもの、尤勝たるを求て梓（注：板木）に鏤、名て北斎画式といふ。画に志有の輩及諸職百工の徒、此画式によって出入せば、其図を伸縮左右し、且画法得こと師に随て学が如し（略）」（『秘蔵浮世絵大観フルヴェー・コレクション』 p 270 による。注・句読点・ルビは筆者による）

〈蛭子〉〈梅松桜に白太夫〉〈釈迦と羅漢〉〈雪景山水〉〈大塔の宮を窺う淵辺伊賀守〉〈花籠〉〈不動明王と役小角〉〈街道風景〉〈蟹〉〈海上群仙〉〈月夜山水〉〈相撲〉〈鉦花に交魚〉〈木こり〉〈藤に鷹〉〈落雁と雀〉〈雨中人物〉〈雨後の日〉〈梅に鶴〉〈在郷風景〉〈毘沙門天〉の図などが描かれる。938『北斎画式』〈鉦花交魚〉（大英博物館）



※明治15年4月に再刻版『北斎図式』（横型二つ切判一冊。東京武田殿右衛門版）が出版されている。

●絵手本『**秀画一覽**』（『**北斎画鏡**』（文化 15 年：1818）の改題再摺判。着色。東都画工葛飾北斎画。袋には北斎戴斗。自家出版か）

●咄本『**落咄福寿草**』（1 月。中本一冊。紀尾左丸作。葛飾北斎画。丸屋文右衛門版。東大國文研究室蔵）

●絵手本『**画本早引**』後編（7 月。中本墨摺二編一冊。前北斎戴斗筆。和泉屋市兵衛版。島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館/名古屋市蓬左文庫蔵）

※前編は文化 14（1817）年刊。

※自書解題には「節用集にならひ、画図をいろは引にして、其品をさくりやすく、画風もまた初学の上達しやすきやうに、工夫せしものなり」とある。様々な画題の絵を「いろは」順に配列したもの。

※後編は「う」から「す」までの語句に関わるコマ絵を描く。末尾には「京」と題して、大原女が煙管を加えて休んでいる絵に続き、「市(一)」（市場の賑わい）、「荷(二)」（雨中に天秤棒の荷物を担ぐ男）、「算(三)」（算盤で計算する商人）、「士(四)」（侍が二人座って向かい合っている）、「碁(五)」（囲碁盤と碁石）、「禄(六)」（禄を納める男と吟味をする役人）、「七(七)」（北斗七星）、「蜂(八)」（蜂の姿）、「苦(九)」（苦しみ悩む女）、「重(十)」（重箱）、「百」（火鉢の前の翁）、「扇」 「万」（一万年の瑞龜）の絵が描かれる。



939 『画本早引 後編』（メトロポリタン美術館：ARC 古典籍データベースより）

●読本『**逆櫓松**』（1 月。角書「**高麗若全伝**」。六冊。南里亭其楽作。前北斎戴斗画（門人 北雲の画もあり）。**印**雷震。京都和泉屋利兵衛版。立命館大学 ARC 蔵）

※逆櫓松は、大阪府大阪市福島区福島地区付近にあった老松。源平合戦において、この老松の下で源義経と梶原景時が軍議の評定を行ったとされる（Wikipedia による）。

●俳書『**うめわさん**』（月痴道人）

※『年譜』で「葛飾北斎改名考（其三）」（漆山天道「書物展望」2/7 書物展望社 昭和 7 年）を引いて紹介している。

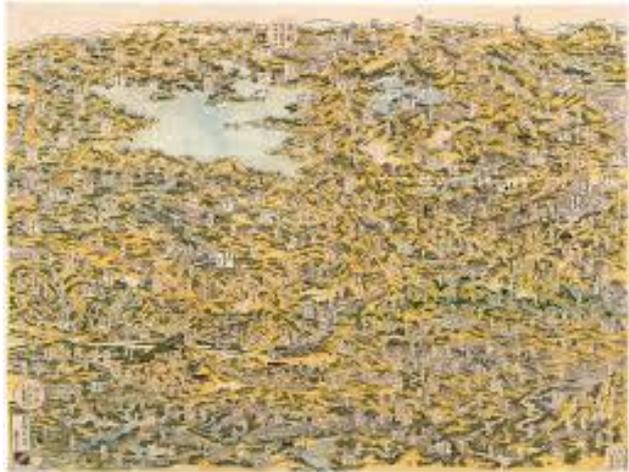
●錦絵「**木曾路名所一覽**」（1 月。横大大判一帖。葛飾前北斎戴斗筆。**印**たい斗。角丸屋甚助（衆屋閣）・河内屋金助（文金堂）・亀屋甚助（千鐘房）合梓。42.0×56.3 岐阜県図書館/日本浮世絵博物館/神戸市立博物館/東洋文庫/ライデン大学図書館蔵）

940 木曾路名所一覧（岐阜県図書館）

※「袋」（47.0×32.7）には「前北齋戴斗老人筆 文政二卯孟春 東都書林 衆星閣蔵」（神戸市立博物館蔵）とある。

●絵暦「因幡の白兔」（前北齋戴斗筆。20.8×18.1 すみだ北齋美術館蔵）

※『古事記』の神話を題材にした図。大黒天（だいこくてん おおくにのぬしのみこと）が毛をむしられた兔の傷の治し方を教えているところか。



941 因幡の白兔（クラクフ国立美術館）

●肉筆画「鵜飼図」（絹本着色一幅。葛飾戴斗筆。印ふしのやま。96.8×36.1 MOA美術館蔵）



※蛇行する川面に松明をかざしながら、網で鵜を操っている。流れる川の曲線、水面に出た鵜の羽根の藍色。谷素外たにそがい注87歳の賛「おのか火に てらすや 皐月 闇の業

玉池八十七翁素外」が記される。素外87歳は文政2年である。

注）谷素外：1733～1823 俳人。江戸談林派七世。

942 鵜飼図（MOA美術館）



●肉筆画「寄書き十三図」（仮題。一幅。この頃か）

※檜崎宗重『北齋論』（p327～328）に次の記事がある。参考に記す。「北齋の甲州旅行（文政八年頃。『浮世絵師伝』による）に関係があると考へられるが、甲府松林軒百貨店に貴重な作がある。それは粗末な唐紙にかゝれたもので、北齋の一幅と、横に長くついだ紙に門人が画をかいている」として、第一に形工亭北一の図、第二に昇亭北寿の図、第三は岳亭春信の図、第四は戴月の図、第五は戴一の図、第六は北溪の図、「第七は北齋の娘辰で、美人画、辰女筆たつじよ印よしのやま（筆者注：「ふしのやま」か）、第八は北泉戴岳ではじめ北泉、改めて戴岳、文政二年より二代戴斗となった人、これは署名だけあり、第九に猿引図に戴斗筆とあつて「ふもとのさと」と印を捺してゐる。この一巻は寄せ書風で同時にかゝれたもの」とし、更に第十に北岱の図、第十一に戴振の図、第十二に森島氏の図、第十三に貫亮と署名一明氏の印があると記して、「これは文政二年頃の作と考えられる」（ルビは筆者による）としている。

文政3 (1820) 庚辰 61 歳 東都画工葛飾戴斗、北斎戴斗改葛飾為一、北斎戴斗改 為一、
葛飾為一、北斎改葛飾為一、東都北斎戴斗改葛飾北斎為一、前北斎為一、北斎改 為一
印 葛しか、一人人形：こと (50 歳)、(阿美与：32 歳)、(孫：11 歳)、阿栄 (23 歳)

【為一前期】

◇1月24日、北尾重政没 (82)。

◇3月7日、写楽没 (58)。『2011年 写楽展図録』（東京国立博物館）では以下の様に説明している。

「写楽は安房藩の喜多流の能楽者斎藤十郎兵衛であることが実証されており、能役者名簿『重修猿楽伝記』と『猿楽分限帳』の記述から、文化7年(1810)、十郎兵衛が49歳で実在していたことが内田千鶴子氏により確認された。さらに平成9年、徳島市の歴史愛好会「写楽の会」により、埼玉県越谷市の法光寺が斎藤家の菩提寺と確認された。同寺の過去帳に「辰三月七日 釈大乘院覚雲居士 八町堀地蔵橋 阿州殿御内 斎藤十良兵衛事行年五十八歳 千住ニテ火葬」とあり、辰年に当たる文政3年で没したことになる」(p17)。

◇9月4日、浦上玉堂没(76)。

◇12月29日、浅草庵市人没(66)。

【この頃より為一号を用いる】

★「江戸ゑいりよみ本戯作者画工新作者番付」に歌川豊国と同格で最上位に載る（『年譜』による）。

★この頃、本所緑町に住むか（この年の手紙に、「みどり町為一拝」とある由、檜崎宗重『北斎論』による）。緑町2丁目（堅川脇）（『和楽』2017年9月。10・11月号 p71掲載の「嘉永 新鑄 本所絵図」による）か。

★この頃より摺物が増加する。

★正月、両国東広小路での見世物(造り物・虎)での摺物「千里嶽 虎あそび」を描く。

★2月、浅草奥山興行の麦藁細工注の見世物絵を描く。

注) 麦藁細工：実際には籠細工で、細竹を組み合わせて北斎の下絵に従って細工師が作った。

【阿栄、夫の絵を笑い離縁】

★この頃、阿栄、離縁して実家に戻るか。

鈴木由紀子『浮世絵の女たち』（2016・幻冬舎・p188）では文政10年(1827)頃とする。文政11年とする説もあり。

※『武江年表』（斎藤月岑）文政二年条には、浅草竹細工の見世物に触れ、阿栄の離別にも触れている。

「それよりまた一兩年すぎて、浅草奥山に同じ細工人の作、其みせ物の看板は山姥と金太郎なり。是もいと花やかにて、細工は前前と同じく、顔手足籠目あざやかに透、指など細

かなる所いと能作れり。此細工の彩色は、橋本町の水油屋庄兵衛が倅幼名吉之助といひしが、成長して画師等琳が弟子となりたれども、画は又一風なり。北斎が女（筆者注：お栄のこと）を妻としたりしが離別したり、其故は北斎が女絵をよくかき、芥子人形など作るに巧みなり、されど吉之助画を手伝はせず、其外にはこの女針わざ縫物などはよくせず、かれこれ心にならずして別れたりとぞ、右かご細工はこれ（南沢等明のこと）が彩色なり、下絵も同じ」（「国立国会図書館デジタルコレクション」 p 208）。「水油屋の倅吉之助」は南沢等明のこと。

この年に離縁と仮定するのは文政2年から「一兩年」を文政3年とする説に従っている（2011年3月16日、島田賢太郎「台東区生涯学習浮世絵講座『葛飾北斎』第六回 没個性の画派・北斎派と娘お栄の活動」より）。引用文末の「下絵も同じ」は、葛飾北斎の誤りか。

※20歳で嫁ぎ23歳で離縁となるが、嫁いだ年と離縁の年はあくまで仮説である。

※「関根氏曰く、阿栄の挙動、北斎翁に似たれば、其の離別せらるゝも、亦宜ならずや。且かの等明は、画を嗜みて画きたれど、阿栄よりは拙し。故に阿栄は、常に其の画の拙所を指して、笑ひしと。」（『葛飾北斎伝』 p 308。ルビは筆者による）

【阿栄、応為（オーイ）と号し、美人画に長ず】

※阿栄が応為と号した時期については明確でない。北斎の為一号から「為一に応ずる」として「応為」と名付けたという説が一般的なので、北斎が為一号を用いた期間には間違いないと思われる。

「阿栄家に帰て再嫁せず。応為と号し、父の業を助く。最美人画に長じ、筆意或は父に優れる所あり。」（『葛飾北斎伝』 p 309）

「按ずるに、応為の名、何に拠るを知らず。一説に、応為は、訓みて、オーイ、即呼ぶ声なり。阿栄父と同居、故にオーイ、オーイ親父ドノといへる。大津絵節注より取りたるならん。蓋し別に意味あるにあらずと。或は然らん。」（『葛飾北斎伝』 p 309。ルビは筆者による）。

北斎が阿栄を「オーイ」と呼んだというのが一般的だが、この記事によれば、阿栄も北斎に対して「オーイ親父ドノ」と呼んでいたらしい。

注) 大津絵節：近世の俗曲の一。近江の戯画大津絵の画題を読み込み節付けした「げほうのはしごすり」を本歌としたらしく、文化・文政期に江戸で種々替歌が出来、全国的に流行した。本書で引用する歌詞は「忠臣蔵五段目山崎街道」の定九郎が与一兵衛を呼び止める「オイ〈爺どの、其金此方へ貸して呉れ〉をさすものと思われる（同書脚注）。

★7月、両国回向院での見世物で瀬戸物細工に下絵を描く。

●艶本『波千鳥』（この頃か。大錦横判。折帖一冊12図。「富久壽楚宇」（文化12年：1815）の改題版『會本佐勢毛が露』（文政初期）を更に白雲母摺判とし、彩色の豪華本に仕立てたもの）

※浪に千鳥の蒔絵のある黒漆塗の桐板表紙を付けているところから、通称『浪千鳥』と

呼ばれる。他に紅雲母摺本や普通の紙表紙本、あるいは着物や肌、陰毛などに手彩色(肉筆。阿榮によるものか)を加えた豪華本など、弘化頃まで制作を続け、いくつかのヴァージョン本がある。「富久壽楚宇」にあった序文や書き込みはない(1989年『芸術新潮』3月号「北斎」特集所収、林美一「北斎 艶本への挑戦』による)。



943 波千鳥 (部分: Amazon.co.jp より転載)

●絵本『陰隲文絵抄』(角書「和語」。1月。2冊。秋田屋 太右衛門版)

※画風から、前年に号を譲った二世戴斗の絵とする説がある(リチャード・レイン『伝記画集 北斎』p333)。

●絵手本『良美灑筆』(5月か。大本一冊。色摺。奥付に「東都画工葛飾戴斗筆。校合門人 月光亭墨仙 戴環・北鷹・月斎 哥政 書林 角丸屋甚助・永楽屋東四郎・美濃屋清七・美濃屋伊六」とある。島根県立美術館:永田コレクション蔵)

※後に『北斎画譜』(3冊。永楽屋東四郎版)に収録された。

「良美」とは、良い日がらで、美しい景色の意味だと、序文にある。「灑」はさっぱりした、ものにこだわらないという意味から、全体として「これらを併せて表題を考えてみると、良い日の美しい景観を気取ることなくさわやかに描いたもの、と解釈して許されるのではないだろうか」と永田生慈は述べている(『北斎の本懐』角川新書 p106)。

☆〈雪中の万歳〉

※雪降る中、漫才師の一行が傘をさして歩いている。他にも傘をさして行き来する人々。全体に楕円の構図。 944 雪中の万歳 (https://www.bakumatsuya.com/より)



☆〈雪解川〉

※全体にS字の構図。六頭の牛(角は水牛のように見える)が川の中をS字形に連なって行く。

945 雪解川 (https://www.bakumatsuya.com/より)



☆〈野分〉

946 野分 (https://www.bakumatsuya.com/より)

※「風の強い日」とも。吹き付ける強風に体を支えるようにしている旅人たち。笠が飛

びそうになり、着物の裾は激しく靡いている様子を描く。

☆〈蛇雉子を巻く〉

※雉子に絡みつくと蛇の目と雉子の目が合っている。



947 蛇雉子を巻く (https://www.bakumatsuya.com/より)

☆〈盲人の川越〉

※雪の夜、多くの盲人が裸足で、手を繋ぎながら歩いている様子を描く。



978 盲人の川越 (https://www.bakumatsuya.com/より)

他に☆〈初日影〉☆〈汲古閣にて書を鬻ぐの図〉☆〈落梅花〉☆〈春雨の往来〉☆〈隅田川遠桜〉☆〈狂女蝶に戯る〉☆〈目に青葉山郭公初松魚〉☆〈鐘馗〉☆〈萸菊・蜂・石竹〉☆〈山吹・文鳥〉☆〈夏の往来〉☆〈晩夏の山水〉☆〈夕立〉☆〈秋の七草〉☆〈蓮切〉☆〈山家の月〉☆〈水辺の月〉☆〈月下の往来〉☆〈悟道〉☆〈郭子儀〉☆〈雪の曙〉☆〈餅椿〉☆〈福ハ内〉☆〈青陽〉

●絵手本『北斎簞画』(5月。大本墨絵一冊。全29丁。25.6×17.9 奥付には「東都画工葛飾戴斗筆 書林 角丸屋甚助(江戸)・永楽屋東四郎(名古屋)・美濃屋清七(名古屋)・美濃屋市兵衛(名古屋)・美濃屋伊六(名古屋)」とある。島根県立美術館：永田コレクション/フリーア美術館：ブルヴァー・コレクション蔵)

※1年12カ月の風景を中心に動植物や中国の故事を描いたもの。

※『良美瀧筆』(美濃屋伊六版)の改題・再版本。後、『北斎画式』と『良美瀧筆』の絵を合わせ『北斎画譜』(半紙本。三冊。永楽屋東四郎版。国際日本文化研究センター蔵)と改題し、下巻が北斎没後の7か月後に出版された。

●案内チラシ「麦藁細工絵番付」(墨摺番付2枚綴り。島根県立美術館：永田コレクション/大田区立郷土博物館蔵)

※麦藁細工興行の案内チラシ。実際の麦藁細工の下絵と別絵となっている。

●下絵「麦藁細工報条」(2月。「麦藁細工報状」とも。大大判四枚続。下絵校合北斎戴斗改葛飾為一。鶴屋金助版。東京国立博物館蔵)

※文政3年(1820)2月、浅草奥山で興行された麦藁細工制作のための下絵。北斎の下絵によって造られた麦藁細工を示す。

※「麦藁張細工 同所〈浅草奥山〉へ出、七丈余りの青龍刀、十二支の額、其の外北斎の下絵にて見事なり。大森の職人これをつくる」(『増補武江年表』巻之八 国立国会図書館デジタルコレクション p210)

〈青龍刀〉 〈孔明〉 〈丹頂鶴〉 〈十二支額面〉 〈周蒼〉 〈龍頭〉 〈蜀の勇士〉 等の図。

「江戸浅草金龍山境内にて御覧に奉入恨」との書き入れがある。

●錦絵「**麦藁細工見世物**」（3月。「**麦藁細工の図**」とも。大判彩色4枚続き。但し、左の一枚は欠。葛飾為一。鶴屋金助版。38.7×77.2 東京国立博物館/太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※「**麦藁細工報条**」とはかなり変化している。

●肉筆画「**白拍子図**」（この頃。絹本着色一幅。北斎戴斗改為一筆。印葛しか。98.9×41.9 北斎館蔵）

※白拍子は平安末から鎌倉初期にかけての歌舞を業とする遊女。この絵では、白い直垂、朱色の長袴、立烏帽子を被り柄巻拵太刀（柄と鞘が同じ組紐で巻かれた太刀）を腰に帯び、右手に半開きの扇を持った男装の白拍子を描く。

一説に、源義経の愛妾の静御前が、義経との別れを余儀なくされ、源頼朝の妻、北条政子の前で舞う姿という。「しずやしずや賤のおだまき繰り返し昔を今になすよしもかな」と謡う場面。衣服の輪郭をちりちりに描く描法は、戴斗と号した50歳代以降の美人画に顕著とされる。 949 拍子図（北斎館）



●摺物「**空満屋連和漢武勇合三番之内**」（色紙判色摺。三図。北斎戴斗改葛飾為一筆。各約20.6×18.3）

※四方側の空満屋（「くまや」とも）連の春興狂歌摺物。和漢の武勇を二人組み合わせた図。

☆〈**伍子胥と巴御前**〉（スペンサー美術館/太田記念美術館：長瀬コレクション/東京国立博物館/仏・ユゲット・コレクション蔵）

※甲冑姿の巴御前が空満屋楯垣真枝の狂歌を書いた縦紙を持ち、その脇で椅子に座る伍子胥が机に乗せた紙に筆で字を書く図。伍子胥は、中国春秋時代、楚の武人。策略に遭い父と兄を楚の平王に殺されたので、復讐を誓い、呉を助けて楚を討った人物。巴御前は、『平家物語』では、木曾（源）義仲に仕える女武者だが、『源平盛衰記』などでは義仲の愛妾としている。木曾義仲が源義経に追われ最後に残った七騎の一人。

☆〈**弁慶と唐婦人**〉（スペンサー美術館/仏・ユゲット・コレクション）

※婦人は『水滸伝』の顧大嫂といわれる。顧大嫂は、『水滸伝』に登場する女性で、108人の梁山泊の内、101位で地陰星の生れ変わりといわれる女傑。弁慶は、比叡山の僧だったが、乱暴者で追い出された。武蔵坊弁慶と名乗り、乱暴を繰り返す、京都で太刀を999本奪い、千本目を五条大橋で牛若丸（源義経）から奪おうとしたが、返り討ちに逢い、降参して義経の従者となった。

450 弁慶と唐婦人（『ピーター・モース・コレクション北斎図録』より転載）



狂歌は「やうくと今朝ハ霞を引あひて あそふやうなる春のやまく 径」、「春霞たつに習ひておのづから 引はりのよきうぐいすの声 亀峰」、「春くれハ蝦夷か千島の外までも にほへる梅や猛きいさをし 真柄」、空満屋楳垣真枝の「たつ春の色を競ひてはつ霞 引あふさまや畝火耳梨 真枝」が記される。

☆〈大井子と樊噲〉（スペンサー美術館/フォッグ美術館/仏・ユゲット・コレクション蔵）

※大井子が菰樽から樊噲に酒をついでいる図。大井子（「おおいね」とも）は、滋賀県高島市に伝わる伝説の力持ちの女性。水争いで自分の田に水を止められたのに対抗して、闇夜に六・七尺四方の大石を担ぎ水門まで行き、自分の田にだけ水が行くように大石を置いたという。

951 大井子と樊噲 (http://tiiibikuro.hatenablog.com/より)



樊噲（?～紀元前189年）は、中国の秦末から前漢初期にかけての武将。漢の高祖・劉邦に生涯仕えた。

狂歌は「谷の戸をひらきて出る鶯の こうもゆたかな春の酒盃出る 杉廼屋末枝」、「紫

露の眉をひき立てて 力もつよく見ゆる佐保姫 春恥女」、「花笠を盃にしてうぐいすも 露を汲める春の生酔 空満屋真枝」



●摺物「碁盤人形の図」（1月。色摺。北斎改葛飾為一筆 すみだ北斎美術館蔵）

※碁盤の上で、毛槍を抱えて踊る元禄風の髪形をした女の人形を操る 袴姿の人形遣い。男の背後の枰内に、空満屋楳垣真枝の狂歌「みつ垣のみつ木といはん梅の花 それしも春が辰之助とて」が記される。水木辰之助注の槍踊りを碁盤人形に仕立てたものという（安田剛蔵『画狂北斎』p124）。

952 碁盤人形の図（すみだ北斎美術館）

注) 水木辰之助：1673～1745。元禄歌舞伎の代表的な女形。槍踊りなどで有名。

●摺物「酒樽と橘中の仙」（1月。東都北斎戴斗改葛飾北斎為一筆）

※「橘中の仙」とは、橘の実を割ると仙人が碁を打っていたという中国の故事から、碁を楽しむ老人をいう。「文政三庚辰」とある。森羅亭万象他の狂歌が記される（『年譜』による）。

●摺物「舞台道具の図」（前北斎為一筆）

※「文政庚辰」とある。画中に坂東秀佳（三世坂東三津五郎）の名（『年譜』による）。

●摺物「船着場二美人図」（色摺。無款。34.8×60.8）

※屋形船が船着き場に着き、先に上がっている女に手を差し伸べて舟から上がろうとする女の手前には、傘が2本ある。船着き場の明かりに「文政三」の文字が記されている。寛政11年（1799）に同画趣の摺物「舟から降りる芸妓」（宗理改北斎画）がある。

●肉筆画「獅子図」(絹本着色一幅。北斎改為一筆。46.2×69.5 日本浮世絵博物館蔵)

※文政末期説あり。

左図には三頭の子獅子が描かれ、右図には大きな獅子が描かれる。別々の二図をつなげて親子のような図柄になっている。金潰しの背景に墨による太い輪郭線で獅子の形を描き、その体は金地をそのまま生かした描き方。



953 子図 (日本浮世絵博物館)

●扇面画「恵比寿と大黒図」(扇面着色一枚。前北斎為一筆。印一人人形)

※ウラジロや幣を下げた細い注連縄の下で、並んで座り、恵比寿が鼓を打ち、大黒が何かを歌っている。二人の前には鏡餅が置かれている。

文政4 (1821) 辛巳 62 歳 前北斎為一、北斎戴斗、月癡老人為一、和合堂主人(隠号)、
行年六十二翁葛飾為一燈下席上画、かつしか為一、不染居北斎老人 印 さきのほくさい、
北斗一星高：こと (51 歳)、(阿美与：33 歳)、(孫：12 歳)、(阿栄 (24 歳))

◇2月30日、江戸市中に風邪大流行。窮民29万7千人に施銭が行われる。

◇5月5日(西洋暦)、ナポレオン・ボナパルト没(52)。

◇9月12日、『群書類聚』の編者塙保己一没(76)。

◇長崎に駱駝の雌雄二頭が送られて来る。

◇この頃の寺子屋の様子(文政4年、村上帰旭『筆道師家人名録』より)。

師匠479人(男310人、女139人。但しこれは上記出版の協賛金を出した人数であるので、他の群小寺子屋を含めると700~800人位か)。子が6・7歳になった二月初午の祭礼の翌日から寺子屋入りをする。束修(月謝)は予め決められる。机・弁当持参。四つ上がり(午前10時~11時)、八つ下がり(午後2時~3時)。家でお八つを食べる。

○谷文晁「日本名山図絵」。

○松浦静山『甲子夜話』執筆始める。

○7月、伊能忠敬没後「大日本沿海輿地全図」(大日本沿海実測地図)完成。

【四女 阿猶没か】

★「女子(四女・阿猶か)没」(2019『新北斎展図録』「北斎略年譜」p308より)。

但し、北斎墓碑の側面に「浄蓮妙心信女 文政四年辛巳歳十一月十三日」とあるのを『浮世絵派画集・第5冊・77頁』(大村西崖)では、長女阿美与の墓碑としている。誰の墓碑かは不明。文政8年条(1825)を参照。

【北斎の挿絵 一枚金一分二朱】

★山崎美成(随筆家。1796~1856)の『海録』巻三に、文政4年のこととして「此比坊間

(世間)に行はるゝ敵討よみ本のさしゑ、北齋、豊国(歌川)などの絵がけるは、一枚金一分二朱注位なり、作者へ料を以て謝礼せしも、近比まで五冊物にて五両づつ也しが、今は京伝、馬琴など七両に至れり、十五両と迄なりしと云、古今の変之にてみるべし

(ルビは筆者による)とある(国立国会デジタル・コレクション。コマ番号 61。大正 4 年：国書刊行会版)。

注) 金一分二朱：この頃は一両 6 貫(6000 文)程度と思われる。一両=4 分、一分=四朱を当てはめると、一両=6000 文、一分=1500 文、一朱=375 文であり、一分二朱は 2250 文となる。一文 25 円で換算すると、2250 文×25 円=56,250 円となる。北齋や豊国は挿絵一枚 56,250 円程度という。山東京伝や曲亭馬琴も相当な稿料だと述べている。一般には大判錦絵一枚が 32 文から 38 文(約 875 円から 950 円。1 文=25 円で換算)といわれる。ちなみに、天保 13 年(1842)には一両は 6 貫 500 文に公定価格改定が行われた。

●洒落本『東海探語』(一冊。美芳野(美芳塾)山人戯撰。前北齋為一筆。青州楼版)

※序文に「文政のよつのかのとゝいへるとしの春」(文政四辛と言へる年の春)とある。北齋は口絵に永代橋・石垣・川波及び隅田川岸辺の人家など深川の遠景をスケッチ風に一図描く。挿絵は北秀が描く。深川新石場を舞台に客と傾城のやりとりを描く。

●絵本『蕪姑射山注』(1 月。角書「狂歌画譜」。墨摺。合本一冊。前北齋先生画。(浪華)立好齋(流光齋)如圭筆。北齋戴斗筆。六樹園編。永樂屋東四郎(東壁堂)版。すみだ北齋美術館蔵)

※『萍水奇画』(文政元年 2 月：1818)の改題本。更に『萍水奇画』の俳句を削除して絵数を増やした同題の色摺本と、『蕪姑射山』の序文と奥付を変えた『画本両筆』(刊年未定。墨摺本と色摺本がある)や、『画本両筆』と同じ序文と奥付を持ち狂歌が削除された『両筆画譜』(刊年未定。墨摺本と色摺本がある)などの改題本が出る(『ピーター・モース・コレクション北齋』図録 p509 による)。

注) 蕪姑射山：不老不死の仙人が住むという伝説の山。姑射山(『莊子』「逍遙遊」篇)。

【連想遊びの狂歌本・月癡老人為一号を用いる】

●狂歌絵本・摺物『元禄歌仙貝合』(1 月。色紙判〈角判〉色摺。全 36 図。月癡老人為一筆。鹿津部真顔の四方方の狂歌摺物。各約 20.0×17.6 千葉市美術館/ジェノヴァ東洋美術館/アムステルダム国立美術館蔵。各作品に付けられた所蔵館は前記 3 館に加えた所蔵館を示す)

※『馬尽』(文政 5 年：1822)とともに北齋の揃物としては最大量のもの。鹿津部真顔が率いる四方側の狂歌師による揃物。

※「月癡老人」号はオランダ語の Maanziek(狂人)から創作されたものという。この号の使用は、『元禄歌仙貝合』(文政 4 年)、「梅に鶯」(「月痴」と表記。団扇絵判錦絵。文政 4 年頃)、狂歌本『花鳥画賛歌合』(「月痴」と表記。文政 11 年)に見られ、また『絵本庭訓往来』(文政 11 年)の六樹園宿屋飯盛の序文で、北齋を指してこの号を用いている(『秘蔵浮世絵大観 7 ギメ美術館』p 253)。

※各画の隅に画題の貝が扇面のコマ絵で描かれる。

☆〈あこや貝〉 (20.7×17.8 すみだ北斎美術館蔵)

※浄瑠璃「壇浦兜軍記」の「阿古屋の琴責め」からの発想。秩父重忠が、阿古屋に夫の景清の居所を問いただしたところ、行方を知らないという阿古屋に琴、三味線、尺八を弾かせ、その音色の陰りの無さに、阿古屋の言葉を信じたという話から、琴と尺八を描き、更に三方に海老と松等を乗せた宝来飾りを描く。『平家物語』巻二の「阿古屋の松」からの連想と考えられている。

☆〈あさり貝〉

☆〈あし貝〉 (19.9×17.7 シカゴ美術館蔵)



※脚の長い鶴が六羽が水辺で休んでいる。その足元に二匹の子鶴がいる。水辺には葦が生えている。

954 あし貝 (シカゴ美術館)

☆〈あわび〉

☆〈いたや貝〉 (19.8×17.6)

※俎板で餅を小さく切り、正月の用意をする女房と、それを見ている娘。後ろには、橙やウラジロを乗せた鏡餅や、海老に松の正月飾り、玩具の二張りの弓等が飾られている。

☆〈いろ貝〉 (20.1×17.7)

※「いろ」は化粧を意味するところから、「京御おしろひ」と書の白かれたおしろい粉の袋、伏せて置かれた紅猪口注、懐中鏡、元結い紐などが描かれる。

注) 内側に紅を塗り付けた猪口の形をした茶碗。「べにちよこ」とも。

☆〈うつせ貝〉 (島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※文政4年の絵暦になっていて、画中の鏡に蛇と大小月が示される。

955 うつせ貝 (島根県立美術館)



☆〈梅のはな貝〉 (20.7×18.0)

※梅の花が咲く枝を背景に、漆塗りで飾り紐のついた柄杓と、縄で作った亀が描かれる。

☆〈うらうつ貝〉 (19.3×17.8 すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション蔵)

※紙の裏打ちをする女。断裁する前の長い紙を棒に巻きつける男。

☆〈かたし貝〉 (20.3×17.8 すみだ北斎美術館・ヒーターモース・コレクション/ベルギー王立美術歴史博物館/プルヴェラー・コレクション蔵)

※二張りの大きな蛇の目傘を前にして、子ども二人が片足でケンケンをして、草履隠し遊びをしている。傘の横で腰をかがめる男二人。開いた傘の一つに「寿」「千六百番歌合」の文字が書かれている。松壽菴年益の狂歌「春もまだかたし立て (片足立ち) して遊ぶ子

の「ざうりかくしや庭のあわ雪」が書かれる。

☆〈かたつかい〉（18.3×17.6 ベルギー王立美術歴史博物館蔵）

※「片貝」から、山鳥の雌雄は、夜は山を隔てて別々に寝るということを連想し、部屋で鳥かごの鳥を眺める二人の官女を描く。

☆〈きぬた貝〉（20.1×17.8 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※「砧」からの連想で、図は砧を打っているように、二人の女が海苔を打っている姿を描く。傍では海水に浮かべた箆に海苔を入れて、棒でかき混ぜている子どもがいる。

☆〈こかい〉（20.0×17.6 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※書き込みの狂歌「青柳のいとひの引音もはる風の 手ふりになれし籠の鶯」（檜曲亭）を基に、籠の鶯にすり鉢で擦った餌をやる二人の女を描く。

☆〈さくら貝〉（19.7×17.6 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※女の乗った鶯籠を下ろして休む駕籠かきたち。天秤の荷物を担ぐ男。頭巾を被り合羽を着た二人の男。街道の風景。遠くに馬が四頭放牧されている。

☆〈さゞへ貝〉（19.1×17.7 島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※本所五ツ目の五百羅漢寺（現東京都江東区大島）の三匠堂（三階建てさざゑ堂と呼ばれた）を俯瞰して描く。富士山を眺望する場所として有名。

☆〈しほ貝〉（20.2×17.8）

※「しほ（塩）」から赤穂を連想している。塩の入った箱の蓋には「名物 華しほ 播州 赤穂本町 高砂屋浦右衛門」と書かれている。高砂屋から高砂の松を想わせる松の盆栽や、煙草入れの根付けに松を描いている。

注）高砂の松：兵庫県高砂市の高砂神社（現兵庫県高砂市高砂町東宮町190）境内にある、黒松と赤松が根本で結合した相生の松。謡曲「高砂」で有名な松。

☆〈しじみ貝〉（20.1×17.7）

※道端で莫座を敷き、首が動く獅子の玩具を売っている男の前で、「鶯」と書いた凧と破魔矢を持った子どもたちが獅子を見てはしゃいでいる。「獅子見」で「しじみ」に結びつけたか。

956 しじみ貝（千葉市美術館）

☆〈しろ貝〉（20.0×17.6 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※画を描く白い巻紙の側に梅の小枝が描かれたものが立て掛けられている。硯に置かれた墨、扇、孔雀の羽根を挿した瓶などが描かれる。



☆〈すゞめ貝〉（20.2×17.8 島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館蔵）

※鳥籠から抜け出した二羽の雀と宝箱から宝珠・珊瑚・小槌・隠れ蓑・巻物・小判などの宝があふれ出している図で、舌切雀の話の連想させている。

☆〈すだれ貝〉 (19.9×17.7 千葉市美術館/プルヴェラー・コレクション/阿姆斯特ダム国立美術館/大英博物館蔵)

※姉さん被りの女三人が縁の赤い簾の各部分を作っている図。

☆〈ちくさ貝〉

※裏返された笠の中に紐付きの袋が置かれ、側につくしが懐紙に置かれている。千種が笠の近くに添えられている。

957 ちくさ貝



☆〈ちどり貝〉 (20.6×18.0)

※記された狂歌から、源義経が静御前と吉野で別れる際に与えた初音の鼓が描かれる。ちどり（千鳥）貝から鼓への連想は、千鳥は波千鳥の語もあるように波に縁が深く、波の音は鼓の音に譬えられるところから、鼓の絵に結びつくとする見解がある（2005『北斎展』図録 p 355）。

☆〈なでしこ貝〉

☆〈なみまかしハ〉 (20.0×18.0)

※文化6年（1809）の柳々居辰斎の『歌仙貝』にある〈浪間かしは〉からの影響が指摘される。首尾の松の下に停めた猪牙舟から松を眺める飄客（遊郭などで遊ぶ客）を描く。『歌仙貝』に描かれた猪牙舟は浅妻舟（春を売る女がいる舟）を暗示していることから、「浪の間の柏餅」、すなわち、浪間の舟の上で、柏餅のように蒲団を二枚重ねての秘め事に関連付けているか。

☆〈にしき貝〉 (19.6×17.8)

※柳の木に囲まれるように家並が描かれる。狂歌の中に吉野の六田が詠まれているところから柳で有名な六田の風景と考えられている。

☆〈はな貝〉 (21.4×17.5 北斎館蔵)

※図右に小さく貝が描かれ、松などが花器に生けられ、盆に水仙や椿の花が置かれている。

☆〈はまくりかい〉 (20.8×17.8 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵)

※二つの蛤と熨斗紙などが描かれる。

☆〈ほら貝〉 (20.5×17.0 東京国立博物館/オランダ国立民族学博物館蔵)

※小高い丘に立って松の木にいる鳥を吹き矢で捕らえようとしている男。

958 ほら貝

☆〈まくら貝〉 (20.6×18.1)

☆〈ますほ貝〉 (19.7×17.4)

※盆台に砂富士が飾られ、その前の松の盆栽には扇が添えられる。

☆〈みぞ貝〉 (19.9×17.6 ベルギー王立美術歴史博物館蔵)



※「みぞ」を敷居の溝に見立て、敷居で遊ぶ子どもを描く。背中に男の子を乗せて馬になった女の子が、敷居の上でうつ伏せになり、もう一人の女の子と遊んでいる。縁側には鞆や羽子板が置かれている。

☆〈みなせ貝〉 (19.8×17.8)

※名所の六玉川で、井出の玉川（「山吹の玉川」とも）を想わせる、川を馬で渡る貴人が描かれた屏風の手前には、籠の中に盆石の蛙が置かれ、その傍らに三冊の本がある。太田道灌が雨に遭い、民家に立ち寄り蓑を借りようとしたところ、家の娘が山吹の花を差し出し「実の（蓑）一つだになきぞ悲しき」と詠んだ故事からの着想で、「みなせ」は「みなし（実無し）」から「山吹」を連想し、更に「山吹の玉川」の図を屏風に描いたものと思われる。柳々居辰斎の『歌仙貝』の〈みなし貝〉からの影響が指摘されている。

☆〈みやこ貝〉 (20.2×17.9 オランダ国立民族学博物館蔵)

※渡し舟に乗る人々。野菜売り、行商の男、笠を被って鳥刺しの棹を立てている男、漫才師などを乗せて、船頭が船尾で棹をさしている。

☆〈紫貝〉 (20.1×17.8 オランダ国立民族学博物館蔵)

※地曳網を引く集団が二組描かれる。「紫」は鯛を指す女房詞であることからの鯛漁の連想。

狂歌賛「紫貝をよめるせとう歌 榎廼屋下蔭 朝霞たつ
るねかひもしほもかなひぬむら
さきのかひあら春にあひきするとて」「紫貝を物の名に
四方歌垣真顔 江の島霞わたれる片瀬村さきの干潟に今や
なるらん」
959 紫貝（千葉市美術館）



☆〈ものあら貝〉 (20.1×17.6 ベルギー王立美術歴史博物館/クラクフ国立美術館蔵)

※上野不忍の池の太鼓橋を渡り図の右に描かれた弁財天へ参詣する人々。池には数羽の鴨が泳ぎ小舟が一艘浮かんでいる。

☆〈わすれ貝〉

●摺物『榎垣連五番之内和漢画兄弟』（「さるがきれん」とも。色紙判色摺。5枚揃物。月癡老人為一筆。各平均 20.6×18.1 東京国立博物館/ウイーン国立工芸美術館/千葉市美術館蔵）

※空満屋榎垣真枝の率いる狂歌師連による歳旦摺物。「画兄弟」とは、無関係の画題を奇抜な趣向で結びつけるもので、和漢の人物を結びつけて描く。

☆〈司馬温公と柴田勝家篠塚伊賀守〉

※司馬温公は司馬光（1019～1086）のこと。中国北宋代の儒学者・歴史家・政治家。『資治通鑑』（1065 編年体の歴史書）の著者。幼少より神童といわれた。子どもの時、庭で遊んでいたところ、仲間の子どもの水がめに落ちたが、誰も助けなかった中、温公は石を投げて甕を割って水を抜き、子どもを救ったという。柴田勝家は、織田信長の武将。

元亀元年（1570）の6月、長光城を守備した時に水攻めに遭い、残った水甕を割って覚悟を示し、その後、佐々木承禎軍を破ったことで「甕割り柴田」と呼ばれたという。

図は、鎧姿の柴田勝家が長槍の柄の先を大甕の割れ目から出る水に突き立てている。側で幼児姿の温公が石を抱え上げている。

☆〈諸葛孔明と牛若丸〉

※諸葛孔明（諸葛亮。181～234。蜀・漢の建国者劉備を補佐した政治家）が琴を弾き、牛若丸（源義経の幼名。1159～1189）が笛を吹く図。楽器に抛って結びつけた図。「武侯（諸葛孔明）弹琴して仲達（司馬懿）を退く」（『三国志演義』巻95の文言）からの図。仲達は敵の諸葛孔明を苦しめた武将。

☆〈趙雲と武内宿禰〉

※趙雲（？～229。後漢から蜀漢時代の将軍）が、槍を小脇に抱え、鎧を着た子どもを背負った武内宿禰（「たけうちのすくね」「たけしうちのすくね」とも。景行天皇14年～？）と対峙している。『日本書紀』によれば、宿禰は神功皇后の新羅遠征の際に功労があった。

☆〈藺相如と児島高德〉

※藺相如（生没年不詳）は、中国戦国時代、趙の名臣で「刎頸の交わり」で有名な人物。児島高德（生没年不詳。南北朝時代の武将）は、捕えられた後醍醐天皇を励ますために、在所の庭に忍び込み、桜の木に「天莫空勾踐 時非無范蠡」（天よ、敗れた国王の勾踐を見殺しにしないように。国王を救った忠臣の范蠡がいないわけではないから）を描きつけた故事が『太平記』にある。

図は、橋の欄干に文字を描きつけようとする藺相如と、桜の幹に詩を書きつけようと筆先を舐める鎧姿の児島高德を描く。



960 藺相如と児島高德（東京国立博物館）

☆〈劉備と佐々木高綱〉

※劉備は（161～223）後漢末期から三国時代の武将、蜀漢の初代皇帝。佐々木高綱は（1160～1214）平安末期～鎌倉時代にかけての源氏側の武将。宇治川の戦いで梶原景時との先陣争いで有名。

●狂歌絵本『草のはら』（一冊。畑零餘子（不詳）の追善本。六樹園（石川雅望）撰。320名の狂歌を掲載。北斎の他、北溪、酒井抱一等による挿絵。彷徨亭版。22.6×15.8大妻女子大学図書館蔵）

※「Web 浮世絵文庫資料館：絵入り狂歌本年表」及び「大妻女子大学図書館和本文庫データベース」による。

●艶本『艶本多満佳津良』（この頃か。色刷半紙本。三冊。口絵の構成と書き入れは北斎。絵は阿栄と思われる）。序文に「はいかゝれる。女好キの隠人たはむれに誌」とある。「女好キの隠人」は、「女好軒」などの隠号を使った溪斎英泉の号と思われる（有

光書房『北齋』第 12 刷、及び『芸術新潮』1989 年 3 月号「北齋艶本への挑戦」林美一 p40 より)。一方で、溪斎英泉の自画作との見方もある(『絵入春画艶本目録』p166)。

●艶本『萬福和合神』(1 月。半紙本色摺。三冊。序文は和合堂主人(北齋の隠号)記。全編北齋の画作。22.5×15.7 国際日本文化研究センター/浦上蒼穹堂蔵)

※金銀摺や紅雲母摺まである豪華本もあるが初摺本は稀で、一般には改板した粗摺本が流布しているという(『芸術新潮』1989 年 3 月号「北齋」特集号)。



おさね(富家の娘)とおつび(貧家の娘)の人生を描く物語仕立ての艶本(国際日本文化研究センター蔵)。

961『萬福和合神表紙』(国際日本文化研究センター)

※序文「腎命帳(注:腎命は腎水<精液>を意識したもので、神名帳<神社名や神名を記した名簿のもじり>)曰、両脚山中小池(注:女陰のこと)有り。一眼(注:男根のこと)ノ毒龍又出入ス。時アリテ山谷ノ神ト現シテ、臍下(注:女陰のこと)ニ鎮座ス。出没自在ニシテ、能ク人種(注:子種のこと)ヲ降タス。神力ヨク雲雨(注:男女の交合のこと)ヲ施シ、深情ヨク英雄(注:好色のこと)ヲ拉ク。男ハ女ヲ待テ悦ビ、女ハ男ヲ迎テ行ク(注:気をやること)。若シ一枕ノ(注:枕を共にすること)信アラハ、靈宝ノ徳、其ノ掌ヲ指スカ如シ(注:掌を指すように明らかである)。

和合堂主人記(注・ルビ・句読点は筆者による)。

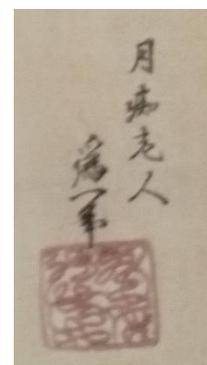
●肉筆画「寿老人」(絹本着色一幅。不染居北齋老人画。印北斗一星高。84.8×29.3 北齋館蔵)

※松の木の下で佇む寿老人の図。「北斗一星高」の印は珍しい。寛政 11 年(1799)肉筆画「加藤清正公」でも用いている。

●团扇画「梅に鶯」(この頃か。着色。月痴老人為一筆。印さきのほくさゐ。23.5×31.5 有田屋清右衛門版。ギメ美術館蔵)

※開き始めた花や蕾の多い梅の木をめがけて飛んでくる一羽の鶯。印に、この年のみに用いられたと思われる「さきのほくさい」が捺される。

有田屋から出した团扇絵は他になく、月痴老人為一筆と署名した团扇絵も他に例がないという(2017 年『北齋富士を超えて展図録』p155 による)。



962 梅に鶯(ギメ美術館)

印号「さきのほくさゐ」

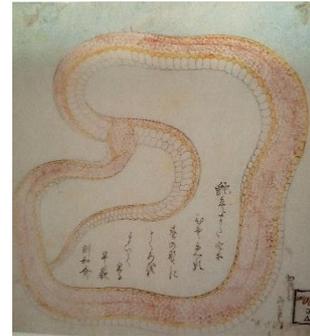
【落款に年齢を記す】

●摺物「桃園三契」（「玄德 関羽 張飛」とも。角判色摺。行年六十二翁葛飾為一燈下席上画。ウイーン国立工芸美術館蔵）

※『三国志演義』の中の、桃園において劉備、関羽、張飛が義兄弟の契りを交わす場面を描く。書画会での作。狂歌「青柳の糸を結ひてとかせしと みつあひによる春の初風空満屋楯壇（「さるがき」とも）真枝」が記される。北斎の年齢が落款に示される。

●摺物「葛飾玄武二番続 蛇」（色紙判。色摺。かつしか為一筆。葛飾連による。19.3×18.5 オランダ国立民族学博物館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※玄武は、北方を支配する水神。東西南北を支配する四神（東の青龍、西の白虎、南の朱雀）の一。色紙判の四つ角に沿うように、画面いっぱいにとぐるを巻く白蛇。狂歌「蛇はまた穴にひそめる春の野にとくろをまいて出る早蕨 訓和齋」が記される。北斎は妙見を信仰し（北極星と七星の神格化）、その守り神である亀や蛇を多く描いている。



963 葛飾玄武二番続 蛇（『2007 北斎展図録』より転載 オランダ国立民族学博物館）

●摺物「亀」（色紙判。色摺。かつしか為一筆。19.9×18.1 オランダ国立民族学博物館蔵）

※文々舎蟹子丸の葛飾連による。図の右下に顔を向けた一匹の亀。狂歌「浮きたちし亀の模様は万代のよはひかさぬる屠蘇盃 文々舎」が記される。

文政5 (1822)	壬午 63 歳	画狂人北斎、不染居為一、葛飾北斎、北斎改为一、	瓢箪
の形、葛しか、一人人形、(画狂人北斎) : こと (52 歳)、阿美与 (34 歳)、孫 (13 歳)、			
阿栄 (25 歳)			

◇この頃、江戸でにぎり寿司が作られる。

◇春より江戸葺屋町河岸で唐人踊りの興業するも2月に禁止となる。

◇閏1月6日、式亭三馬没 (47)。

◇4月29日、イギリス船、浦賀に入港。薪水を要求。

◇6月8日、烏亭 (談洲楼) 焉馬没 (80)。

◇8月、流行していた投扇遊びが禁止となる。

◇版元・角丸屋甚助、営業不振のため、この頃までに『北斎漫画』初編版木 (永楽屋東四郎所収) 以外の二編から十編までの版木を永楽屋東四郎に売却する (永田生慈『葛飾北斎の本懐』平成29年月。角川選書 p93)。

○横山崱山「花洛一覽図」

○間宮林蔵「蝦夷全図」。

○十返舎一九、初編 (1802) から21年かけた『東海道中膝栗毛』が完成。

★長崎オランダ商館長ヤン・コック・ブロムホフ（Jan Cock Blomhoff）二度目の江戸参府（2月6日～6月4日。江戸滞在3月27日～4月21日）。このとき同行の河原慶賀を通してブロムホフは、北斎にオランダ製の紙を何枚か渡して絵を発注したといわれる。絵は文政9年（1826）に次の商館長スチュレルレル（Joan Willem de Surler）に渡った。

【長女阿美与、離婚して孫と同居する】

★この頃、阿美与、柳川重信と離婚（『北斎美術館3美人画 p154』）。北斎の元に戻り、息子（北斎の孫）とともに同居する（文政元年説あり）。

※『曲亭来簡集』（川瀬一馬編）に所収されている「曲亭記」には次の記載がある。

「北斎為一ハ一男一女あり。長男名ハ富ハ短命なりき注1。女子ハ柳川重信に嫁したるが、不縁にて帰りしより父の許にをり又嫁せず。この女子の生みたる外孫注2を北斎寵愛して養育したるが、人となるに及びて放蕩なり。依って之を重信に返せしに、鶯の者に成らん事を欲して、実父の家をもあらずなりにき」（「国立国会図書館デジタルコレクション」より）。

注1) 一男一女あり。長男名ハ富ハ短命なりき：一男一女は事実に合わないが、『曲亭来簡集』記載の年代を考慮する必要がある。また、長男の富之助は文化9年（1812）26歳で没しているとの説（リチャード・レイ『伝記画集 北斎』p96）もある。

注2) 外孫：この孫は後に北斎を悩ますことになる。名は不明。

★春頃、根岸御行松注にあつた友人の三世堤等琳宅に寄宿するか（北斎の『北斎骨法婦人集』序文による。〈関口政治郎臨写『北斎骨法婦人集』で紹介（明治30年刊）〉）。

「去文政五年●かつしか北斎翁。根岸御行松雪山等林宅に同居せし時」とある。

注) 根岸御行松：現東京都台東区根岸4-9-5 西行院不動堂内。根岸の大松として親しまれた。この辺りに寄宿したか。

●読本『遠の白波』（十返舎一九作。画工名なし。鶴屋金助版。国立国会図書館蔵）

※見返しに角書「一本駄右衛門東海横行記」とある。画工名がないが、画風、広告から北斎と認められているという（『年譜』による）。序文末に「文政五壬午孟春十返舎一九誌」とある。

※文政五年刊『太田道灌雄飛録』巻四の巻末広告に「葛飾北斎戴斗」とある由（「Web 浮世絵文献資料集」による）。

また、鶴屋金助の「文政 壬午春新冊子目録」に「一本駄右衛門横行雑話 遠の白波 全三冊 十返舎一九著 葛飾北斎画」とあるという（『年譜』による）。

●絵手本『北斎骨法婦人集』（大本墨絵。表紙の図を入れ全17図。表紙に画狂人北斎画（関口政治郎による）。24.9×17.8 国立国会図書館/大英博物館蔵）

※出版は明治30年（関口政治郎臨写版）。文政5年（1823）、根岸の御形松近くの堤等林宅に寄宿したときに描いたもの。婦人の様々な仕草を墨一色でスケッチ風に描く。

国立国会図書館デジタル・コレクション版の序文。

「此絵ハ去文政五午年の春、かつしか北斎翁、根岸御形の松、雪山等林（琳）の宅に同居せし時、婦人画をば種々かけり。其下画を等林弟子何某、翁より申請、後日一卷となせり。

其後或る金満家の宝蔵に入、それをまた（エンヤラヤツト）で我が手にいれたり。ひして楽しむこゝろねに、さすがわ翁の骨法をひろく世界へみせばやと、しあんなかばへつけ智へハ。かの北斎の画卷より美人ひとりぬけ出て（モシアナタ）ネエーいつそ版にしましナ。はやく世に出しておくんなんし。後生がますよ。またみなはんも見世へ出次第（キツトザマスヨ）ト云ふ。此きつとぎますよと云ふ事は、多分買に来てくれといふ事なるべし

明治廿八年未の初春 廓津通書」（ルビ、読点は筆者による）

964 北斎骨法婦人集（国立国会図書館・部分）



表紙は鼠がねずみ取りに足を掛け、棒を担ぐように両腕を背中に回している図。扉には二人の婦人の座礼の姿、次には子どもが三味線を弾くのに驚く婦人の様子、二人の婦人が対面して三味線を弾く様子、思案気に巻紙に手紙を書く様子、花魁と禿の立ち姿、団扇を持って涼む二人の婦人の立ち姿、裸で背中を手いで洗う婦人の後ろ姿と裸の老婆が桶を持って立っている姿、花笠を被り両手に花笠を四つ手に持って踊る婦人の様子などが続けて描かれる。

●肉筆画「餅搗き図」（この頃か。絹本着色一幅。不染居為一筆。印葛しか。54.3×85.0フリーア美術館蔵）

※餅搗きをしている男の杵に餅が粘りつき、悪戦苦闘の様子。女も必死に臼を押さえている。その様子を指を指して笑っている男と、手桶を持っている男がいる。

桃本雛麻呂狂歌「若なりし 顔見る春に 移るとて 餅は鏡に とらせけるかな」が記される。

965 餅搗き図（フリーア美術館：livedoor.blogより転載）



●扇面画「紅葉に鳥図」（「もみじ」と読むか。この頃か。紙本墨画淡彩一幅扇面一面。不染居為一筆。印一人人形。上弦45.9、下弦20.7×16.5フリーア美術館蔵）

※羽を膨らませた一羽のカラスの前に紅葉が三枚描かれている。

●錦絵「重箱に煮干」（不染居為一筆。21.3×18.6 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※狂歌に「うまやき」とあるので、『馬尽』の一つか（『長瀬武郎コレクション葛飾北斎図録』より）。重箱の中に丸い食べ物が入っており、くくりつけた煮干が側に置かれている。

●摺物『馬尽』（1月。色紙判色摺。揃物。不染居為一筆。印：瓢箪の形）

※午年にちなみ四方側の狂歌師により刊行した摺物だが馬の絵はない。秋長堂物梁（二世）、森羅亭万象（二世）、不染居為一らの撰。全30図。瓢箪形の印は、瓢箪から驢馬を出す中国の仙人、張果老注に因んだものとされ、刻印ではなく捺印である（2005年『北斎展図録』解説）。揃物名と副題の入った瓢箪形印のない絵もあり、「駒形堂」「駒鳥」「馬除」「鞍馬牛房」「馬貝」「駒曳銭」がそれである。

注) 張果老：張果。「老」は敬称。中国の代表的な仙人である「八仙」の一人。則天武后や玄宗に招かれ二度の死後にそれぞれ息を吹き返したという (Wikipediaによる)。白い驢馬に乗り一日に数万里を行き、休息時には驢馬を畳んで腰の瓢箪に収め、乗るときには瓢箪に水を吹きかけると再び驢馬が現れたという。

☆〈轡町〉 (20.8×18.2 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/島根県立美術館：永田コレクション/アムステルダム国立美術館/千葉市美術館蔵)

※図は、「吉原細見注1」と書かれた正月祝いの紙札と、若侍の名古屋山三郎注2が遊郭を訪れるところを描いた巻物(「名古屋山三郎絵巻」)を組み合わせる。轡町は、遊郭を轡屋ともいったところから遊郭を指す。画中に「文政五壬午年正月改」とある。

注1) 「吉原細見」は、江戸の吉原遊郭のガイドブック。主に店ごとの遊女名を記し、年2回発行された。

注2) 名古屋山三郎は、安土桃山時代の武将で、妻は出雲阿国といわれる。共に歌舞伎の祖と伝えられる。戦国の美少年として有名。

☆〈竹馬〉 (20.6×18.1 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/島根県立美術館：永田コレクション/アムステルダム国立美術館/大英博物館/千葉市美術館蔵)

※この竹馬は、肩に担いで荷物を運ぶために竹を組んだもので、天秤棒のようなもの。その竹馬の前には脇息のような箱に煙管入れ、煙草入れ、煙草盆など。竹馬にかけた左の敷物には梅の花が染められ、右の敷物に染められた卍印は、森羅亭万象率いる卍連のマークを示す。梅見の遊興を思わせる図。

☆〈駒鳥〉 (21.0×18.6 アムステルダム国立美術館/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/島根県立美術館/千葉市美術館/馬の美術館蔵)

※餌入れをつけた止まり木に止まる駒鳥の足に赤い紐がつけられている図。瓢箪形印無し。蹴毬亭諸房、千亀萬亀、秋長堂物梁、森羅万象の狂歌が添えられる。

「ことし七ツ目の午の春を祝ひて」とあるので誰かの七歳の祝い物と思われる。

966 駒鳥 (千葉市美術館)



☆〈駒菖蒲〉 (20.7×18.0 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/アムステルダム国立美術館/千葉市美術館/中右コレクション/馬の博物館蔵)

※木の枝にとまった赤い鳥の図柄のある根付けの付いた駒菖蒲柄の煙草入れと、とじた扇子を組み合わせた図。側には、紙入れと思われる螺鈿の小箱がある。菖蒲は勝負や尚武に通じ、武士が好んだもの。「富士霞む腰明き熨斗目注提ものも 雪解に見ゆる春の駒形鹿寿庵蝠麿」、「正月も余慶目出たき見徳の 富は潤ふ千金の春 秋長堂物梁」の狂歌が記される。

注) 熨斗目：元は武士の正装。無地で袖、腰の辺りに大柄な縞模様がある。現代では七五三の男子が着たりする。